

河南町文化財調査報告第2冊

大阪芸術大学グラウンド等造成に伴う
東山遺跡発掘調査報告書

1998年 9月

河南町教育委員会



94年度調査地遠景（西から）



94年度調査地遠景（西から）



1号土壤墓全景（南西から）



2号土壤墓全景（北東から）



1号土壤墓出土鏡 (徑6.5cm)



2号土壤墓出土鏡 (徑8.1cm)



2号土壤墓出土鐵製品

左：鉞 (長さ24.7cm)

中央：劍 (残存長15.6cm)

右：斧 (長さ7.7cm)

は し が き

大阪府の東南部、河南町と太子町にまたがる丘陵上には、高安千塚、平尾山千塚と並ぶ、府下でも有数な群集墳として知られる一須賀古墳群が分布しています。また、周辺には7世紀の王陵をはじめ官人層の墳墓も多く分布しており、古代国家成立期のわが国において重要な地域であったといえます。

昭和40年代前半の高度経済成長の波は南河内にも押し寄せました。河南町でもこの一須賀古墳群の一画で宅地造成をする計画が持ち上がり、大阪府教育委員会による分布調査が行われ、古墳以外にも弥生式土器の散布地と窯跡が確認されました。これが東山遺跡発見の発端であります。その後の発掘調査で弥生土器の散布地は弥生時代の大規模な集落であることがわかりました。弥生時代の集落跡は宅地造成工事によって消滅しましたが、開発計画地のうち古墳が密集する29haは大阪府により公有化され、昭和61年に府立近つ飛鳥風土記の丘として公開されました。また、平成6年には風土記の丘に隣接して府立近つ飛鳥博物館もオープンし、貴重な文化遺産が広く公開されることとなりました。

昭和39年に浪速芸術大学として河南町東山に開校された大阪芸術大学では、グラウンド及び体育館用地を造成することとなり、昭和59年に大阪府教育委員会による試掘調査が行われ弥生時代後期の建物や古墳がみつかりました。これを受けて河南町教育委員会では昭和61年度から、途中の中断期間もありましたが足掛け10年にわたる調査を行い、弥生時代後期から中世にかけての遺構がみつかるなど多大な成果をおさめることができました。これらの内容は本書で報告するところであります。

最後になりましたが、今回の発掘調査実施にあたり、多大なるご協力を賜った大阪芸術大学をはじめといたします関係諸機関、諸氏に深く感謝の意を表しますとともに、今後とも文化財保護行政に対して一層のご理解を賜りますようお願い申し上げます。

平成10年9月

河南町教育委員会
教育長 福田 悅一

例　　言

1. 本書は、大阪芸術大学グラウンド等造成工事に伴って実施した東山遺跡発掘調査報告書である。
2. 第1次調査は、河南町教育委員会事務局社会教育課木下光弘、赤井毅彦を担当者として、第2次調査は赤井毅彦を担当者として実施した。調査の期間は下記のとおりである。
　　第1次調査（外業）昭和61年11月～昭和62年4月　（内業）昭和61年11月～昭和62年7月
　　第2次調査（外業）平成6年12月～平成7年7月　（内業）平成7年1月～平成8年5月
3. 本事業に要した費用は、学校法人塙本学院が負担した。

4. 調査の実施にあたっては、次の諸氏の参加があった。記して感謝する。

（第1次調査）

赤松 圭子	市田 安男	伊東 清子	海蔵 敏子	要 美由紀	河崎 尚
川原 潤子	庄治しのぶ	田中須磨子	高原 義仁	辻 佳久	出崎 智嗣
徳田 正和	中津 陽介	野口 昌敬	原田 博史	東山 京子	平見千栄子
福井十美子	三浦みどり	宮野前俊哉	山口 芳弘	山田 忠之	

（第2次調査）

宇野 紋美	梅崎 友恵	加藤 弘子	河合 道子	多田 恵子	樋口 尚美
前田 さや	吉田 淳子				

5. 本書で使用した遺物写真については、(財) 大阪府文化財調査研究センターから提供を受けたもの以外は、有限会社阿南写真工房に撮影委託した。

6. 本書の執筆・編集は赤井が行った。

7. 本書の遺構実測図に表示する方位は特に断りのない限り国土座標第VI系に基づく座標北、標高はT.P.を使用した。

8. 94年度調査で使用した土色名は、農林水産省監修『新版 標準土色帖』1987年版による。

9. 調査の実施及び本書の作成にあたっては、下記の関係機関、諸氏に協力を受けた。記して謝意を表す。

大阪府教育委員会	学校法人塙本学院
大阪芸術大学	株式会社凌沼組
株式会社オオバ	前田建設工業株式会社・大成建設株式会社共同企業体
株式会社長谷川工務店	財團法人大阪府文化財調査研究センター
池田貴則（太子町教育委員会）	岩崎二郎（大阪府教育委員会）

北野耕平（神戸商船大学）
芝野主之助（大阪府教育委員会）
西川寿勝（大阪府教育委員会）
森下 章（京都大学）
和田晴吾（立命館大学）
(順不同。所属は当時)

小林義孝（大阪府教育委員会）
鍋島隆宏（太子町教育委員会）
広瀬和雄（大阪府教育委員会）
山本 彰（大阪府教育委員会）

10. 本調査における遺物、写真、カラースライド、実測図等は河南町教育委員会において保管している。

目 次

はしがき

例言

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過	1
第Ⅱ章 地理的・歴史的環境	3
第Ⅲ章 調査の成果	7
第1節 はじめに	7
第1項 既往の調査	7
第2項 遺跡の立地	9
第2節 86年度調査区	11
第1項 はじめに	11
第2項 1号墳	12
第3項 2号墳	16
第4項 3号墳	18
第5項 火葬墓	19
第6項 土坑2	21
第7項 小結	21
第3節 94年度A調査区	22
第1項 はじめに	22
第2項 火葬墓	22
第3項 石組溝	25
第4項 土坑1	26
第5項 小結	26
第4節 94年度B調査区	27
第1項 はじめに	27
第2項 竪穴住居1	27
第3項 竪穴住居2	32
第4項 竪穴住居3	34
第5項 竪穴住居4	34
第6項 竪穴住居5	37
第7項 竪穴住居6	38
第8項 その他の遺構	39
第9項 小結	41
第5節 94年度C調査区	43
第1項 竪穴住居	43
第2項 1号土壙墓	51
第3項 2号土壙墓	51

第4項 その他の遺構	56
第5項 小結	64
第IV章 まとめ	65

卷頭図版目次

- 卷頭図版1 94年度調査地遠景（西から）
 卷頭図版2 1号土壤墓全景（南西から）、2号土壤墓全景（北東から）
 卷頭図版3 1号土壤墓出土鏡、2号土壤墓出土鏡、同出土鉄製品

挿図目次

第1図 試掘トレンチ位置図(1/4,000)	1
第2図 調査区配置図(1/3,000)	2
第3図 東山遺跡周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
第4図 大阪府教育委員会調査地遺構配置変遷図	7
第5図 東山遺跡周辺地形図(1/10,000)	8
第6図 東山遺跡周辺遺跡分布図2(1/10,000)	10
第7図 1号埴実測図(1/100)	11
第8図 1号埴出土形象埴輪実測図(1/4)	12
第9図 86年度調査区遺構配置図(1/300)	13~14
第10図 1号埴出土円筒埴輪実測図(1/4)	15
第11図 2号埴出土埴輪実測図(1/4)	16
第12図 2・3号埴実測図(1/100)	17
第13図 3号埴出土埴輪実測図(1/4)	18
第14図 火葬墓・土坑1実測図(1/10)	18
第15図 火葬墓周辺遺構配置図(1/50)	19
第16図 火葬墓・土坑1出土遺物実測図(1/4、1/2)	20
第17図 土坑2実測図(1/20、1/2)	20
第18図 火葬墓実測図(1/10、1/4)	22
第19図 94年度A調査区遺構配置図(1/200)	23~24
第20図 石組溝実測図(1/40)	25
第21図 土坑1実測図(1/40)	26
第22図 竪穴住居1実測図(1/50)	28
第23図 94年度B調査区遺構配置図(1/250)	29~30
第24図 竪穴住居出土遺物実測図(1/4)	31
第25図 竪穴住居2実測図(1/80、1/40)	33

第26図	竪穴住居3出土遺物実測図(1/1).....	34
第27図	竪穴住居3実測図(1/50)	35
第28図	竪穴住居4実測図(1/50)	36
第29図	竪穴住居4実測図(1/50)	37
第30図	竪穴住居6実測図(1/50)	39
第31図	溝3実測図(1/60、1/4).....	40
第32図	溝2実測図(1/60、1/4).....	41
第33図	土坑1・2実測図(1/40)	42
第34図	竪穴住居実測図(1/50)	44
第35図	94年度C調査区遺構配置図(1/500)	45~46
第36図	竪穴住居出土遺物実測図(①/1)	47
第37図	竪穴住居遺物出土状況(1/20)、土層断面図(1/50)	48
第38図	竪穴住居出土遺物実測図(1/4)	49
第39図	竪穴住居出土遺物実測図(1/4)	50
第40図	1号土壙墓実測図(1/20)	52
第41図	2号土壙墓実測図(1/20)	53
第42図	1・2号土壙墓出土遺物実測図(1/1、1/2)	54
第43図	土壙墓と古墳の位置関係(1/1,000)	55
第44図	土器棺墓3実測図(1/10、1/4)	56
第45図	土器棺墓2実測図(1/10、1/4)	57
第46図	包含層出土遺物実測図(1/4)	58
第47図	土器棺墓1実測図(1/10、1/6)	58
第48図	建物1実測図(1/60)	59
第49図	建物2実測図(1/60)	60
第50図	円形周溝遺構実測図(1/60、1/10、1/6)	61
第51図	落とし穴実測図(1/40、1/4)	62
第52図	焼土坑1・2実測図(1/40)	63
第53図	土坑1実測図(1/40、1/4)	63

表 目 次

第1表	竪穴住居一覧.....	67
-----	-------------	----

図 版 目 次

図版1	86年度調査区 調査区全景、1~3号墳全景
図版2	86年度調査区 1号墳検出状況(南から)、同全景(南から)

- 図版3 86年度調査区 1号墳全景（北から）、同完掘状況（北から）
- 図版4 86年度調査区 2・3号墳検出状況（北西から）、2号墳検出状況（南西から）
- 図版5 86年度調査区 2号墳埴輪検出状況（南西から）、2・3号墳全景（南東から）
- 図版6 86年度調査区 2号墳全景（南西から）、3号墳全景（南西から）
- 図版7 86年度調査区 1号墳出土円筒埴輪
- 図版8 86年度調査区 1号墳出土形象埴輪
- 図版9 86年度調査区 2号墳出土埴輪
- 図版10 86年度調査区 火葬墓周辺（北東から）、同（東から）
- 図版11 86年度調査区 火葬墓検出状況（北東から）、同全景（北東から）
- 図版12 86年度調査区 土坑2全景（南西から）、同出土刀子
- 図版13 94年度A調査区 調査区全景（南西から）、同全景
- 図版14 94年度A調査区 火葬墓検出状況（南から）、同蔵骨器蓋、同蔵骨器
- 図版15 94年度A調査区 石組溝全景（南西から）、同細部（南西から）、同細部（南から）
- 図版16 94年度A調査区 北西部全景（南東から）、土坑1全景（北東から）
- 図版17 94年度B調査区 調査区全景（西から）、同全景
- 図版18 94年度B調査区 橫穴住居1全景（北西から）、横穴住居2全景（北西から）
- 図版19 94年度B調査区 橫穴住居2近景、同出土遺物、横穴住居5出土遺物
- 図版20 94年度B調査区 橫穴住居3全景（北西から）、横穴住居4全景（北西から）
- 図版21 94年度B調査区 橫穴住居5全景（北西から）、横穴住居6全景（北西から）
- 図版22 94年度C調査区 調査区全景（北東から）、同全景
- 図版23 94年度C調査区 橫穴住居全景（北西から）、同全景（北東から）
- 図版24 94年度C調査区 橫穴住居中層遺物出土状況（北東から）、同近景
- 図版25 94年度C調査区 橫穴住居出土遺物
- 図版26 94年度C調査区 橫穴住居出土遺物
- 図版27 94年度C調査区 1号土壤墓全景（南西から）、同アゼ断面（南西から）
- 図版28 94年度C調査区 1号土壤墓半掘状況（南西から）、同完掘状況（南西から）
- 図版29 94年度C調査区 1号土壤墓遺物出土状況、同小口部粘土断割り状況
- 図版30 94年度C調査区 2号土壤墓全景（南西から）、同完掘状況（南西から）
- 図版31 94年度C調査区 2号土壤墓遺物出土状況
- 図版32 94年度C調査区 土器棺墓2検出状況（東から）、同完掘状況（南東から）、同使用土器
- 図版33 94年度C調査区 土器棺墓3検出状況（南から）、同完掘状況（南から）、同使用土器
- 図版34 94年度C調査区 土器棺墓1検出状況（南東から）、同完掘状況（南東から）
- 図版35 94年度C調査区 建物1全景（南から）、建物2全景（南西から）
- 図版36 94年度C調査区 円形周溝造構全景（北東から）、同遺物出土状況（東から）、同出土遺物
- 図版37 94年度C調査区 落とし穴全景（南東から）、同完掘状況（南東から）、同杭出土状況
- 図版38 94年度C調査区 焼土坑1全景（南西から）、焼土坑2全景（南東から）

第Ⅰ章 調査に至る契機と経過

一須賀古墳群内において、大規模な住宅開発計画が持ち上がったのは、高度経済成長の波が日本全国に押し寄せていた昭和42年から43年にかけてのことである。大和田地株式会社による約66haの阪南ネオポリス宅地造成計画である。大和田地株式会社と協議をすすめた大阪府教育委員会は、より正確な遺跡分布状況を把握するため昭和43年5月から分布調査を行った。この分布調査では、古墳13基、窯跡2基、弥生式土器散在地4ヶ所が確認された。その後、43年から44年にかけて行われた本調査で、A・B・C・D地区の4ヶ所は大規模な弥生時代集落であることが判明した。東山遺跡の本格的調査の端緒である。その後、第1期計画については最終的に宅地化（現河南町大宝）されたが、古墳が最も集中する第2期開発計画は中止して古墳群を保存することとなり、昭和45年から48年にかけて大阪府教育委員会により29ha（古墳数102基）が公有化され、昭和61年に大阪府立近つ飛鳥風土記の丘として開園されたところである。

昭和59年には大阪芸術大学敷地拡張計画に伴う大阪芸術大学構内の試掘調査が大阪府教育委員会によって実施された。前述のA・B地区の北約400mにあたるところである。試掘調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡、古墳の周濠と考えられる溝など、調査地域のほぼ全域で遺跡の存在が確認された。

この内、弥生時代後期の集落の存在が予想される尾根を造成区域からはずして、グラウンドと体育館用地を造成する計画が大阪芸術大学からなされた。これを受けて河南町教育委員会では、造成予定地内で試掘調査によって遺構が確認された部分のうち約5,800m²の発掘調査を昭和61年度に実施した。その後、開発計画の進捗状況から約8年の中断期間があったが、都市計画法による開発許可が平成6年10月におりたため、同年12月から残りの部分の発掘調査を実施することとなった。

また、平成7年1月になって府道柏原駒ヶ谷千早赤阪線山城バイパス整備事業が具体化した。大阪府富田林土木事務所と学校法人塙本学院との間で協議が行われ、大阪芸術大学内を通る部分については大学の造成計画と合わせて整備することとなり、道路部分の発掘調査は造成の発掘調査と同時に、また調査費用についても学校法人



第1図 試掘トレンチ位置図 (1/4,000) 試掘調査報告書から転載

塙本学院が負担することで協議が整った。これを受けて河南町教育委員会では道路工事で影響を受ける部分に調査区を拡張して対応することとなった。なお、道路部分はC調査区の南東部にあたり、本来ならばD調査区として別にすべきものであるが、調査の都合上C調査区に含めて一体として調査した。

第2次の発掘調査は、平成6年12月からA・B・C調査区の順に着手し、平成7年7月にC調査区の調査が終わり現地での調査は完了した。

調査終了近くになって、調査で得られた成果を広く一般に公開する目的で、平成7年6月4日に現地説明会を開催した。

また、調査によって検出された遺構の保存協議を行ったが、検出された位置関係上現地での保存は体育館及びグラウンドの用地が確保できなくなるため、代替案として2号土壙墓の実物大模型と調査区を含めた周辺の地形模型、2号土壙墓出土物のレプリカを作成することとなった。これら模型は建設中の体育館内で展示される予定である。



第2図 調査区配置図 (1/3,000)

第Ⅱ章 地理的・歴史的環境

大阪府南河内郡河南町は大阪府の東南部に位置する。北は太子町、西は富田林市、南は千里赤阪村、東は葛城山の頂をもって奈良県北葛城郡當麻町・新庄町、御所市と接している。北には大和の飛鳥に通じる竹内峠があり、葛城山の南、金剛山との間には葛城の地へと通じる水越峠がある。また、西側には石川が北流し、陸路・水路の交通の要衝といえる。

葛城山の西にはその前山である三つの山塊がある。一番北、太子町との間にまたがる山塊の北側の丘陵上に一須賀古墳群が存在する。この山塊の西側にもいくつかの丘陵がのびており、この丘陵上に営まれたのが南河内屈指の高地性集落である東山遺跡である。葛城山の前山の西側には東西約1km、南北約3kmの段丘地形がみられ、段丘上は河南町の中央にあたることから通称河南台地と呼ばれている。台地の西側は千里川が北流し石川に合流している。東側には天満川が北流し、梅川を経て石川に合流している。

地質的にみると葛城山は花崗岩類によって構成され、その前面には砂礫と粘土からなる大阪層群、段丘礫層が、さらにその前面には軟弱な粘土と砂礫からなる沖積層がある。葛城山地の北にある二上山は瀬戸内火山系に属する火山で、安山岩類で構成される二上層群からなる特殊地域である。その噴出物である長石讃岐岩（サヌカイト）は石器の材料に、凝灰岩は石棺や建築用材に、ざくろ石安山岩の風化堆積物は金剛砂という研磨剤として古くから利用されており有名である。

さて、東山遺跡周辺の歴史的環境について、石川中流域の石川谷と呼ばれる地域を中心に概観してみよう。この地域は調査が充分に及んでおらず、調査の手が及んでいない空白地帯も多いが、二上山北麓で旧石器時代の石材採掘坑や加工場が確認されており、この付近の歴史は旧石器時代に遡る。

縄文時代では、遺構は確認されていないが河南町神山遺跡・寛弘寺遺跡・山城廃寺・富田林市錦織遺跡・西板持遺跡などで縄文土器が出土している。神山遺跡では河道から縄文早期の押型文土器や中期末と考えられる加曾利E式系の文様を有する土器が、包含層から後期初頭の上器が出土している。河道出土の土器はローリングをあまり受けおらず、後期初頭の上器のみが出土する包含層があることから周辺の台地上に縄文集落の存在が考えられる。しかし、調査がすすんでいない地域があることを考慮しても、縄文時代の人々の足跡は希薄といえる。

弥生時代前期も同様で、羽曳野市東阪田遺跡で前期の土器が出土しているが、遺構は未確認である。前期の遺跡は石川と大和川が合流する付近の船橋遺跡、国府遺跡まで北上しなければならない。石川中流域に稲作のための本格的な開発が始まったのは中期になってからである。羽曳野市と富田林市にまたがる喜志遺跡・富田林市中野遺跡・甲田南遺跡で中期の集落が確認されている。喜志遺跡は石川西岸の中位段丘に位置し、東西200m、南北200mほどの範囲に集落が営まれている。集落の東、段丘の縁辺と南側で大きな溝が確認されており環濠集落の可能性が指摘されている。また、集落内では居住域と土器や石器の製作域が分かれている可能性が考えられ、集落周辺に墓域、水田域が想定でき集落構造を考える上で興味深い遺跡である。集落は中期前半に成立し、中期中頃から後半に盛行し、後期になると急速に衰退する。中野遺跡は喜志遺跡の1.5km南にある。集落の中心は石川を臨む段丘上にあり、喜志遺跡と同じく段丘縁辺で大溝が確認され、石器加工場を伴っていたようである。甲田南遺跡は、中野遺跡の南西3kmのところに位置する。やはり、石川西岸の下位段丘上に集落が営まれ、段丘縁辺には大溝が確認されている。集落の範囲は東西200m、南北150mで、北側に墓域が設けられる。遺跡の盛行時期



第3図 東山遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

1. 東坂田古墳
2. 喜志西遺跡
3. 喜志西遺跡
4. 喜志南遺跡
5. 平1号墳
6. 鋸塚古墳
7. 神門山裏山古墳群
8. 宮前山古墳
9. 真名井古墳
10. 栗ヶ池遺跡
11. 桜井遺跡
12. 中野北遺跡
13. 中野遺跡
14. 新堂寺
15. お龜石古墳
16. 新堂古墳群
17. 新堂南遺跡
18. 富田寺町内町・中路
19. 毛人谷遺跡
20. 甲田遺跡
21. 飛鳥千坂古墳群
22. 鈎伏山裏山古墳
23. 横原冢上古墳
24. 親音塚古墳
25. 猫山遺跡
26. ドンヅルボーチ遺跡
27. 牡丹洞遺跡
28. 駒ヶ谷道路
29. 壱井丸山古墳
30. お旅山遺跡
31. お旅山古墳
32. 露塚古墳
33. 河内飛鳥寺跡
34. 過法寺遺跡
35. 過法寺裏山古墳
36. 九流谷遺跡群
37. 九流谷古墳
38. 御嶽山古墳
39. 御嶽山古墳
40. チンチの森遺跡
41. 敷福寺遺跡
42. 上城古墳 (聖德太子墓)
43. 敷福寺
44. 茅田山古墳 (紀吉鹿瓢印付土器)
45. 地獄谷遺跡 (臼炒見寺)
46. 片原山遺跡 (采女女良命碑出土地)
47. 上ノ山古墳 (孝徳天皇陵)
48. 二上山城
49. 鹿谷寺跡
50. 岩屋町西方石切場跡
51. 岩屋
52. 仰山遺跡
53. 加山古墓
54. 上所遺跡
55. 葉室西峰遺跡
56. 奥城古墳 (敏達天皇陵)
57. 東山遺跡
58. モヘ古墳群
59. 向山古墳 (用明天皇陵)
60. 山山西古墳
61. 松井塚古墳
62. 佐佐寺古墳
63. 塚穴古墳
64. モンドモ古墳
65. 筑下古墳
66. 家庭所古墳
67. 石塚古墳
68. 高松古墳 (准古天皇陵)
69. 二子城古墳
70. 長野前遺跡
71. 万法院跡
72. 伝小野妹子墓
73. 大ヶ塚寺内町遺跡
74. 大ヶ塚城跡
75. 山城庵寺
76. 利井遺跡
77. 西大寺山古墳群
78. 薬山山古墳
79. 宝宮寺遺跡
80. 桜井古墳群
81. 西板御御跡
82. 従御跡
83. 佐方丸山古墳
84. イタイゴ古墳群
85. 神山遺跡
86. 神山丑神道跡
87. 大森塚古墳
88. 森屋1号墳
89. 森屋2号墳
90. 御旅所遺跡
91. 御旅所北古墳
92. 御旅所古墳
93. 金山古墳
94. 加納遺跡
95. 加納古墳群
96. 平石古墳群
97. アカハゲ古墳
98. 塚麗り古墳
99. 平石城跡
100. 高貴寺
101. 白木古墳群
102. 持尾城跡
103. 馬谷古墳
104. 弘川寺
105. 陣屋山城跡
106. 持尾古墳群

は中期後葉である。この3遺跡はいずれも石川を臨む段丘上という立地条件、集落の規模、環濠かどうかは意見の分かれるところはあるが、段丘縁辺に大溝が存在する、集落周辺の墓域のあり方など共通要素が多く、石川流域の弥生時代中期の集落を特色付けるものである。また、喜志・中野の両遺跡はサヌカイトの解石、石器の未製品、石屑やチップが多量に出土することから石器製作の集落と考えられている。これは喜志遺跡の北1.5kmにある城山遺跡も同様である。国府・船橋遺跡を拠点とし、南に1.5～3kmの間隔で集落が存在し、それぞれ有機的に結ばれていたことが想定される。そして、これら中期の集落は後期になるとなぜか突如として消滅する。

弥生時代後期になると代わって丘陵上に集落が形成されるようになる。いわゆる高地性集落である。羽曳野市駒ヶ谷遺跡・御嶽山遺跡、太子町チンチの森遺跡・葉室西峯遺跡、河南町寛弘寺遺跡・神山遺跡そして東山遺跡などである。寛弘寺遺跡では農地造成に伴う1984年から12年に及ぶ調査で痩せた尾根上に百数十棟を越える竪穴式住居が検出されている。これら後期の高地性集落は生業の場である水田とはかなりの比高を有すが、数度の建替えを行う住居がかなりあり、一時的な集落ではなく定住期間を考える必要があるだろう。その要因は戦闘的なものなのであろうか。

やがて時代は古墳時代へと移っていく。石川谷周辺では古墳時代前期前葉、いわゆる発生期の古墳は未だ確認されていない。1段階遅れて石川西岸に築かれた真名井古墳（前方後円墳60m）が初現である。真名井古墳の西には近接して前期後葉の鍋塚古墳（円墳25m）が築かれる。石川と千早川の中間の丘陵には前期中葉の板持丸山古墳（円墳35m）、次いで板持3号墳（前方後方墳40m）が築かれ、石川東岸の太子町から羽曳野市にかけての丘陵上に前期中葉の壹井丸山古墳（前方後円墳69m）、九流谷古墳（前方後方墳70m）、次いでお旅山古墳（前方後円墳46m）、通法寺裏山古墳（前方後円墳47m）が築かれる。こうした古墳の動向は小地域を基盤とした首長層の台頭を物語るものであろう。中期になるとこれら前方後円（方）墳は無くなり、首長墳の造営も止む。この地域の前方後円（方）墳は、後期中葉の奥城古墳（前方後円墳113m）、藏塚古墳（前方後円墳54m）まで待たなければならない。中期初頭に造営が開始され、後期中葉に造営を終える古市古墳群との関係が考えられる。しかしその一方で、寛弘寺古墳群では前期中葉に始まった造墓活動は衰退することなく中期、後期、さらに終末期へと連続と統き、これまでに90基以上の古墳が確認されている。寛弘寺古墳群造営主体の在地性の強さを表わすものである。

後期になると一須賀古墳群、飛鳥千塚古墳群など横穴式石室を内部主体とする群集墳が形成され、この地の古墳は爆発的に増加する。一須賀古墳群は二百余基からなる古墳群で、ほとんどが直径10～20mの横穴式石室を内部主体とする円墳で、出土遺物や石室構造から造営主体には渡来系氏族が考えられている。

前方後円墳が終焉を迎えた後、この地の古墳は再度生彩を放つ。その一つが7世紀の王陵を始めとする大型古墳である。前方後円墳の終焉直後、河南台地の最奥部に金山古墳が築かれる。大小二つの円丘を合わせた形の双円墳で全長85.8mを測り、周囲には濠が巡らされている。北丘は2段に、南丘は3段に築かれ、各段の間と墳頂部の平坦面には敷石が施されている。北丘には全長約10mの横穴式石室があり、内部には2個の削抜式家形石棺が納められている。南丘でも墓道が確認され横穴式石室を内部主体とすることがわかっている。この時期の大型古墳で内部構造がわかる貴重な例である。磯長谷にも向山古墳（方墳60m）、高松古墳（長方墳60m）、葉室塚（長方墳75m）、上城古墳（円墳52m）などがある。向山古墳、高松古墳、上城古墳はそれぞれ用明陵、推古陵、聖德太子墓に比定されている。陵墓の

比定には異論もあるが、磯長谷の大型古墳が王陵クラスの古墳であることは確実である。

もう一つ、7世紀の古墳を特色付けるものに横口式石槨がある。石川西岸の丘陵上に築かれたお龜石古墳、宮前山古墳、羽曳野市東部の鉢伏山南峰古墳、観音塚古墳、磯長谷の松井塚古墳、仏陀寺古墳、須賀古墳群の南にあるアカハゲ古墳、塚廻り古墳など枚挙に暇がない。石川谷周辺に限っても大和の横口式石槨総数に迫るものがある。これら横口式石槨構築には高度な技術が伴い、その被葬者には渡来系の官人層が考えられる。

地上に形が残る古墳については研究がすんでいるが、古墳時代の集落については不明な点が多い。寛弘寺古墳群と千早川をはさんで対岸にある神山遺跡では中期の竪穴式住居が數棟密集してみつかり、寛弘寺古墳群との関係が注目される。太子町上所遺跡で古墳時代前期・中期の住居が、伽山遺跡でも中期の住居が確認されているが、古墳に比べその検出数は圧倒的に少ない。今後の調査に期待されるところである。

前方後円墳が終焉するころはまた、これに代わる政治的モニュメントとして寺院が建立され始める時期でもある。石川谷周辺の古代寺院は、石川と大和川の合流付近である古市・志紀郡に比べ分布密度が低い。富田林市にある新堂廃寺は飛鳥時代の創建で、白鳳期の再建伽藍の一部が確認されている。その他は、瓦が採集されているだけで伽藍等が不明な寺院が多い。その中で異彩を放つものとして、奈良時代に造営された鹿谷寺跡と岩屋をあげることができる。両者は二上山麓の凝灰岩石切場跡を利用して造られたもので、日本ではここにしかない石窟寺院である。鹿谷寺には分厚い凝灰岩の岩盤を削り出して造った十三重の石塔が現在も残っている。遠くインドに起源をもつ石窟寺院がこの地に造られたのはいかなる理由によるものであろうか。

奈良・平安時代以降、中世にいたるまで、石川あるいは佐備川、千早川といったその支流周辺の段丘上に集落が営まれる。中野遺跡では弥生時代の集落に重なるように中世の集落が広がる。神山遺跡でも奈良時代から平安時代にかけての遺構が確認され、当該期の集落が段丘上に広がると予想される。この地はまた楠木正成ゆかりの地である千早赤阪村に近いこともあり、南北朝期の城跡も数多く残されている。陣屋山城跡、持尾城跡、平石城跡などである。城塞の遺構をよくとどめ縄張り図なども作成されてはいるが、発掘調査は未だ行われていない。

戦乱により荒廃したこの地であるが、16世紀になって大ヶ塚、富田林で寺院を中心に町場が興り、発展していく。そして、この発展は現在へと続く。

参考文献 河南町役場 『河南町誌』 1968年

富田林市役所 『富田林市史』 第1巻 1985年

羽曳野市役所 『羽曳野市史』 第3巻 1994年

大阪府教育委員会 『甲田南遺跡発掘調査概要』 1994年

大阪府教育委員会 『寛弘寺古墳群発掘調査概要』 1～Ⅳ 1983～1995年

天野末喜 『地域の古墳・近畿中部・大阪』『古墳時代の研究』10 1990年

太子町立竹内街道歴史資料館 『二上山麓の古代寺院』 1995年

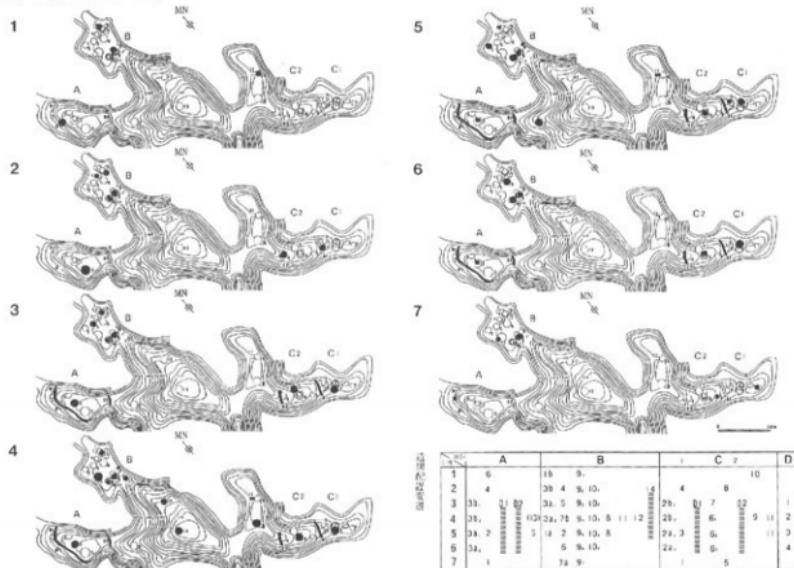
第Ⅲ章 調査成果

第1節 はじめに

第1項 既往の調査

先述したとおり、東山遺跡発見の発端は大和園地株式会社による宅地造成計画によるものである。昭和43年5月からの分布調査で古墳13基、窯跡2基、弥生土器散布地4ヶ所が確認された。同年から翌年にかけての本調査で弥生土器散布地4ヶ所のうち3ヶ所は大規模な弥生時代後期の集落であることが確認され、さらに造成工事中に1ヶ所の集落が発見され計4ヶ所の集落が確認された。調査の結果については報告書によって明らかにされているが、後述する今回の調査と関連するA・B・C地区の内容について概観してみよう（第4図、第5図）。

A・B・C地区で発見された集落は標高約110mのピークから派生する尾根上、標高90~105mの地点に営まれている。ピークから北西にあたるA地区は1,440m²の範囲に7棟の住居が、北北西にあるB地区は2,100m²の範囲に12棟の住居が、南東のC地区は1,970m²の範囲に11棟の住居が建てられていた。調査担当者は遺構の時期を1~7の7時期に分け、当初は円形の竪穴式住居だけであったものが、3期から方形の竪穴式住居が現れ、住居の規模は4期に最大となり段々と縮小傾向にあるとしている。またA地区では集落を巡る溝が3期に出現し、6期まで存続する。C地区では集落から尾根の基部よりと集落の真ん中、つまり集落を2分する形の2本の溝がA地区と同じく3期に出現し、6期まで存続することが確認されている。



第4図 大阪府教育委員会調査地遺構配置変遷図 『東山遺跡』1979から転載（一部改変）

次に、昭和59年に大阪府教育委員会によって実施された試掘調査結果であるが、この調査も報告書によってその内容が明らかになっており、その後の本調査結果は本書に掲載のとおりであるが、試掘調査結果により造成区域からはずされた部分についてふれてみよう。試掘調査トレンチ位置図（第1図）のとおり、20本のトレンチ調査が実施された。造成区域からはずされたのは14・15トレンチが入れられた尾根の上部平坦面である。

14トレンチでは平坦部上で弥生時代後期の竪穴式住居跡、平坦部縁辺付近で溝が検出されている。住居跡は床面まで掘削されていないが、平面プランは明らかになっている。報告書によると方形の住居で北辺長6.3m、南辺長7.0m、東辺長8.3m、西辺長7.9mを測り、南辺が拡張されているとのことである。溝は平坦面の縁辺にあり幅1.1m、深さ0.2mを測り、出土遺物から住居跡と同時期と考えられている。15トレンチでは中世の柱穴の他、平坦部中央で弥生時代後期の土坑、平坦部縁辺で同じく弥生時代後期の溝が検出されている。溝は幅3.6m、深さ0.7mを測り、14トレンチで検出された溝と規模の差はあるが、平坦面の縁辺を廻る共通性から一連のものと考えられている。この溝が、平坦面の縁辺を巡るならば、先に調査されたA地区と同様のあり方を示すことになる。

さて、この平坦面の評価であるが、試掘調査担当者は、「この平坦面の面積は約5,000m²を測り、昭和43年度調査において一番広いB地区で2,100m²しかなく、今回の平坦面が非常に広いことが窺える。



第5図 東山遺跡周辺地形図 (1/10,000) トーンは調査地 昭和36年大阪府地形図とともに作成

またB地点では11棟の竪穴式住居跡が確認されており、今回の平坦面は面積においてB地区の倍以上あり、単純に考えても住居跡も同等の棟数があることになり、かなり大規模な集落跡が想定できる。」とされている。充分肯定できる想定であろう。

参考文献 堀江門也・菅原正明ほか「東山遺跡」大阪府教育委員会 1979
芝野圭之助ほか「東山遺跡試掘調査報告書」大阪府教育委員会 1985

第2項 遺跡の立地

東山遺跡は大阪府の南東部、近鉄長野線富田林駅から石川を越えて、東へ約3kmのところにある。葛城山の西にはその前山である、「一のはげ山塊」、「持尾山塊」、「白木・中村山塊」の三つの山塊がある。一番北の、東山・北加納・平石・畑・葉室・伽山の集落に囲まれた「一のはげ山塊」は、南側が高く、北側には北西方向へ尾根が幾筋ものびている。この尾根上には約200基からなる一須賀古墳群が存在し、東山遺跡は一須賀古墳群の北西部にあたる。

大阪芸術大学・大宝住宅造成以前の地形図（第5図、第6図）をみると、先述した昭和43・44年に大阪府教育委員会が調査したA・B・C地区の南東には、北東側と南西側から深い谷が入り込んでおり、一須賀古墳群の古墳が密集する尾根から切り離されたような、独立丘陵状の地形となっている。高地性集落の名にふさわしい場所を選地しているといえよう。A・B・C地区の集落と付近の標高60m付近の平坦面からの比高は30~40m、またC地区で検出された集落と南東側の谷部との比高は20mを測る。なお、A・B・C地区の中間の山頂には、鎧頭太刀や金銅製の杏が出土したことで有名な一須賀WA1号墳が存在する。

B地区がある尾根は、先で北方向と西方向の二股に分かれ。北方向の尾根を行くと、標高87mの鞍部をはさんで標高106mの山へいたる。この山が大学敷地最東端にある山である。そして、今回の調査地は、この山から派生する尾根上にあるため。昭和43・44年の大阪府教育委員会による調査が行われたA・B・C地区から尾根づたいに行き来できる場所にある。

大学敷地南東端にある標高106mの山からは、さらに北方向と北西方向に2本、計3本の尾根のがびている。北方向の尾根は、途中で北西方向に屈曲し、徐々に幅を広げていく。この部分には、敏達陵古墳が築かれ、さらに北西には葉室西峯遺跡、伽山遺跡が存在する。東山遺跡と葉室西峯遺跡、伽山遺跡が一つの独立丘陵内に存在することは、集落のあり方を考える上で興味深い事実である（第6図）。

さて、今回調査を行ったのは、残る大学敷地東端の山から北西方向へのびる2本の尾根である（第2図）。2本の尾根のうち、北側の尾根の基部は広いが、中程は細く非常に痩せており、先端付近で少し広くなっている。先端付近に設定したのが94年度A調査区、基部が94年度B調査区である。南側の尾根は上部の平坦面が広く大阪府教育委員会の試掘調査で一辺約8mの竪穴住居がみつかったところで、この平坦面は今回の造成区域からはずされている。さらに谷をはさんで北西には独立した尾根があり、この独立した尾根の北半分が86年度調査区で、南半分から谷にかけてが94年度C調査区である。86年度調査区のさらに北西には、やはり独立した尾根があり、ここから北西に低い尾根が北西にのびている。現在、大阪芸術大学の校舎が建ち並んでいるところである。

調査区の標高は、86年度調査区で80~86.5m、94年度A調査区は76~83m、B調査区は80~90m、C調査区は86年度調査区寄りで86m、谷底部で73m、南東の最も高いところは88mに位置する。

竪穴式住居が検出されたレベルは94年度B調査区で83m~89m、94年度C調査区で82m、また試掘調

査第14トレンチで87mを測る。付近の平坦面からの比高は約20~30mで、昭和43・44年に調査されたA・B・C地区と比較すると約10m低い。

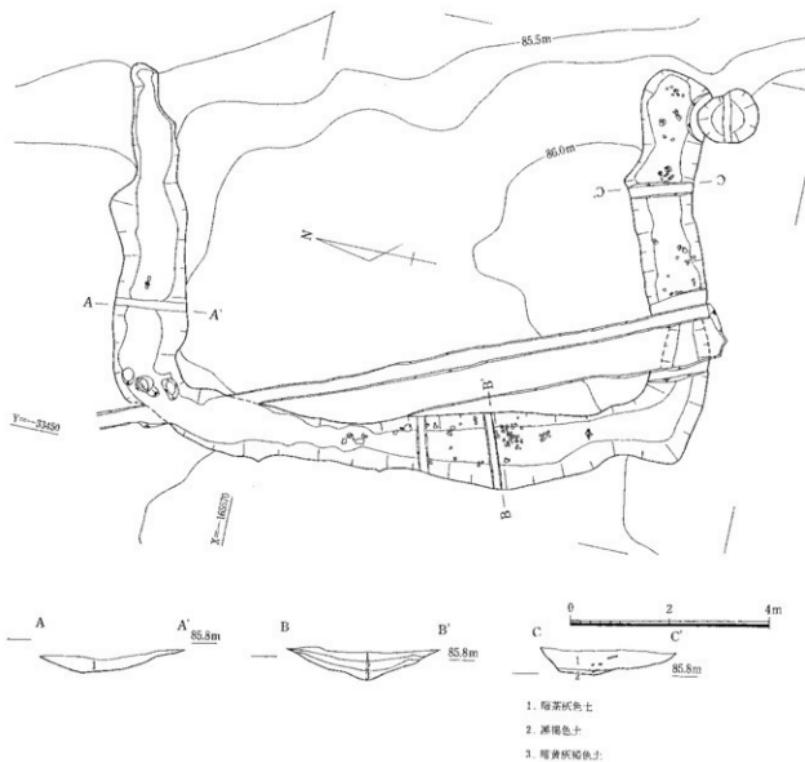


第6図 東山道跡周辺遺跡分布図2 (1/10,000)

第2節 86年度調査区（第9図）

第1項 はじめに

86年度調査区は、先述のとおり独立した丘陵の北半分にある。南西側は既存のグラウンド造成の際に削られかなり急な崖状斜面となっている。北西側も校舎が建っているため旧地形は失われている。大学建設以前の地形図をみると北西にも独立した尾根があり、さらに北西に低い尾根がのがれている。現在校舎が建ち並んでいるのがこの部分である。調査区北東側斜面は裾部が少し削られているようであるが、ほぼ旧状を保っている。この斜面は頂部の平坦面から一端急斜面となるが、中程で傾斜が緩くなり再度急斜面となって谷底へと続く。86年度調査区は遺構の分布が散漫であったが、多くは頂部平坦面とこの緩斜面で検出されたものである。なお、学校関係者から、この丘陵上には散策路があり、調査に先立ち路の両側に植えてあった桜を移植したとの話を聞いた。調査区内に3m程度の攪乱坑が多数あるのはこのためである。



第7図 1号填実測図 (1/100)

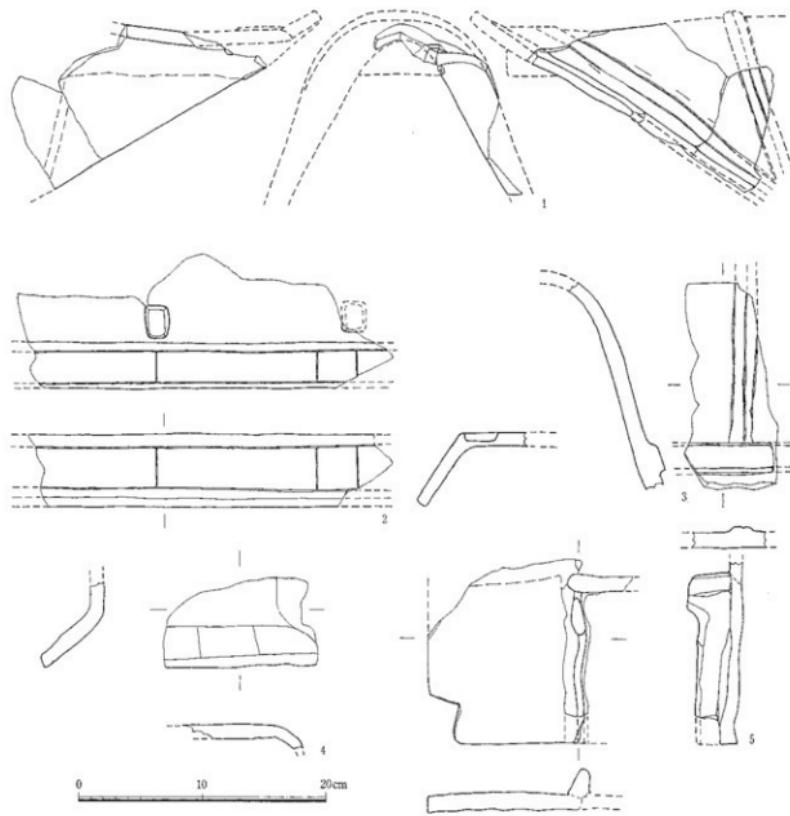
第2項 1号墳（第7図）

頂部平坦面の北東斜面寄りで「コ」の字状に巡る溝が3条検出された。溝から埴輪が出土することから方墳の周溝と判断し、北西のものから順に1～3号墳とした。

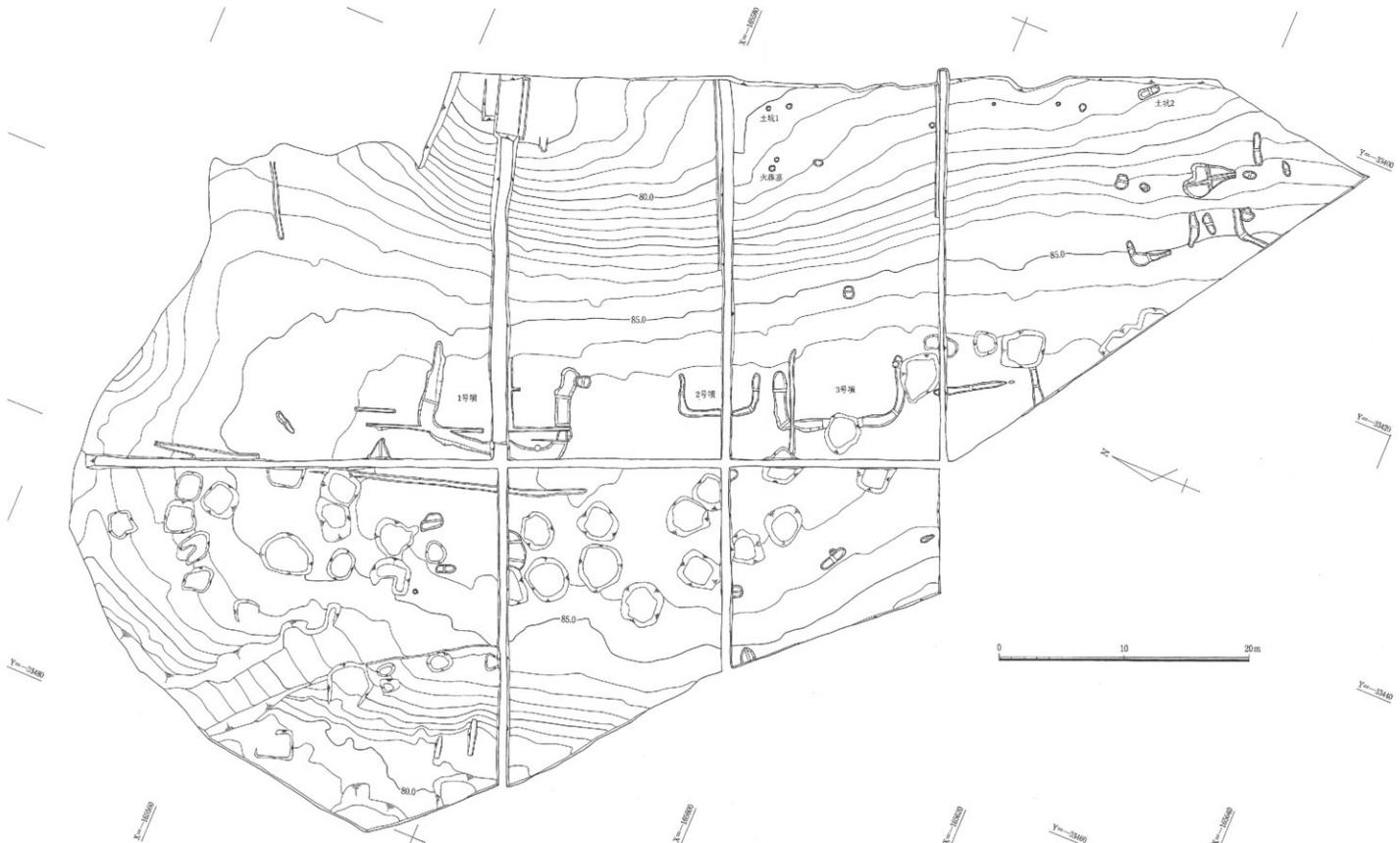
1号墳の周溝は、幅130～160cm、深さ20～30cmを測り、検出できた延長は約23mである。溝底のレベルは一定ではなく、南側が高く北に向かって緩やかに下がり、両者の比高は40cmを測る。これは地山の傾斜とほぼ一致する。

東側は流失しているため、正確な平面規模は不明であるが、溝の形状から推定される埴丘規模は一辺10mである。また、埴丘は完全に削平されており、高さ等も不明である。主体部も残っていない。葺石は施されていなかったと考えられる。

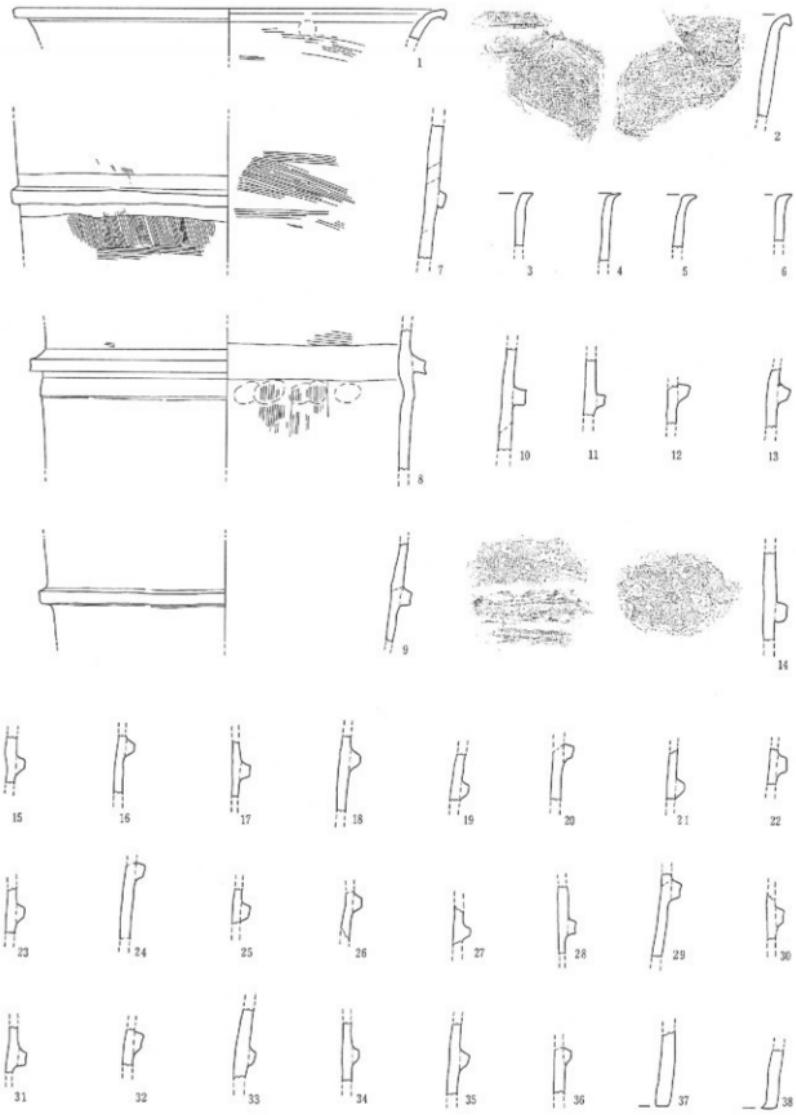
1号墳からの出土遺物は、周溝内及び付近の表土層から出土した埴輪のみである。埴輪は、円筒埴輪（第10図）と家形埴輪（第8図）のみである。いずれも黒斑を有する。



第8図 1号墳出土形象埴輪実測図 (1/4)



第9図 86年度調査区構造配置図 (1/300)



第10図 1号墳出土円筒埴輪実測図 (1/4)

円筒埴輪は細片が多く、全体を復元できる個体はなかった。かろうじて口縁部径が復元できたもの1点、体部径が復元できたもの3点である。底部径を復元できる個体はなかった。復元できた口縁部径は35cm、体部径は27~34cmである。

口縁部の形態をみると、折り曲げるよう開き端部に面をもつもの（1・2）と端部を外側につまみ出すようにしているもの（3~6）がある。タガは、ほとんどが断面台形で突出度の高くないものである。外面調整は1次調整にタテハケを用い、タガ貼り付け後ヨコハケを行っている。8はかなり強いヨコハケを行っているが、ハケメの条線を残さない。内面調整も1次にタテハケ、2次にヨコハケを行っている。明確なB種ヨコハケは見られないが、いずれも黒斑を有し川西編年のⅢ期に属するものである。

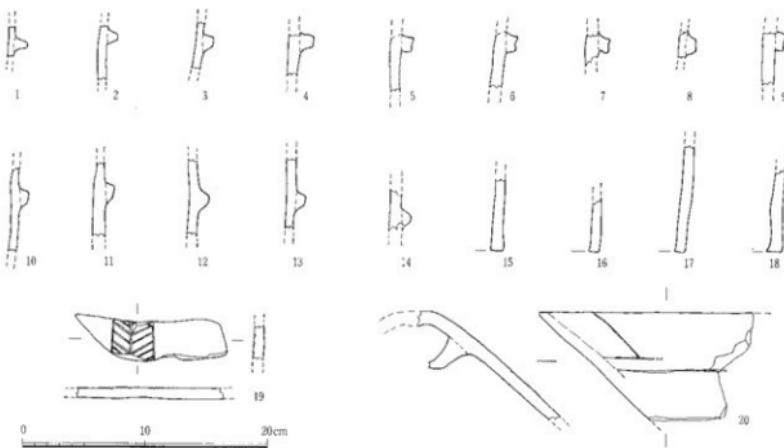
形象埴輪もコンテナ1杯程度出土したが全体を復元できるものはなかった。破片を観察する限り、すべて家形埴輪である。1・3は切り妻造りの屋根の部分である。2・4は建物の土台の部分であろう。2の上面には四角いくぼみがあり、柱状のものを差し込んだものと考えられる。5は底部である。四角いくぼみが残る。

第3項 2号墳（第12図）

2号墳は1号墳の南南東、周溝間の距離で9mのところにある。周溝の幅は40~50cm、深さは10~15cmを測る。周溝北西隅の埴輪ブロックが周溝検出面より上で検出されたため、本来は幅、深さともにもう少しあったようである。溝底のレベルは北辺で約10cm低くなっているが、他はほぼ同レベルである。

1号墳と同様に東側が流失しているが、埴丘規模は南北で一辺5.5mを測る。高さ等も埴丘が完全に削平されているため不明である。また、主体部も全く残っていない。葺石は施されていなかったと考えられる。

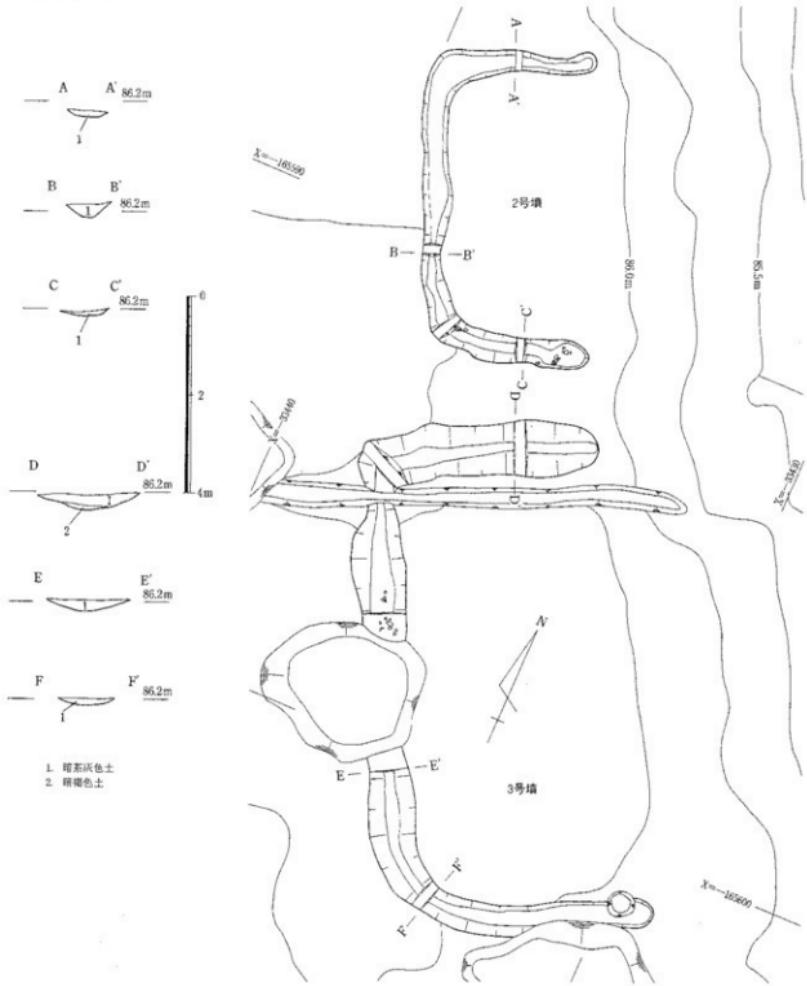
第11図は周溝内から出土した埴輪である。円筒埴輪はいずれも細片で、法量を復元できるものはなかった。表面の残りが悪く、調整の細部は不明であるが、いずれも黒斑を有している。川西編年のⅢ期の



第11図 2号墳出土埴輪実測図（1/4）

ものであろう。19・20は形象埴輪である。20は切り妻造りの家形埴輪の屋根部である。線刻の表現が見られるが、1号墳の家形埴輪が宽带を貼り付けていたのに比べて平板的である。19は、綾杉状の線刻を施している。橋形埴輪であろうか。

円筒埴輪、形象埴輪とともに一辺5.5mの埴丘に比して大きなものである。特に家形埴輪は50cmを優に超える大きさと推定できるものであり、埴丘上に埴輪が並んでいた様子は、異様な感じであったと想像に難くない。



第12図 2・3号墳実測図 (1/100)

第4項 3号墳（第12図）

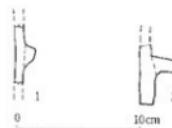
3号墳は2号墳の南南東に並ぶようである。両者の距離は周溝間で1.2mしか離れていない。周溝の幅は55~100cm、深さは10~25cmを測る。溝底のレベルは北辺で10cm低くなっているが、他は同レベルである。西辺中央部は攪乱を受けている。

墳丘規模は南北で一辶9.4mを測る。1・2号墳と同様、高さ・主体部等は不明である。葺石も無かったと考えられる。

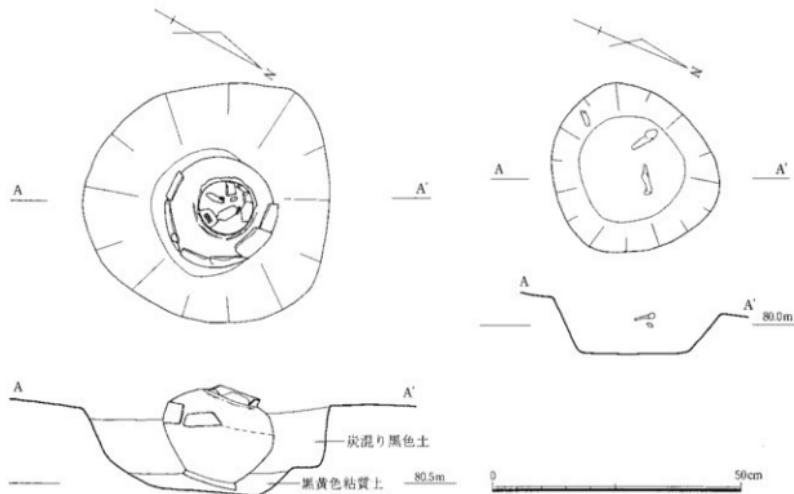
3号墳からは、周溝内及び西辺の攪乱坑内から少量の埴輪片が出土しただけである。うち図化できたのは2点だけである（第13図）。2は、形象埴輪である。底部付近に突帯を貼り付けている。出土した埴輪はいずれも黒斑を有している。

1・2号墳と比べて埴輪の出土量は極めて少い感は否めない。しかし、1・2号墳の周溝から出土する埴輪は、中層から上、ほとんどが遺構検出面付近で出土しているため、3号墳周溝の上層が削平された可能性を考えた場合、出土した埴輪量の少なさが、単に埴輪使用量が少なかったためであるとは断定できない。

1~3号墳から出土した埴輪は、いずれも川西編年のⅢ期の範囲におさまるものである。しかし、三者の位置関係を考えた場合、2号墳と3号墳は極めて近接した位置に、墳丘各辶を平行させるように築いている。しかも、2号墳の西辶は3号墳の西辶より東に約1m寄っており、若干のずれはあるが、南北方向の中軸線を崩すようとしているかの如くである。これに比べて1号墳は距離も離れ、中軸線も約13度東に振っている。この違いは単に地形に影響されたものではない。位置関係から1~3号墳の被葬者の関係を考えた場合、2・3号墳の被葬者はより密接な関係にあったことが想起できよう。



第13図 3号墳出土埴輪実測図 (1/4)

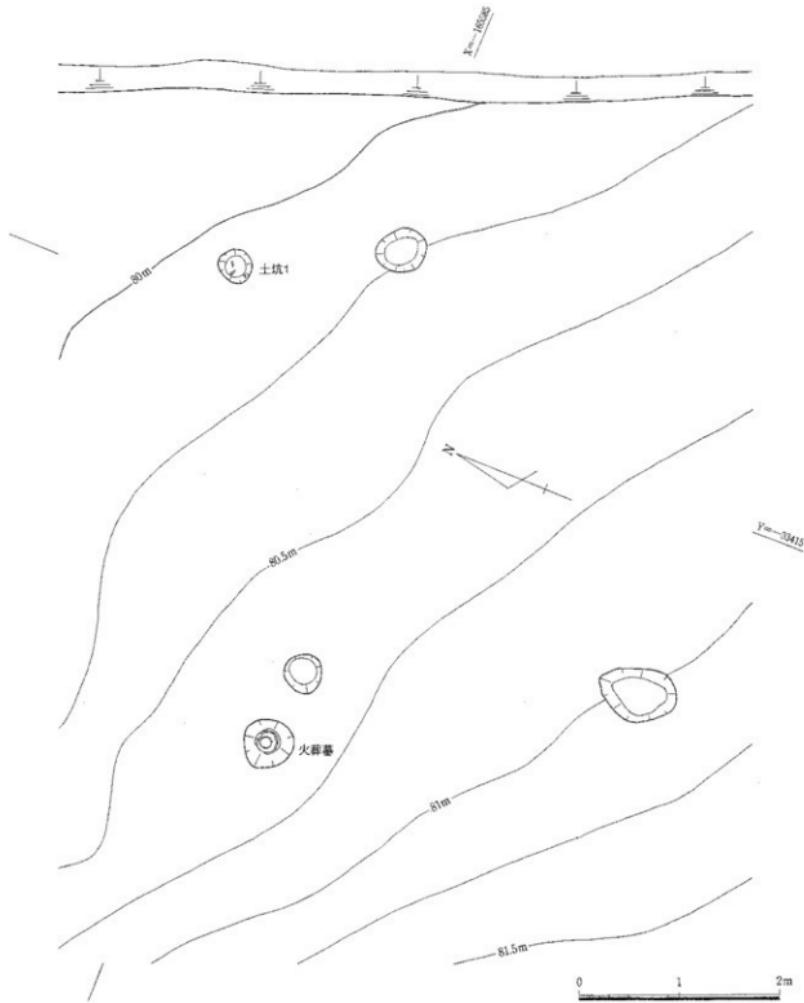


第14図 火葬墓・土坑1実測図 (1/10)

第5項 火葬墓（第14、15図）

2号墳の約17m東方、斜面を5mほど下ったところ、傾斜が緩やかになるあたりで火葬墓を検出した。墓壇は北東向きの緩斜面にあり、平面円形で直径約50cm、深さ約20cmを測る。墓壇上部は少し削られているようである。

藏骨器は、台付短頸壺いわゆる葉壺形の須恵器で、土師器の鉢を蓋としている。藏骨器埋納にあたつ

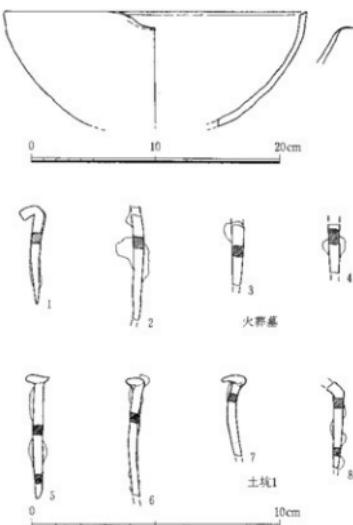


第15図 火葬墓周辺造柵配置図 (1/50)

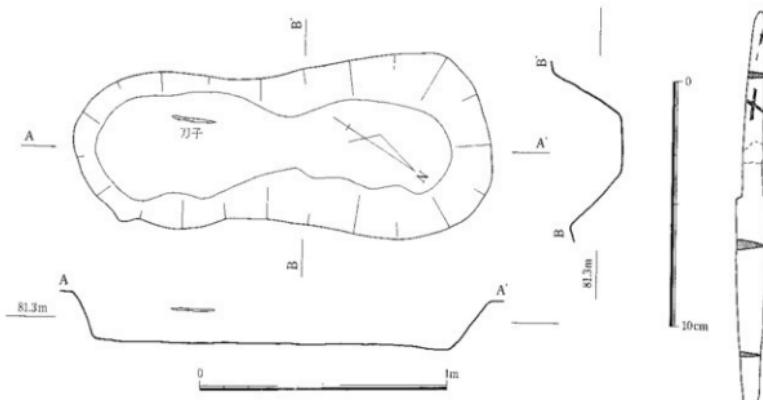
ては、墓壙を掘り藏骨器を据えた後、炭混じりの黒色土上で充填している。この炭混じり黒色土からは鉄釘が4本出土している。釘の方向はばらばらであり、藏骨器を木箱に入れて埋納したものではなく、おそらく遺体を火葬したときの灰で埋めたため、火葬の際に使用した木棺の釘が混入したものと考えられる。藏骨器内には火葬人骨が残っていた。

藏骨器に用いられた須恵器は、わけあって所在不明となつたため実測図を掲載することはできなかつたが、取り上げ時の計測では、口径12cm、体部径23cm、器高19cm、頸部の高さ1.5cmを測る。藏骨器の蓋に用いていた鉢（第16図）は、片口が付き口径24.5cm、復元高は約11cmを測る。表面が剥落しているため調整の細部は不明である。釘は4本出土したが、完全に残つてゐるのは1本だけ（第15図1）である。断面は方形で、折り曲げて頭部を作りだしている。長さは4cmを測る。他の3本は頭部及び先端部が欠失しているため法量等は不明であるが、2は長さ5cm以上を測る。

火葬墓の北東4.5mのところに土坑1がある。平面円形で直径35cm、深さ10cmを測る。埋土は炭混じりの黒色土で、鉄釘が4本出土している（第16図5～8）。鉄釘以外の遺物は出土せず、単独の遺構とは考えにくい。おそらく火葬の際の灰を、穴を掘つて埋めたものと考えられる。南西にある火葬墓との関連を考えられる。しかし、8の釘は折り曲げた頭部の可能性があるが、他は頭部が丸く、釘の形状に差異が見られるため、付近に別の火葬墓があつた可能性も考えられる。



第16図 火葬墓・土坑1出土遺物実測図(1/4, 1/2)



第17図 土坑2実測図(1/20, 1/2)

第6項 土坑2（第17図）

調査区の南東隅、北東斜面の最下方で検出した土坑である。平面形はやや歪な隅丸長方形で長辺170cm、短辺60cm、深さ約20cmを測る。遺物は南寄りの底から15cm上で鉄刀子、須恵器蓋のつまみ部分の破片が出土している。刀子は長さ16.6cmで、刃部の長さ9cm、幅は最大で1.3cm、厚さは峰の部分で4mm、茎部の長さ7.6cm、幅0.9cm、厚さは3mmを測る。茎部分に繊維質の痕跡が残っている。

形がやや歪で、釘も出土せず木棺の痕跡も検出できなかったが、鉄刀子が出土しているため、土塚墓の可能性がある。

第7項 小結

河南町ではこれまで、南西部にある寛弘寺古墳群以外では前・中期の古墳は知られていなかった。今回の調査で中期前半の古墳が3基発見されたことの意義は大きい。3基の古墳はいずれも小さなもので、特に2号墳などはまるで方形周溝墓の如くである。残念ながら、墳丘がまったく残っていないため、主体部は不明であるが、墳丘上に埴輪を並べていた様相は窺い知ることができた。3基の古墳は同一の尾根に並ぶように築かれていた。埴輪から3基の前後関係は読み取ることはできなかったが、いずれも大差ない時期に築かれたものであろう。しかし、位置関係から3基の関係には微妙な差が読み取れる。1号墳は、2・3号墳からやや距離をおき、軸も振っているのに対し、2・3号墳は明らかに計画的に配置されている。この差は、時期差であるか、それとも系譜の違いであるか現段階では不明である。古墳の造営主体については、後述する土塚墓と合わせて最後のまとめに譲るが、興味深い資料である。

また、北東斜面では奈良時代の火葬墓、これに関連する可能性のある土坑及び土塚墓の可能性がある土坑が見つかり、間接的ではあるが奈良時代の人々の活動の痕跡が確認できた。土坑2からは、筆記具である刀子が出土しており、墓であるとすれば地方の役人クラスの墓であろう。

調査区南東の尾根上、後述する94年度B調査区では弥生時代の住居が見つかっている。86年度調査区も地形的には住居を営んでも不思議ではない場所である。しかし、結果は平坦面上には古墳しかなく、包含層から弥生時代の土器片がわずかに出土したのみである。この違いはいかなるものであろうか。

第3節 94年度A調査区（第19図）

第1項 はじめに

大学敷地南東端にある山から派生する2本の尾根のうち、北東側の尾根は根本部分が広く、中程は非常に瘦せており、稜線の両側は急斜面が続く。そして、先端付近でやや広くなる。A調査区はこのやや広くなったところに位置する。調査区内でも稜線をはさんで様相がかなり異なる。稜線の北東側は数十cmの崖で、その下は急斜面となる。南西側は比較的緩やかな斜面で、調査区の外は急斜面となっている。調査区のほとんどが、この南西の比較的緩やかな斜面である。なお、北東の斜面は中程に傾斜がやや緩くなる部分があり、念のためトレンチ調査を行ったが、遺構・遺物等は確認できなかった。

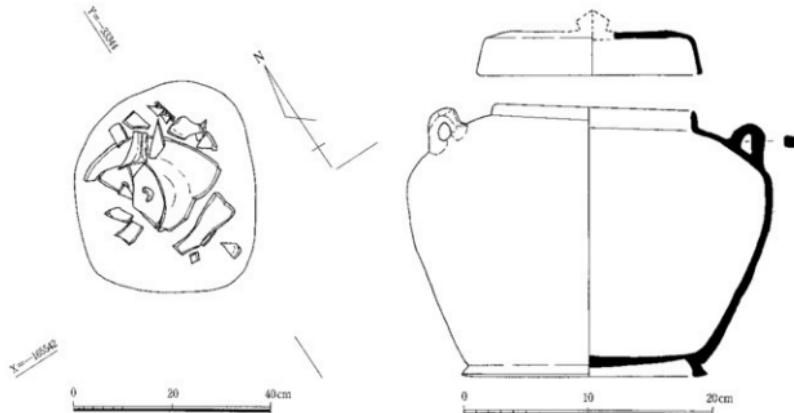
第2項 火葬墓（第18図）

調査区の北寄りの南西斜面にある。表土のすぐ下で、地山から10cm程度浮いた状態で藏骨器の破片がまとまった状態で検出された。したがって墓壙の規模等は不明である。しかし、藏骨器のまわりに充填されていたと考えられる炭を含む土が周間に残っていたため、原位置からはさほど動いてはいないと考えられる。人骨等は残っていないかった。

藏骨器は、蓋付の台付短頸壺いわゆる茱萸形の須恵器である。身は口径16cm、体部径29.7cm、器高22cmで、高さ1cmの高台が付く。口頸部は1.5cmの高さで、垂直に近い角度で立ち上がり、端部は丸くおさめる。肩と頸の中間よりやや頸寄りに耳が一対付く。蓋は破片で、つまみも失われている。つまみを除く器高は3.5cm、復元径は17.5cmを測る。

藏骨器の器総高に対する胴部最大径位置から口縁部上端までの高さの比率である胴高指数は32、器総高に対する胴部最大径の比率である径高指数は74となり、黒崎直氏の研究成果を活用すれば8世紀前半の年代が付与される。

黒崎直 「近畿における8・9世紀の墳墓」 『研究論集VI』 奈良国立文化財研究所 1980



第18図 火葬墓実測図(1/10, 1/4)



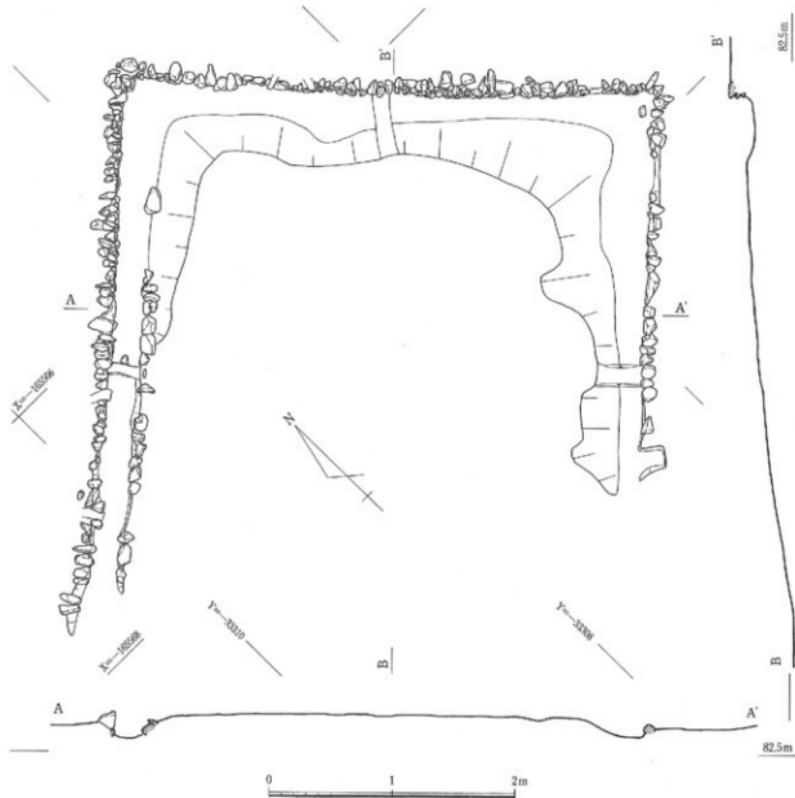
第19図 94年度A調査区遺構配置図 (1/200)

第3項 石組溝（第20図）

調査区の南端にはわずかな平坦面がある。この平坦面の西側寄りで検出された「コ」の字状にめぐる溝である。溝の幅は35cmで、深さは最も残りの良いところで35cmを測る。また、東辺の長さは4.3m、北辺は4.5m以上を測る。南辺は3.1mしか残っていない。溝の両側は5~20cmの石を積み上げて垂直に壁を築いている。底には石は敷かれていらない。外壁は比較的良く残っていたが、内壁は残りが悪く北辺の一部しか残っていない。外壁部で残っていた石組みは最大5段であるが、元はもう少し高かったようである。元々コの字状であったか、元は方形に巡っていたかは、西側が流失しているため不明である。

溝の内側は3.6m×4.2m以上の平坦面となる。この面では柱穴や礎石は検出できなかったが、周辺から近世の瓦が出土しているため。内側には小さなお堂のようなものが建てられていたのであろう。

河南町誌に薬師堂の記述があり、「3.6mの堂と堂守の庵室があり、堂付の山林もあった。（中略）



第20図 石組溝実測図 (1/40)

幕末には無住となっていたので廃され』とある。庵室は不明であるが、規模はほぼ合致する、しかし、町誌には場所についての記述がないため、これが薬師堂であるかは不明である。

第4項 土坑1（第21図）

石組溝の西5m、南西斜面にある。平面形は $2.6 \times 2\text{ m}$ の隅丸方形で、深さは1.1mを測る。試掘調査で見つかったもので、試掘調査の際には縄文時代の落とし穴の可能性が指摘されていた。埋土の土質的には弥生時代以前に遡る可能性があるものの、遺物が出土しておらず、底面のピット等も検出できなかったため、その性格は不明とせざるを得ない。



第21図 土坑1実測図 (1/40)

第5項 小結

試掘調査で、A調査区がある尾根の最先端部において弥生時代の可能性がある土器包含層が確認されていた。この部分は縁地にあたるため調査は行っていないが、A調査区でも弥生時代の遺構が期待されたが、上記のとおり奈良時代の火葬墓、近世の建物基壇、時期不明の土坑など、散発的な遺構の検出にとどまった。他にも溝や浅い土坑状の遺構もあったが埋土の土質的にみて、近世以降の耕作に伴うものである可能性が高い。

第4節 94年度B調査区（第23図）

第1項 はじめに

94年度B調査区は、A調査区がある北側の尾根の基部に位置する。調査区の基部よりのところから北北西方向に張り出すような地形があり、尾根稜線との間は浅い谷状を呈している。このため、尾根の基部よりでは稜線部分が10~15mの幅でやや平坦になっている。試掘調査では、尾根稜線上に設定した第11トレントンチ及び浅い谷状のところに設定した第10トレントンチで弥生時代後期の包含層が確認されていたため、当該期の遺構検出につとめたところ、A調査区寄りの稜線上で1棟、尾根の基部に近い稜線上で1棟、やや南西斜面寄りに4棟と計6棟の竪穴住居が検出できた。

なお、調査区北東は急斜面となっているが、中程に傾斜がやや緩くなる部分があり、念のためトレントンチ調査を行ったが、遺構・遺物等は確認できなかった。

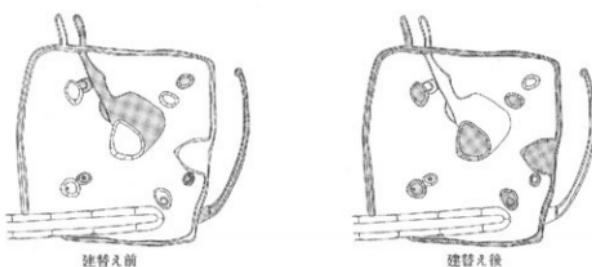
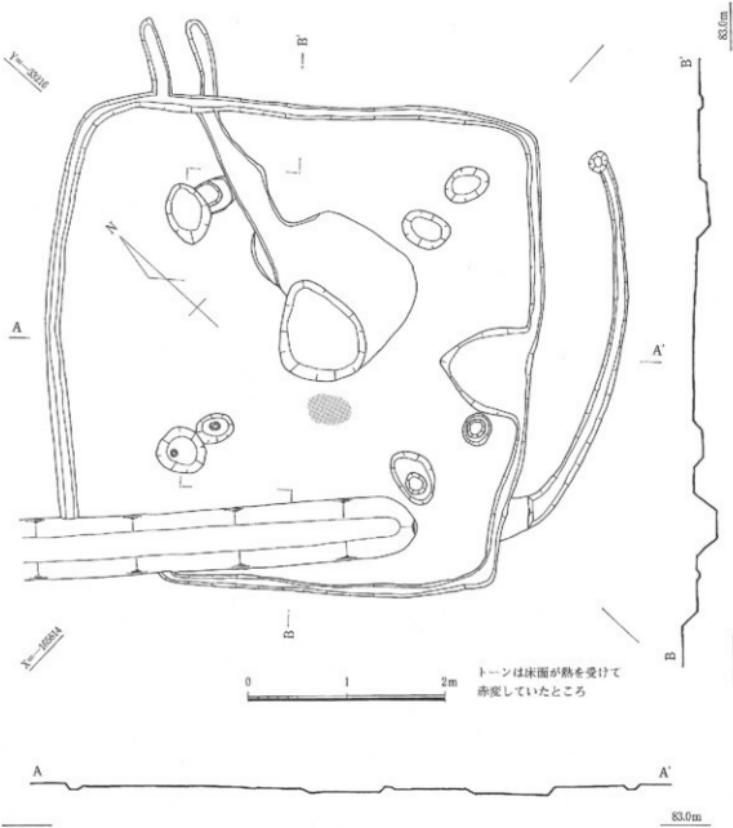
第2項 竪穴住居1（第22図）

調査区の北西端、尾根の稜線上、やや北東斜面寄りにある。表土を除去した段階で炉跡と壁溝らしきものを検出したため、調査区を5m拡張して全体の検出につとめた。拡張部の北西は尾根が非常に痩せており、稜線上には僅かな平坦面しかなく両側は急斜面となっている。この部分の稜線上は試掘調査第8・9トレントンチ部分で、トレントンチ幅を除けば、両側にはわずかに平坦面が残るだけであったため、これ以上の調査区の拡張は行わなかった。住居床面と周辺の検出レベルが同じであったため、尾根上部はかなり削平されているようである。当時の地形は復元困難であり、試掘トレントンチでは集落を区切るような溝はなかったが、おそらく住居1が集落の北西端に位置するものと考えられる。

住居は一度建て替えられている。建て替え前の住居に属するものは、壁溝の一部と主柱穴、炉だけである。主柱穴は4本で、柱心間は2.4~2.6mを測る。炉は、主柱穴の中間よりやや北東寄りに位置し、現状で1.1×1.5mの不整形な長方形を呈する。炉からは北方向に排水溝がのびている。壁溝は一部だけしか残っておらず、検出された長さは約4mで、幅は15~30cm、深さは5cmを測る。また、主柱穴と壁溝との間隔は0.8~1.3mを測る。建て替え前の平面プランは、壁溝の中央がやや膨らみ気味であるが、床面で一辺約4.5mの方形に復元できる。復元床面積は20.2m²である。

建て替え後は、正方形の平面プランで床面で一辺4.7mを測る。床面積は22.1m²である。建て替え前と位置、規模はほとんど変わっていないが、約7°東に振っている。壁溝は幅15~20cm、深さ5cmを測り、住居を四周する。主柱穴は4本で、柱心間は建て替え前と同じく2.4~2.6mを測る。また、柱穴と壁溝の間隔は0.8~1.1mを測る。住居中央には炉が、東南辺中央には貯蔵穴が設けられている。炉は直角長円形で、現状で1.1×0.9m、深さは10cmを測る。建て替え前のものと違い、炉には排水溝はなく、かわりに壁溝北隅から排水溝が設けられている。貯蔵穴は半長円形で、平面規模は現状で0.9×0.8m、深さは10cmを測る。なお、建て替え後の炉のすぐ南西で、50×25cmの楕円形に床面が熱を受けた赤変しているところがあったが、建て替えの前後どちらに属するか、またその用途も不明である。また、床面まで削平を受けていることを考慮すると、後世のものである可能性も考えられる。

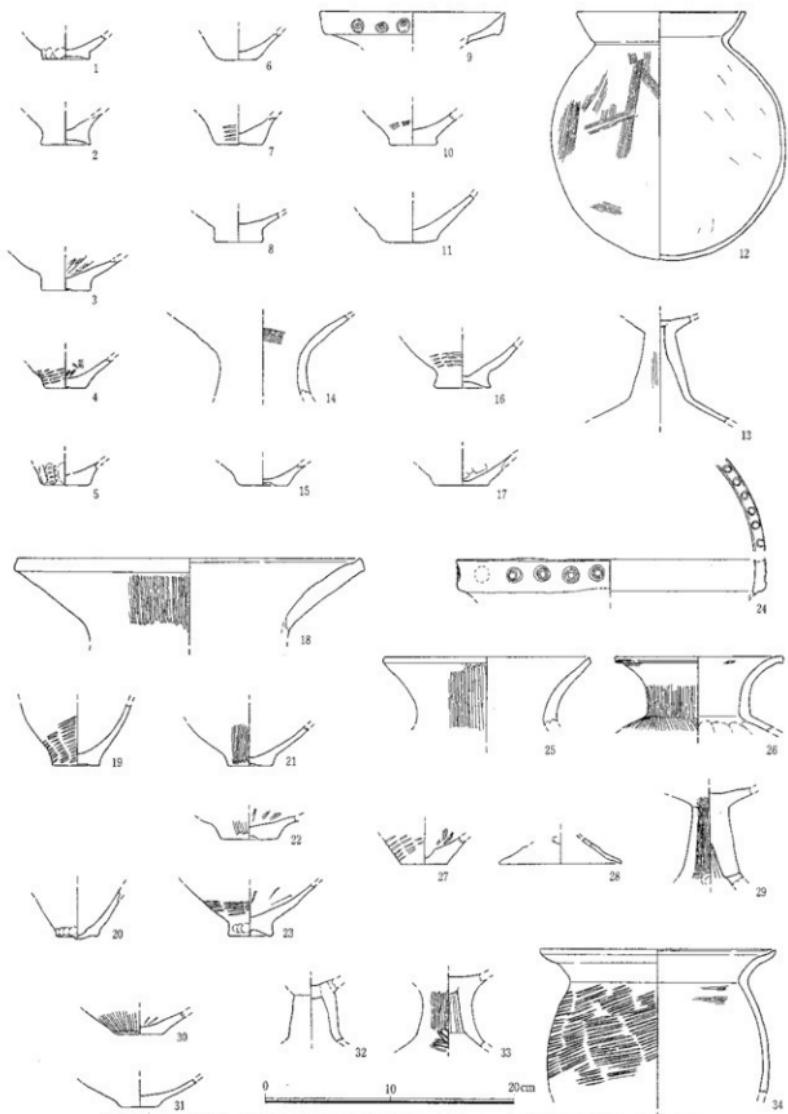
床面まで削平されていたため遺物は少なく、図化できたのは建て替え後の貯蔵穴から出土した土2点（第24図1・2）だけである。いずれも甕の底部で、上げ底になっている。器面調整の細部は不明であるが、1の底部外面には指頭圧痕が残る。



第22図 竪穴住居1実測図 (1/50)



第23図 94年度B調査区遺構配置図 (1/250)



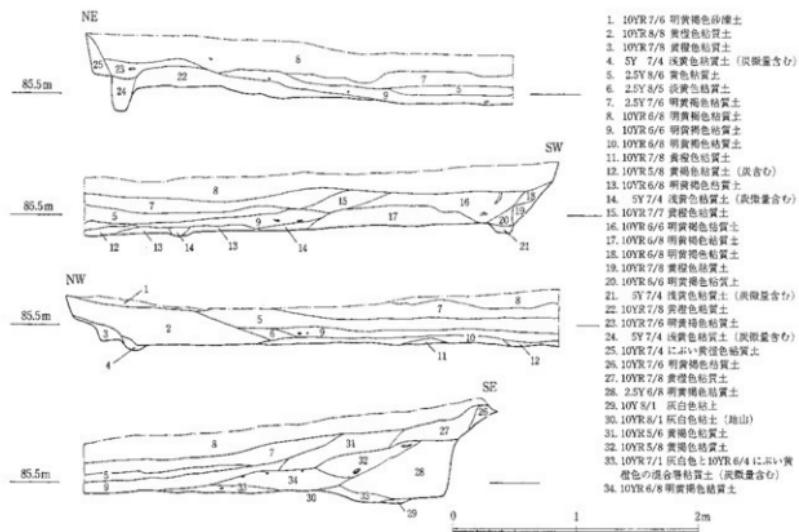
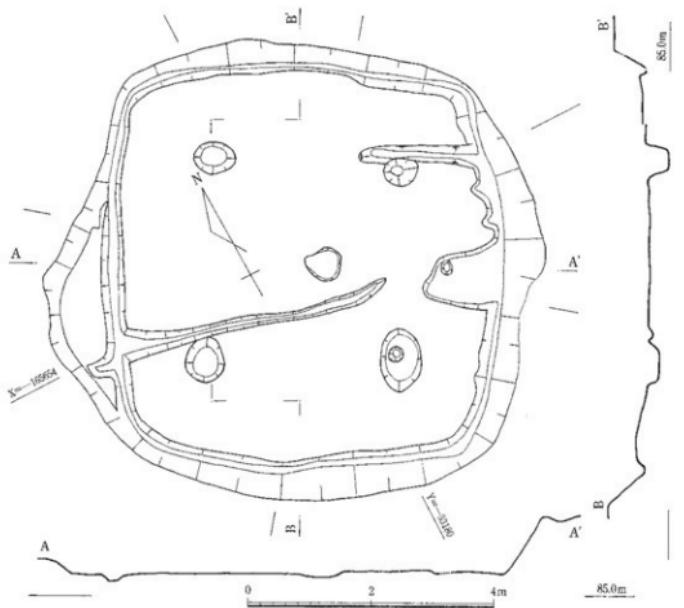
整穴住居1 (1・2野薪穴)、整穴住居3 (3~5)、整穴住居4 (6~8米面、9~11中・上層)、整穴住居5 (12~13床面)、
整穴住居6 (14~17)、整穴住居2 (18~19柱穴、20~23床面、24~29下層、30~34中・上層)

第24図 整穴住居出土遺物実測図 (1/4)

第3項 竪穴住居2（第25図）

竪穴住居2は、調査区中央のやや南、住居1の約50m南東のところにある。立地的には、尾根の稜線上ではなく、稜線より南西斜面寄りに位置する。住居の平面プランは方形で、壁溝が四周する。床面の平面規模は $6.1 \times 6.5\text{ m}$ で、深さは現状の最も残っている部分で80cmを測る。床面積は 39.7 m^2 である。B調査区の住居の中では最も大きく、残りも良い。主柱穴は4本で柱心間の距離は3~3.3mを測る。また、主柱穴と壁溝間の距離は1.2~1.4mを測る。住居の付属施設としては、中央に炉が、東南辺中央に貯蔵穴が設けられている。炉は直径60cm、深さ5cmの円形である。炭まじりの土で埋まっていたが、炉壁の状態を見るかぎりあまり熱を受けていたようではなく、炉の使用期間は短かった可能性がある。貯蔵穴は、1×1mのややいびつな隅丸方形で深さは5cmを測る。壁溝の南西隅付近から、貯蔵穴方向に溝がのびている。壁溝付近では壁溝と同じ深さであるが貯蔵穴へ向かって底のレベルが徐々に高くなり、貯蔵穴に達することなく途中で消えてしまう。住居外方向へも少しのびるが、住居外へは出でていない。排水溝とは考えにくく、位置的にも住居内を区画する施設とも考えにくいため、現状ではこの溝の性格は不明とせざるを得ない。住居の北東辺では1mの幅で、南西辺では1.3mの幅で、地山のレベルが中央部より10~20cm高くなっている。また、この部分の土層も自然堆積とするには不自然な状況である（土層図17、22の層）。調査では、この層を除去してしまったが、人為的な盛土と考えベッド状遺構としたい。ベッド状遺構とするなら、規模は幅1.4m、高さ30cmとなる。また、住居の掘方は南西辺の南西隅寄りで一部張り出し、壁溝との間に40cm程の平坦面ができている。他に梯子の痕跡等、付随する遺構はなかったが、この部分が住居の出入口であろう。

遺物の出土量も、B調査区で検出した6棟の竪穴住居の中で最も多かったが、完形に復元できるものではなく、うち17点が図化できた（第24図18~34）。器種は、壺、高杯、甕である。18・19は柱穴から出土したものである。18は大型の壺の口縁部で、口縁部径27.5cmを測り、外面は縦方向のミガキを施し、端部は横方向のナデで仕上げる。19は甕の底部で、叩き出して底部を整形している。20~23は床面から出土したものである。20は底部中央を棒状のもので押し、外面は底部縁より飛び出している。甕の底部には、ドーナツ底のもの（22）と上げ底のもの（23）がある。24~29は、下層から出土したものである。24は口縁端部を垂直に立ち上げ、外面を突帯状に肥厚させ、円形浮文を貼り付け竹管文を施す。上端面にも竹管文を施している。25・26は、広口壺の口縁部で、25の外面は縦方向のミガキを施し、口縁端部から内面をナデで仕上げるが端部外面のナデは全周しない。26も外面は縦方向のミガキを施し、口縁上半から内面をナデで仕上げるが、端部内外面にハケメの痕跡を残している。27は平底の甕の底部で、外面は底付近までタタキが施されている。28は高杯の脚底部で器面調整は不明であるが、4方向の透かし穴が認められる。29は高杯の脚部で、外面上半に縦方向のミガキを施したのち、下半に縦方向のミガキを施す。杯部外面には斜め方向のミガキが認められる。30~34は、中・上層から出土したものである。30・31は、壺の底部で、30の外面は縦方向のミガキを施し、内面はナデで仕上げるが、ハケメの痕跡を残す。31の器面調整は不明である。高杯（32・33）は、いずれも杯部及び脚部下半を欠くが、杯部中央には円板を充填するものである。33は脚部上半には縦方向のミガキ、下半は折り返すような横方向のミガキが見られる。34は比較的大型の甕で、体部下半は失われているが口径19cm、体部径18cmを測る。口縁端部には、つまむように横方向のナデが施され、端部外面には明確ではないが面をもつ。体部の外面はタタキが、内面には横方向のハケメが施され、口縁部はナデで仕上げている。18~29は住居廃絶前後もので、30~34は廃絶後しばらくたってから流入あるいは投棄されたものと考えられる。



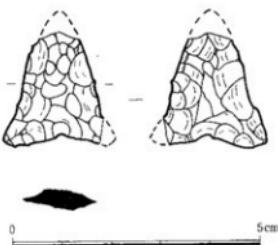
第25図 積穴住居2実測図 (1/80, 1/40)

第4項 竪穴住居3（第27図）

竪穴住居2のすぐ南東にあり、両者の距離は3.5mを測る。立地的には、竪穴住居2と同様尾根の稜線上ではなく、稜線より南西斜面寄りに位置する。距離も近く、立地も同じであるが、竪穴住居2に比べて軸を約30°東に振っている。住居の平面プランは方形で、南西部約4分の1は溜池のため削られている。

住居の南西辺は不明であるが、北東辺及び南東辺については一度拡張されている。拡張前の規模は、床面で 4.7×4 m以上を測り、柱穴と壁溝との間隔から 4.7×4.6 m、床面積 21.6m^2 に復元できる。建て替え後は 5×4 m以上で、 5×4.9 m、床面積 24.5m^2 に復元できる。深さは、最も残っている部分で35cmを測る。主柱穴は4本しか検出できなかったので、両者は主柱穴を共有するものと考えられる。柱心間の距離は2.5～2.6mを測る。住居付属の施設としては、南東辺中央に設けられた貯蔵穴のみで、床面に炉はなかった。貯蔵穴は拡張後に掘するもので、拡張前の壁溝埋土を切り込んでつくられている。平面規模は 1×0.6 mの方形で、深さは7cmを測る。

遺物は細片が多く、図化できたのは土器3点（第24図3～5）と石鎌1点（第26図）のみである。いずれも、住居廃絶後に堆積した層から出土したもので、廃絶時期を示すものではない。土器は3点とも甕の底部で、ドーナツ底のもの（3・4）と平底のものがある。4・5は底までタタキが施されている。3の外面にはハケメの痕跡が残る。内面はハケメの後、ナデを施している。石鎌は無茎式のもので、一部欠けているが、長さ2.8cm、幅2.3cmに復元できる。かなり風化が進んでおり、表面の剥離痕は明瞭ではない。

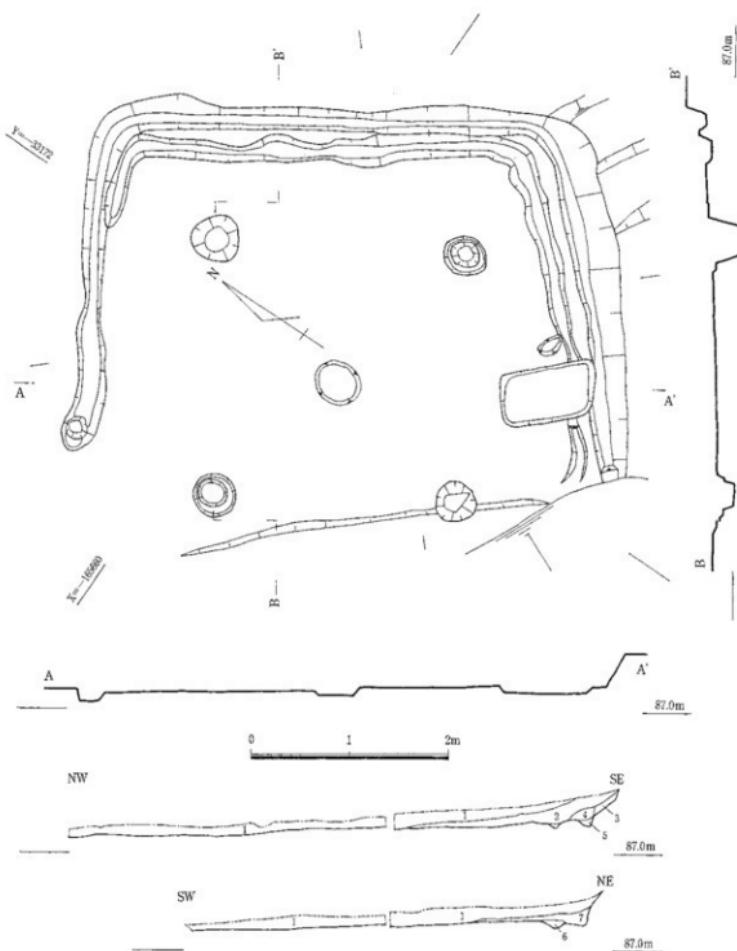


第26図 竪穴住居3出土遺物（1/1）

第5項 竪穴住居4（第28図）

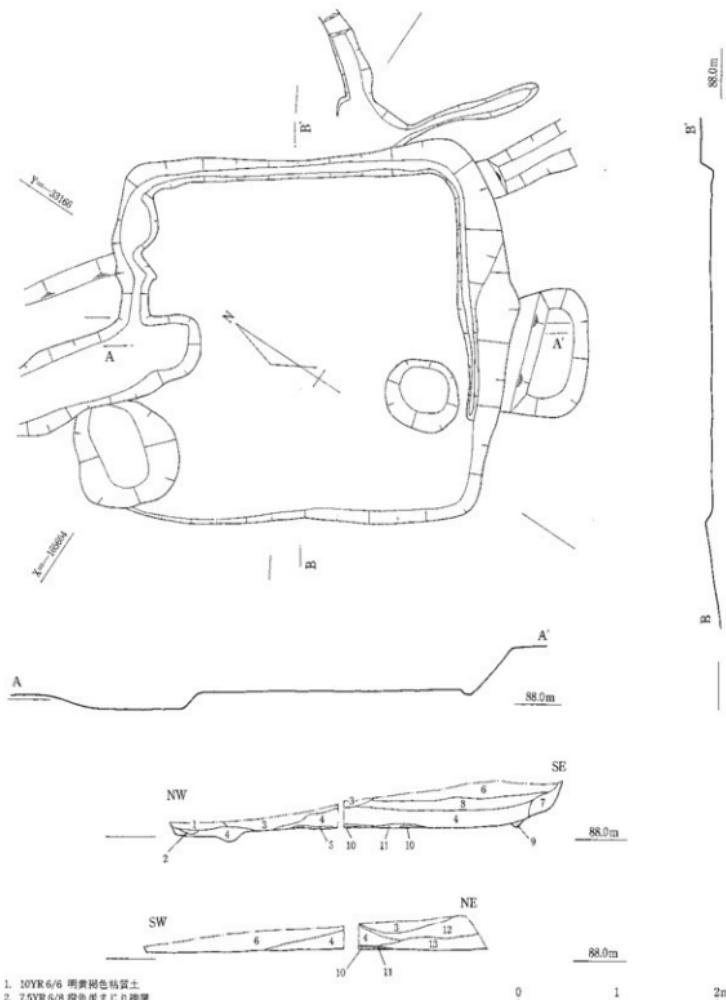
竪穴住居3の2m南東にあり、両者はほぼ軸を揃えている。竪穴住居2・3と同様、尾根稜線より南西斜面寄りに位置する。住居の南西辺は流出のため不明瞭であるが、残る3辺で壁溝を確認した。床面規模で 3.3×3.4 mを測る。深さは、最も残りの良い南東辺部分で45cmを測る。床面で柱穴は検出できなかった。また、壁溝以外の住居に付随する施設もなかった。柱穴はなかったが、形態や壁溝が巡ることから竪穴式の建物であると判断した。住居ではなく、簡単な上屋構造の竪穴建物、具体的には竪穴住居3に伴う倉庫的な建物の可能性も否定できない。しかし、具体的な数字は上げられないが出土遺物には貯蔵用具が特別多いわけでもなく、煮沸用具である甕も多く、一般的な住居と何ら変わらない土器の組み合わせである印象を受けたため、ここではとりあえず住居としておく。

遺物は土器のみで、細片が多く完形に復元できるものはない。図化できたのは6点だけである（第24図6～11）。6～8は床面からの出土、9～11は中・上層から出土したものである。6・7は甕の底部で、6は平底、7はドーナツ底で外面には底近くまでタタキを施している。8は広口壺の口縁部で、口径は15cmを測る。口縁端部外面を肥厚させ垂直に近い面をつくり、この面に竹管文を施した円形浮文を貼り付けている。



1. 10YR 6/8 明顯褐色粘質土 (礫、小石を含む)
2. 10YR 5/6 明顯褐色粘質土
3. 10YR 6/6 明顯褐色粘質土
4. 2.5Y 5/4 深い褐色粘質土
5. 2.5Y 5/5 褐色粘質土
6. 2.5Y 5/4 褐色粘質土
7. 10YR 5/6 明顯褐色粘質土

第27図 穴柱住層3実測図 (1/50)

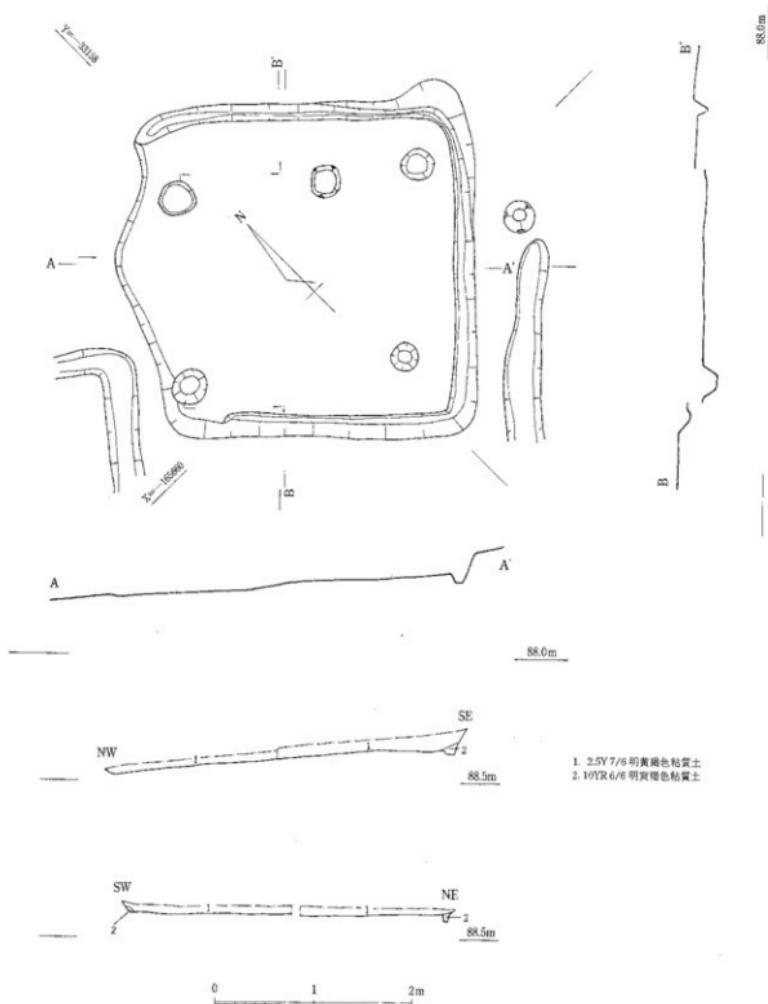


1. 10YR 6/6 明黄褐色粘質土
2. 7.5YR 6/8 深褐色灰土の複層
3. 10YR 7/6 司青褐色砂質土
4. 10YR 6/6 明黄褐色粘質土
5. 10YR 7/8 黄褐色粘質土
6. 10YR 8/4 深褐色粘質土（謙まじり）
7. 10YR 6/8 明黄褐色粘質土
8. 2.5Y 6/6 黄褐色粘質土（謙まじり）
9. 10YR 7/8 明黄褐色粘質土
10. 10YR 7/8 黄褐色粘質土（謙、灰含む）
11. 2.5Y 5/1 黄褐色粘質土
12. 10YR 8/3 深褐色粘質土
13. 10YR 7/6 明黄褐色粘質土

第28図 鋼穴住居4実測図 (1/50)

第6項 竪穴住居5（第29図）

B調査区がある尾根の基部からは北北西に張り出す地形があり、尾根稜線との間にはやや平坦な面が形成されている。竪穴住居5は、この面上の北東斜面寄りに位置する。北東側は、すぐ急斜面となって



第29図 竪穴住居5実測図 (1/50)

いる。住居の南西辺は流出しているが、残る3辺で壁溝が確認できた。住居は方形の平面プランで、床面の規模は 3.1×3.2 m、床面積 9.9m^2 に復元できる。B調査区で検出された6棟の竪穴住居の中では最も小さいものである。主柱穴は4本で、柱心間の距離は北東隅のものから時計廻り順に2m、2.2m、1.9m、2.5mを測る。床面はほぼ正方形であるが、柱の間隔は北西から南東方向にやや長い。また、柱を結んだ線の角度は直角にはならず、菱形に近い。主柱穴、壁溝以外には住居に付属する施設は検出できなかった。

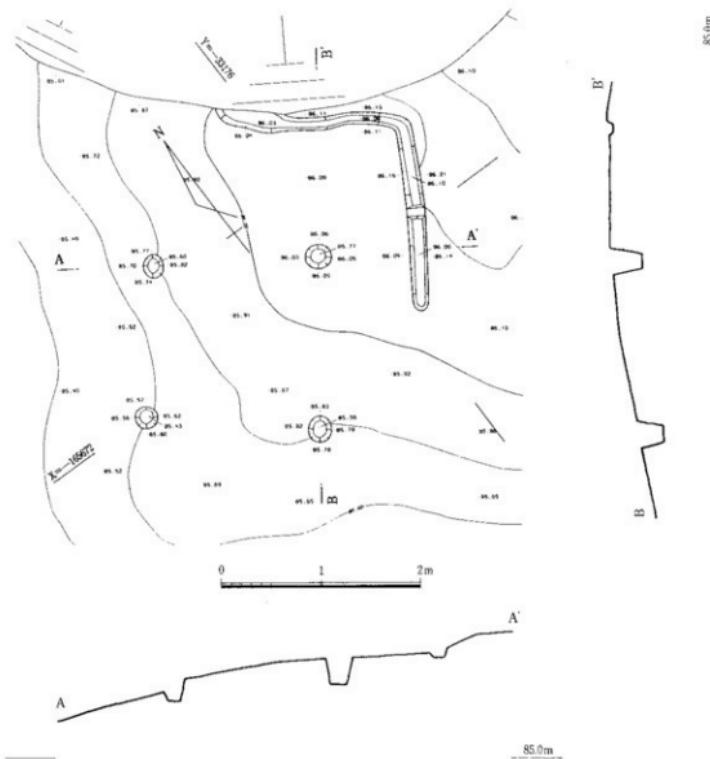
遺物は少なく、図化できたのは2点だけである（第24図12・13）。12は南東辺の壁溝際からほぼ完形で出土した甕で、球形の体部からくの字に屈曲する口縁部がつく。底は丸底で器壁も薄い。器高は20.5cm、体部高は18cm、口縁部径・体部径はそれぞれ13.5cm、18.5cmを測る。口縁部はやや内湾ぎみで、端部にはつまむように横ナデを施し、上端はやや内傾する面となっている。体部外面の器面調整は、不整方向の細かいハケメの後、弱いナデで仕上げているが、ハケメの条線は明瞭に残っている。内面はケズリの後にナデを施す。頸部から口縁部にかけては、横方向のハケメの後、横ナデを施している。13は下層から出土した高杯の脚部で、下半は屈曲して大きく開き、杯底部には円板を充填している。器面調整は明瞭ではないが、外面上半に縱方向のミガキの痕跡が残る。

12・13はいずれも布留期に属する土器で、出土状況から流入あるいは廃棄という状況は考えにくく、住居の廃絶時期を示すものである。また、住居内からの遺物出土量は極めて少なく、付近からも明確に布留期に属する土器も出土していないため、住居の存続期間は極めて短かったと考えられ、住居の存続時期を限定することができる。このため、住居6は明らかに古墳時代に時期が下るもので、他の竪穴住居とは、別グループのものであると考える必要がある。

第7項 竪穴住居6（第30図）

竪穴住居3の南西にある溜池のさらに南西側の斜面で、表土除去中に土器が多く出土する部分があつたため付近を精査したところ、直角に曲がる溝とこれに対応するように、ほぼ正方形に並ぶ柱跡を検出した。形態や位置関係から、方形の竪穴住居の壁溝と主柱穴であると判断し、竪穴住居6とした。住居6は、他の住居が尾根稜線近くに位置するのに比べて、尾根稜線からかなり南西斜面を下ったところに位置する。稜線からの距離は約10m、稜線上との比高は約2mを測る。主柱穴は4本で、柱心間の距離は1.6～1.8mを測る。壁溝は幅20cm、深さは10cmを測り、東隅付近の約4分の1が検出できたため、住居の規模はほぼ復元できる。壁溝と柱穴との距離は、北東辺で1.2m、南東辺で0.8mを測る。主柱穴と壁溝の間隔から導かれる床面規模は、 3.5×4.4 m、床面積で 15.4m^2 となる。残存状況が悪く、壁溝・主柱穴以外、住居に付属する施設は不明である。

遺物は、遺構の残存状況が悪かったのに比して出土量が多い。いずれも、溜池南西の斜面を掘削中に出土したものである。溜池部分に同時期の他の遺構があった可能性は否定できないが、遺構の配置状況や出土状況から、いずれもほぼ住居6に伴うものであるとして差し支えないと判断できる。うち、図化できたのは4点である（第24図14～17）。しかし、住居内の出土位置や層位は不明である。14は器台で、内面には横方向のハケメを施す。15～17はいずれも甕の底部であるが、15はドーナツ底、16は上げ底、17は平底と変化に富む。16の外面にはタタキがあり、17の内面にはハケメの痕跡が残るが、他の器面調整の細部は不明である。



第30図 積穴住居6実測図 (1/50)

第8項 その他の遺構

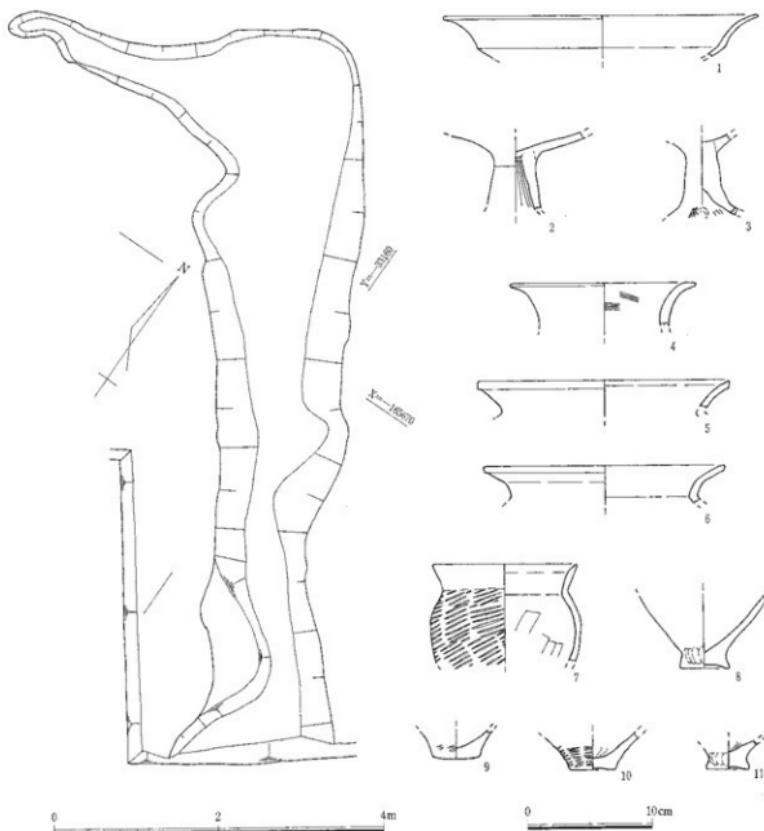
溝3 (第31図)

調査区の南西端、尾根稜線上の南西斜面寄りを、ほぼ稜線に平行して北西方向に流れる溝である。積穴住居4の1m手前で、南西方向にほぼ直角に屈曲している。この先は流出しているため、先の形状及びどこまで流れているかは不明である。溝の規模は、現状で幅1.3~2m、深さは70cmを測るが、上部は削られているようで、特に南西肩部は流出しているため、本来は幅・深さともにもう少し大きかったようである。

遺物はかなりの量が出土しているが、層位的に取り上げることはできなかった。図化できたのは11点で、全体を復元できるものはない。器種は高杯(1~3)、壺(4)、甕(5~11)である。1の高杯

は、浅い杯部から外側に屈曲する口縁部をもつ。口縁部径は25.4cmを測る。高杯の脚部には、中空のもの（2）とそうでないもの（3）がある。4は壺の口縁部で、端部はあまり外反しない。内面には横方向のハケメを施す。甌も全体の法量がわかる個体はなかったが、口縁部径が20cm近い大型のもの（5・6）と11cmの小型のもの（7）がある。底部の形状には平底（9）、ドーナツ底（10）、上げ底のもの（8・11）がある。上げ底のものは、底に指頭圧痕が残る。

溝3の性格であるが、住居の配置から尾根の稜線上には各住居を結ぶ道があったと想定できる。溝3はこの道に沿い、住居の手前で外側へ向きをかえているため、集落の南西縁を区画する溝とも考えられるが、一部しか検出していない状況では、その性格は不明とせざるを得ない。

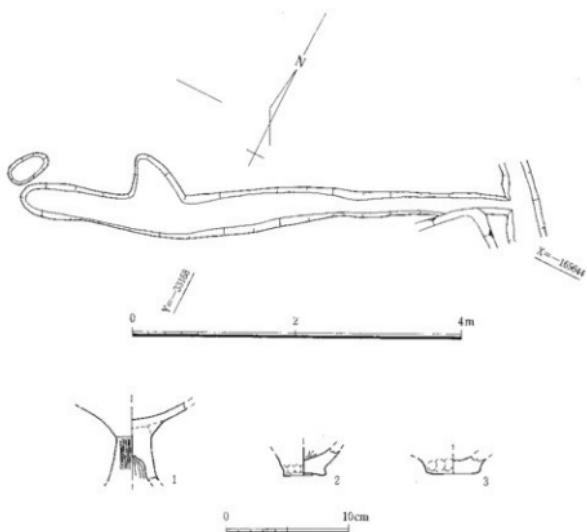


第31図 溝3実測図 (1/60、1/4)

溝2（第32図）

竪穴住居5の北から北西方向に幅約50cm、長さ17mの溝1が流れている。溝2は、この溝1から直角に分岐し、平坦面の北西斜面を等高線に沿うよう南西方向に掘られている。途中でなくなっているが、先は竪穴住居2の方向に向いている。溝の幅は50cm、深さは20cmを測る。本来は幅・深さともにもう少し大きかったようである。検出できた延長は6mであるが、この先はどこまで延びていたかは不明である。

溝内からは少量の土器が出土している。いずれ



第32図 溝2実測図 (1/60、1/4)

も細片で、図化できたのは3点である。1の高杯は、浅い杯部に脚部を合わせ、粘土を詰めて固定している。外面には縦方向のミガキを施す。2・3は甌の底部で、2は上げ底、3は平底である。両者とも底に指頭圧痕が見られる。

溝1・2とともに集落の縁辺を区画するようなあり方を示すが、溝3に比して小規模である。全体の形状が不明である状況では、その性格は不明であると言わざるを得ない。

土坑1・土坑2（第33図）

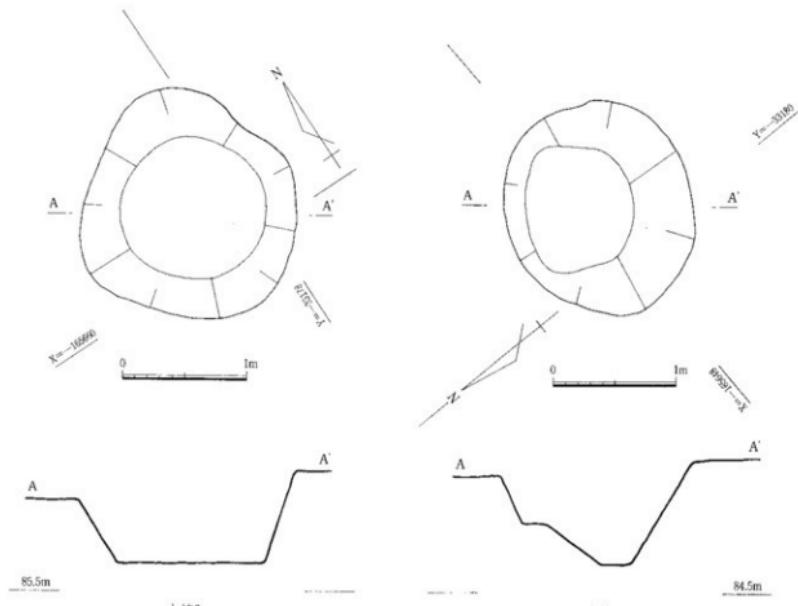
竪穴住居2の北に土坑1が、南に土坑2がある。土坑1は直径約1.5mの円形で、深さは90cmを測る。試掘調査で検出されたもので、その際には、縄文時代の落とし穴の可能性があるとされていた。

土坑2は、直径約1.8mの円形で、深さは70cmを測る。土坑1・2は、立地や形状もよく似ており、埋土も酷似する。A調査区の土坑1と同様、埋土の土質的には弥生時代に先行する可能性もあるが、遺物も出土せず、底のピットも検出できなかった状況では、ともに所轄時期・性格は不明とせざるを得ない。

第9項 小結

94年度B調査区では、弥生時代後期後半から庄内式平行期にかけての竪穴住居5棟と溝3本、古墳時代の竪穴住居1棟を検出することができた。

弥生時代後期後半から庄内式平行期にかけての竪穴住居5棟のうち、2棟は建て替えあるいは拡張が



第33図 土坑1・土坑2実測図 (1/40)

なされており、一定期間存続していたものと考えられるが、出土遺物が乏しいこともあります。その前後関係やそれぞれの明確な時期を明らかにすることはできなかった。しかし、5棟のうち3棟は尾根稜線際に並び、1棟はやや南西斜面に寄るが比較的近い位置に、残る1棟は距離を離すが先の3棟と同じく尾根稜線際に建てられていた。稜線上の道や集落の南西縁辺を区画する可能性のある溝を想定した場合、5棟の住居がそれぞれ有機的に結ばれていたと考えることは、それほど無理はないであろう。稜線上の道は、昭和43・44年に大阪府教育委員会によって調査されたB地区へも続き、B地区とも有機的に結ばれていた可能性もある。大阪府教育委員会の調査では、円形の住居のみから、途中から方形の住居が出現し、やがて方形の住居のみになる大まかな流れが読み取れる。今回の調査で検出した住居はいずれも方形の住居である。単純に同じ変化をするものとはできないが、住居の時期を考える上で示唆的である。今回調査した尾根上はあまり広くなく、しかもやや傾斜している。集落の立地条件としてはさほど恵まれていたとは考えにくいが、5棟から構成される集落が存在した。このことは、試掘調査で大型の方形竪穴住居が見つかった丘陵上の広い平坦面に大規模な集落が存在するとした想定を補完するものとなるであろう。

古墳時代の住居は1棟であり、他の住居とは明らかに時期差が認められる。東山遺跡では、他に同時期の住居は見つかっていないため、古墳時代の集落の中心を別に求める必要がある。具体的には伽山遺跡に中心があり、住居6が最南端に位置し、途中の尾根上にも同時期の集落が存在する可能性を示しておきたい。

第5節 94年度C調査区（第35図）

第1項 はじめに

大阪芸術大学南東端にある標高約106mの山から北西方向に派生する2本の尾根の内、南側のものは上部に約5000m²の平坦面があり、先述したとおり大規模な集落の存在が予想されたため、今回の造成計画からはずされている。この尾根の北西斜面と、さらに谷をはさんで北西にある尾根の東半分が94年度C調査区で、西半分が86年度調査区にあたる。学校建設以前の地形図をみると86年度調査区の更に北西側にも谷をはさんで独立丘陵があり、さらに北西に低平な尾根がのびている。現在校舎が建ち並んでいるところである。調査区北西部の南西側は現在のグラウンド造成の際に削られて急斜面となっている。調査区北側も谷が入り込んでおり急斜面となっている。試掘調査第16トレンチでは、調査区中央の谷底にあたる層から土師器、須恵器、弥生時代後期の土器片が出上している。また、丘陵上の86年度調査区につづく部分にあたる第17トレンチでは遺構・遺物は確認されていなかったが、占墳関連の遺構の存在が予想されたため当該期の遺構検出につとめた。

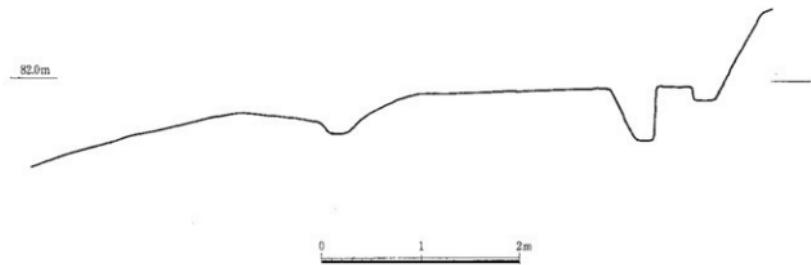
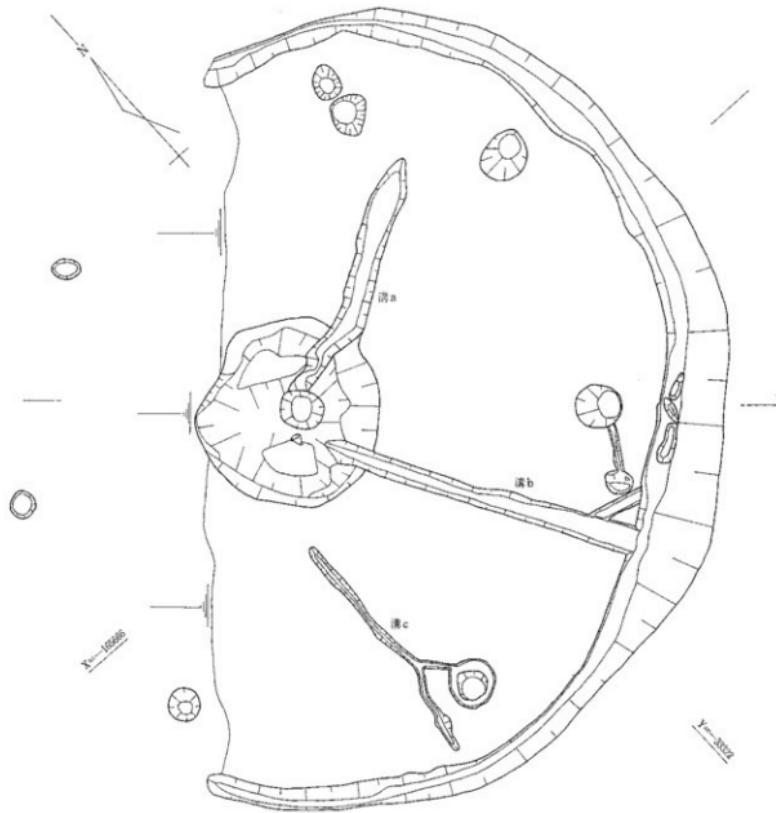
第2項 壇穴住居（第34図）

調査区の最東端、試掘調査で方形の壇穴住居が検出された尾根の北西斜面に位置する。斜面にあるため北西側の半分近くは流失しているが、斜面側に位置する主柱穴はかろうじて残っている。平面プランは円形で、斜面に直行する方向で計測した床面規模は直径7.8m、床面積47.8m²であるが、主柱穴の位置関係から斜面方向がやや短い楕円形になる可能性もある。深さは最も残りの良い部分で80cm、床面の標高は81.9mを測る。

主柱穴は7本で、柱心間の距離は北西の柱穴から時計回り方向順に2m、2.8m、3.2m、2.9m、2.6m、2.5m、3.2mを測る。柱心間の距離にはかなりばらつきがあり、均等には配置されていない。なお、北西の柱穴は2つ並ぶようにあるが、壁溝との距離などから外側のものを採用した。もう一方の柱穴の用途は不明である。主柱穴の掘方は、外側がほぼ垂直に掘り込まれているのに対し、内側では斜めに掘られている。柱を立てる際の利便性を考慮したものであろう。また、床面から掘方底までの深さは70~80cmと深く、かなり長い柱を用いていた可能性が指摘できる。床面の南南東端、壁溝際にも小さなピットがあるが、壁が最も高くなる部分であり住居入口には不自然な方向のため梯子の痕跡とは考えにくく用途は不明である。

床面中央にはがが設けられている。炉は直径約2mの平面円形のもので、断面は円錐形を呈し、中央部は一段深く掘り込まれており、深さは45cmを測る。壁面はかなり焼けている。

住居内には壁溝以外に何本かの溝が掘られている。うち3本は、それぞれ住居中心から放射状にのびるが、起終点や規模に差異が認められる。中心から北東方向の溝aは幅30cmを測り、南西端は炉心まで達しているが、底のレベルを徐々に上げ、壁溝の1.1m手前で終わっている。長さは2.6mを測る。南東方向の溝bは、壁溝から炉壁の中程まで達している。長さ3.3m、幅20~30cmを測り、底のレベルは中心に向かって下がっている。南方向の溝cは、壁溝の15cm手前から始まり、炉の60cm手前で終わり、壁溝にも炉にも通じていない。方向も中心からずれている。また、幅10cm、深さ6cmと他の2本に比べて小さい。長さは2.6mを測る。底のレベルはほぼ水平であるが、わずかに中心に向かって下がっている。さて、この3本の溝の用途であるが、壇穴住居は地面に穴を掘って屋根を架ける構造上、内部の



第34図 穂穴住居実測図 (1/50)



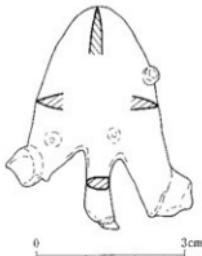
第35図 94年度C調査区遺構配置図 (1/500)

除湿には気をつかう必要がある。このため排水溝が掘られる場合があるが、通常はB調査区竪穴住居1のように、炉または壁溝から住居外への排水を目的とするものである。溝a・溝bの形態では、炉に水を呼び込むたちになり、炉から外部への排水溝がないため、雨が降ると炉が使えなくなる可能性があり、全くもって不自然である。また、炉に向かって傾斜し、炉に達しているため住居内を区切る施設に伴うものとも考えにくい。したがって、溝a・溝bの用途は不明とせざるを得ない。溝cについては、真っ直ぐ通らず、途中で主柱穴へと枝分かれしているので若干の疑問が残るが、住居内を区切る施設に伴うものであると考えておきたい。溝bから分かれる溝は、溝b自体の用途が不明である以上、やはり用途不明とせざるを得ない。主柱穴と小ピットをつなぐ溝も、これらが一体となって何らかの用途に用いられたのであろうが、現状ではやはり用途不明とせざるを得ない。

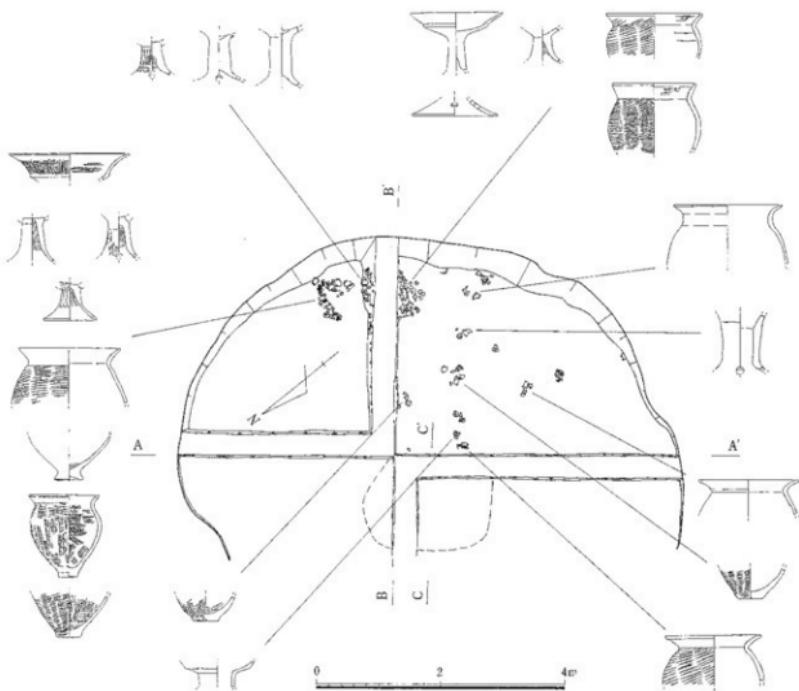
住居内からは、多量の遺物が出土している。遺物は層位的に取り上げたので、最初に出土状況についての説明を行う。第37図の上層断面を見ると、住居内は南東から北西に下がる斜面堆積となっており、住居廃絶後ある程度たってからの堆積層2が中央部では床面付近にまでおよんでいる。このため、住居内の壁溝・ピット・炉から出土したものは問題ないが、床面にあっても住居廃絶時期を示さない可能性がある。ここで床面出土としたものは出土位置などから、ほぼ当初の床面にあったか少なくとも堆積層8内におさまると判断したものである。下層は堆積層8から出土したもので、住居廃絶直前あるいは直後のものである。堆積層2からは、土層図を見てもわかるとおり多量の上器が出土したので、出土状況を記録してブロックごとに取り上げた。これが中層出土の土器で、その出土位置は第37図に示したとおりである。しかし、これは図面を掲載できたものに限るので住居内の器種ごとの構成のあり方を示すものではないことを断っておく。上層としたのは堆積層1からの出土である。付近包含層としたものは表土除去中や遺構検出中に住居付近から出土したもので、上層のものから元々の床面にあって下に流れたものまでを含む。したがって、住居内の遺構、床面及び下層出土の土器（第38図）は住居の廃絶前後の時期のもので、中・上層の土器（第39図29~54）は住居廃絶後一定期間が経過した後、流入あるいは上方の集落から廃棄されたものと考えることができる。

中層出土の土器には二重口縁の壺(29)や体部径が口径を上回り、球形に近い体部をもつ壺(52・53)があるなど、明らかに弥生時代後期後半以降の様相を示している。一方下層出土の土器は、連続ラセンタキを施し、球形に近い体部をもつ壺(11)など新しい様相のものも含むが、後半には衰退する長頸壺(7)や中空軸の高杯(15)の存在など古い要素も読み取ることができる。この竪穴住居が円形であることも考慮して、弥生時代後期前半のある時期に建てられ、後半に入ってから廃絶されたものとしておきたい。

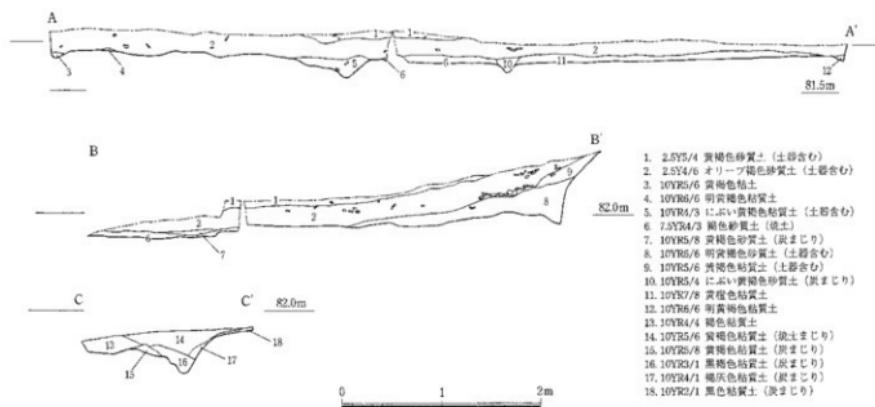
なお、付近包含層からは土器以外に鉄鏃（第36図）が出土している。欠損や錯のため、正確な形状は不明であるが、長さ4.5cm、幅3cmを測る。一緒に出土した土器から、その所属時期は布留期、つまり古墳時代までは下らないと考えられる。



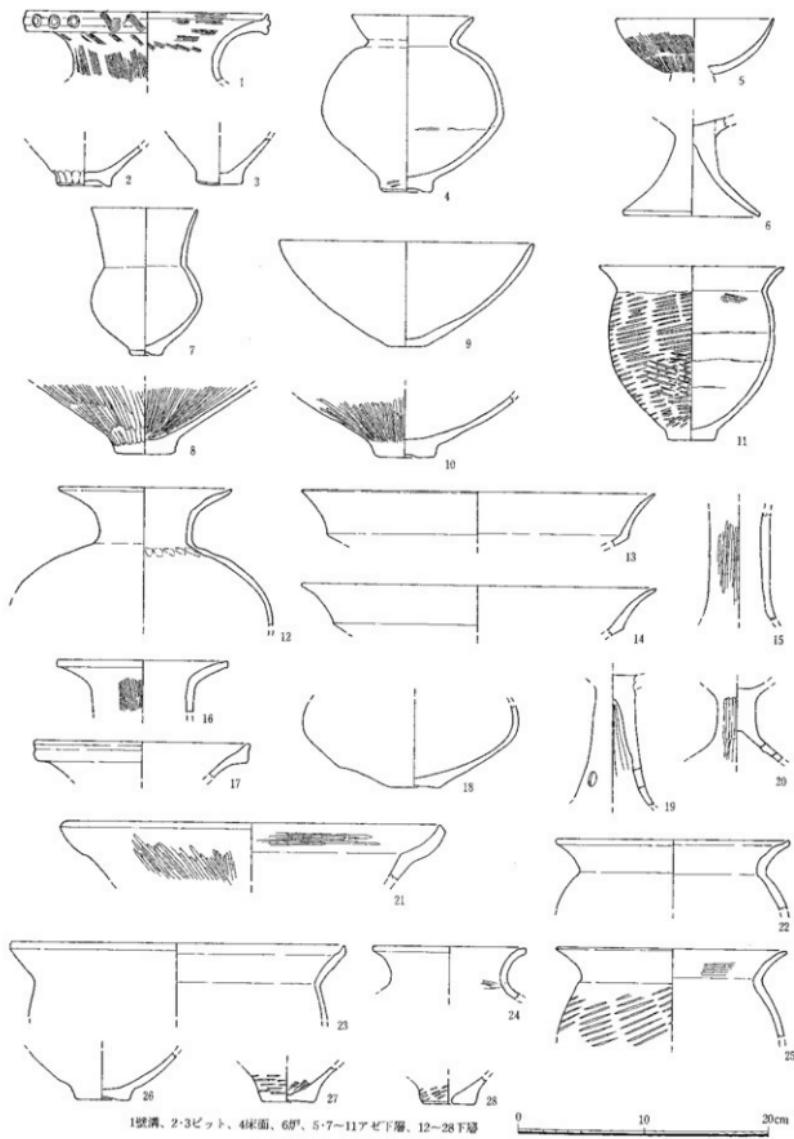
第36図 竪穴住居出土遺物（1/1）



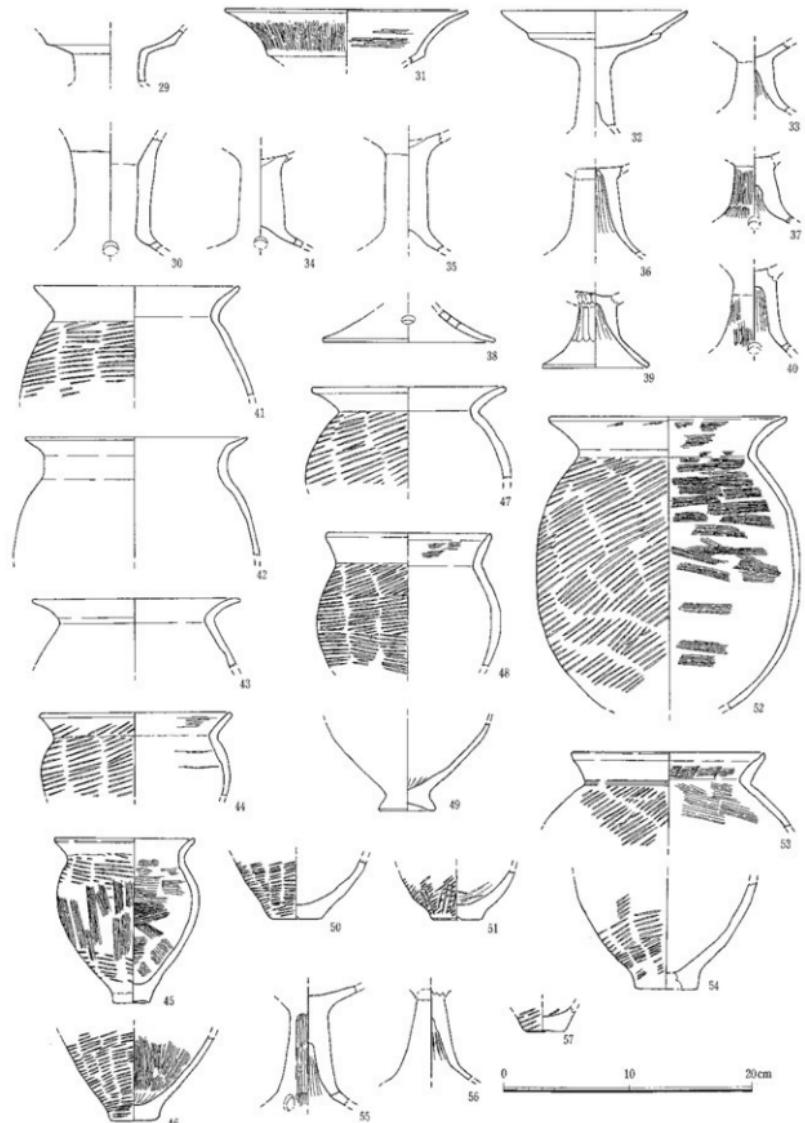
土器は1/8



第37図 聲穴住居中層遺物出土状況 (1/80)・土層断面図 (1/50)



第38図 穴住居出土遺物実測図①(1/4)



29~51中層、52~54上層、55~57付近包含層

第39図 積穴住居出土遺物実測図②(1/4)

第3項 1号土壙墓（第40図）

調査区北西部の丘陵上で検出した土壙墓である。墓壙は、 $3.4 \times 1.6\text{ m}$ の隅丸長方形で、深さは現状で55cmを測る。周囲を精査したが墳丘があったことを示すものはなく、墓壙は地山を穿っているため、明確な墳丘をもっていなかったと判断した。中層で平面的に、また断面でも木棺の痕跡が確認できた。おそらく、組み合わせ式の箱型木棺であろう。南西側は明瞭ではないが、痕跡から推定できる棺の規模は、外寸で $2\text{ m} \times 60\text{ cm}$ である。棺の小口部には灰白色の粘土を詰めている。

遺物は、棺内から出土した鏡（第42図1）と墓壙横から出土した供献上器のみである。土器は、上部が削られ底の部分しか残っていないかった。残存状況が悪く、土ごと取り上げた際に丸底であることを確認した以外、詳細は不明である。墓壙との位置関係などから1号土壙墓に供献されたものと考えて間違いないであろう。

鏡は中央からやや南西寄りで、鏡面を下にした状況で出土したもので、直径 6.5 cm の小型仿製鏡である。背面には縁の内側に櫛歯文帯を、鋏の周囲には珠文を配した圈線を巡らせている。かなり腐食がすんでおり、内区の文様ははっきりしないが、かすかに人あるいは獸のような文様が見られる。出土位置から、被葬者の胸あたりに置かれていたと考えられる。この場合、頭位は南西になる。

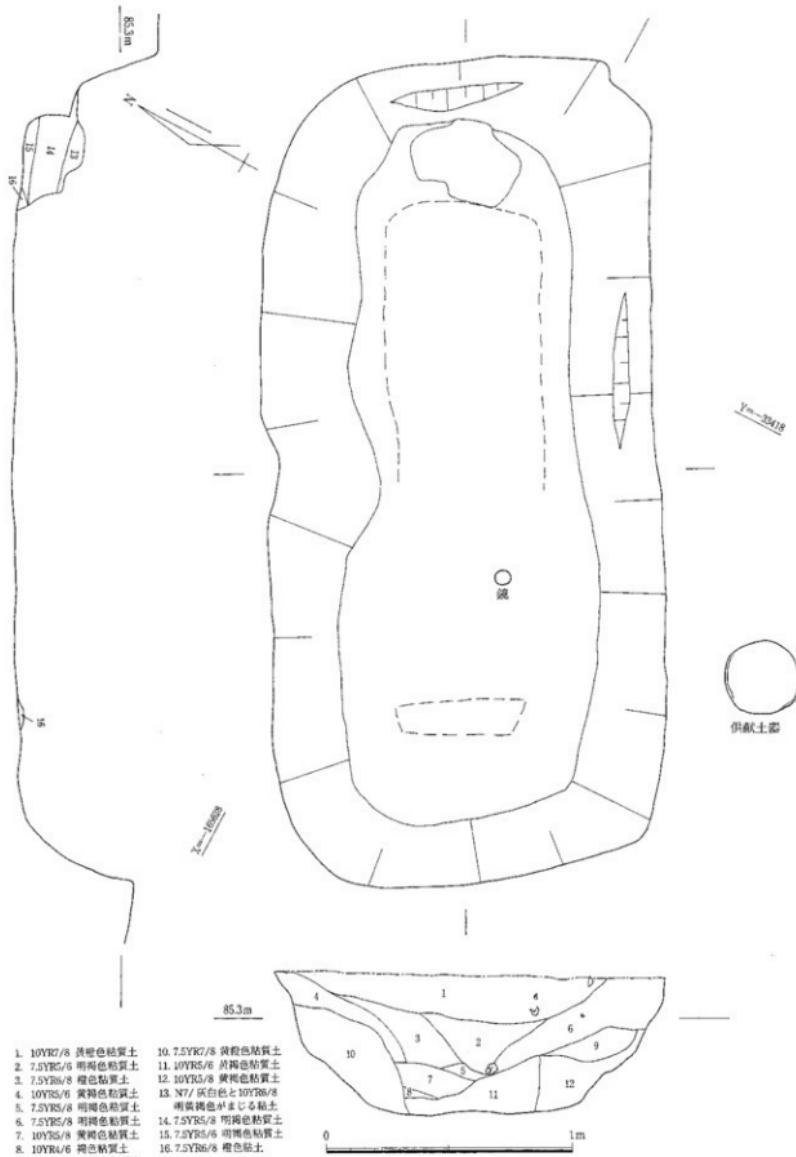
第4項 2号土壙墓（第41図）

1号土壙墓の北北西 13 m のところに位置する。周囲には墳丘があったことを示すものはなかった。墓壙は、一旦 $3.2 \times 1.8\text{ m}$ の大きさで掘り、棺の部分を 70 cm の幅で、さらに 25 cm 挖り下げている。木棺が腐った部分にしみ込んだ粘土の痕跡が明瞭に残っていたため、1号土壙墓と同様に組み合わせ式の木棺を埋葬していたと考えられる。棺の小口部分に灰白色の粘土を詰めている状況も同じである。痕跡から推定される棺の外寸は $2\text{ m} \times 45\text{ cm}$ である。1号土壙墓のものに比べてかなり幅が狭い。また、長側板が小口より突き出していた可能性もある。

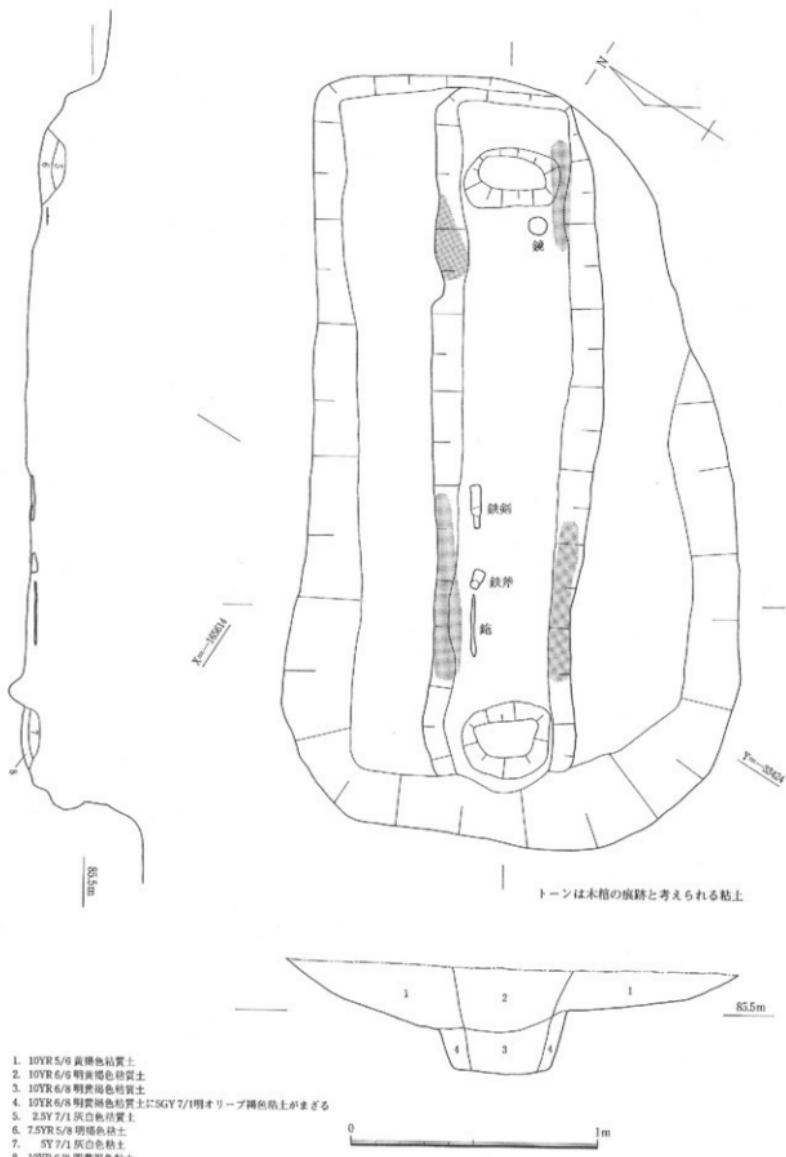
棺内からは北東隅で小型仿製鏡が、北西の側板寄りで中程から鉄剣、鉄斧、鎗が順に並んで出土している（第42図2～5）。鏡は鏡面を下にした状態で出土したもので、直径は 8.1 cm を測る。鏡背面には、縁の内側に2重の櫛歯文帯を巡らせ、内区には4つの円弧を配している。円弧の頂部からは3本の線とその両側に篆手文がある。円弧の間には3本の線を、線の両側には5ないし7の点を配している。剣は先を北東方向に向けて副葬されていた。先端は欠けているが、残存長は 15.6 cm 、幅 3.2 cm を測る。柄部は長さ 6.2 cm 、幅 2.5 cm を測る。柄には目釘穴があけられ、端部には糸を巻いている。鉄斧は袋状のもので長さ 7.7 cm 、刃部幅 4.1 cm を測る。鎗は、長さ 24.7 cm 、幅 0.7 cm を測る。剣先から推定できる頭位方向は1号土壙墓と同じく南西である。この場合、鏡は足元に置かれていたことになる。

2基の土壙墓は、丘陵上の近接した位置に、しかも両者の主軸の振れは約 5° とほぼ平行するようにつくられている。おそらく相前後する時期につくられたものであろう。その時期は、鉄器の形から古墳時代前期の末頃であろう。

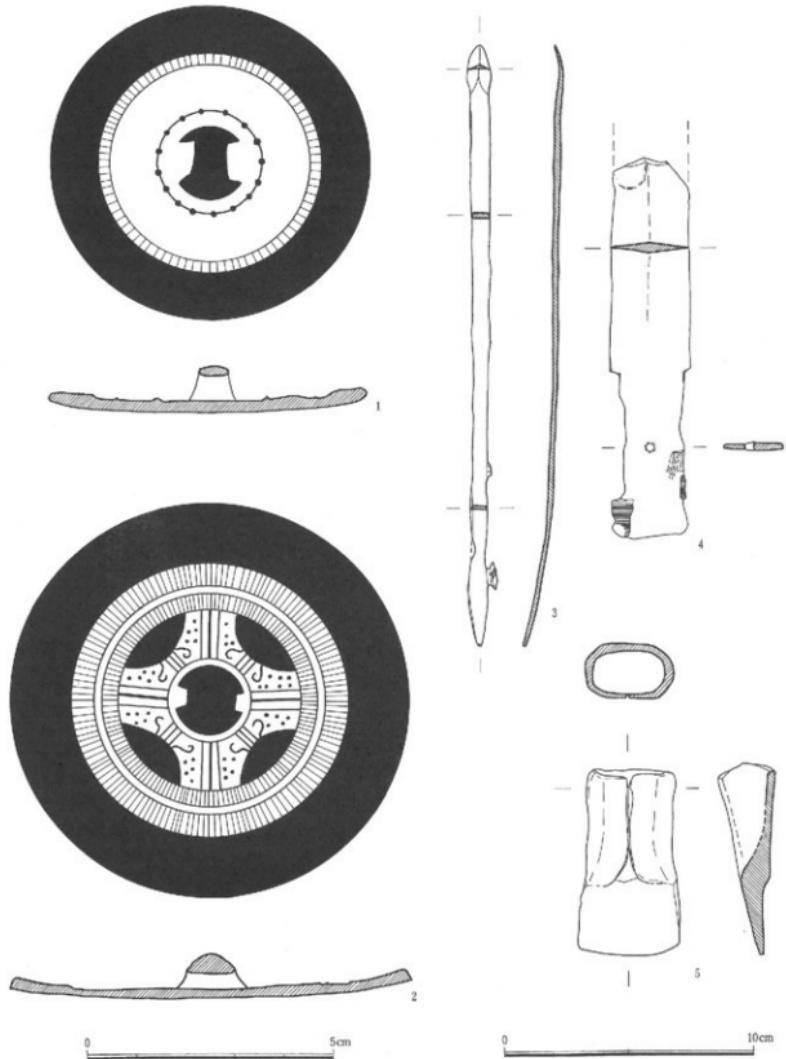
2号土壙墓の北北西 12 m には、86年度調査区の3号墳がある。土壙墓と古墳の位置関係（第43図）を見ると、丘陵上に土壙墓、古墳が整然と並んでいるのがわかる。この両者にも密接な関係があるのは確実である。古墳時代前期には、何らかの規制を受けて、墳丘は築けなかったが、次代には墳丘をもち埴輪を並べる古墳をつくる小首長の姿が見て取れる。2基の土壙墓と3基の古墳、それぞれの具体的な関係は不明であるが、小首長のあり方を考える上で興味深い資料である。



第40図 1号土壤剖面图 (1/20)



第41図 2号土壤基実測図 (1/20)



1号土壙墓（1）、2号土壙墓（2～5）
銅背面の文様は模式図

第42図 1・2号土壙墓出土遺物実測図（1/1、1/2）



第43図 土壌基と古墳の位置関係 (1/1,000)

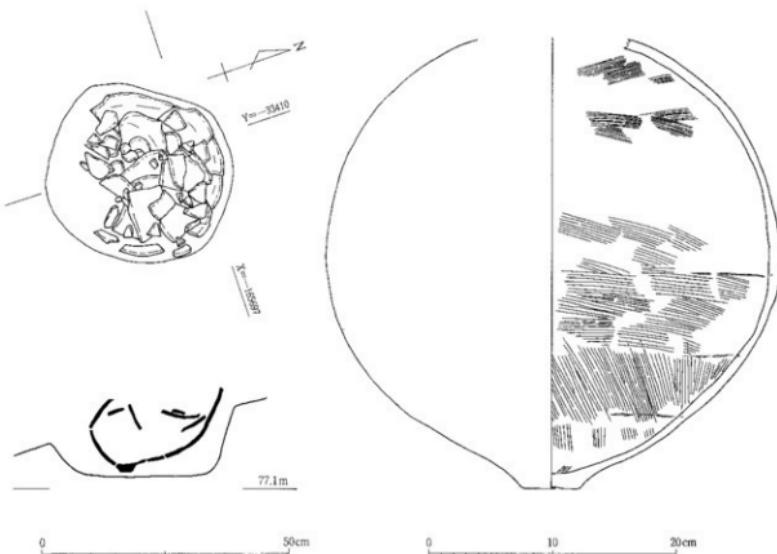
第5項 その他の遺構

土器棺墓2（第45図）

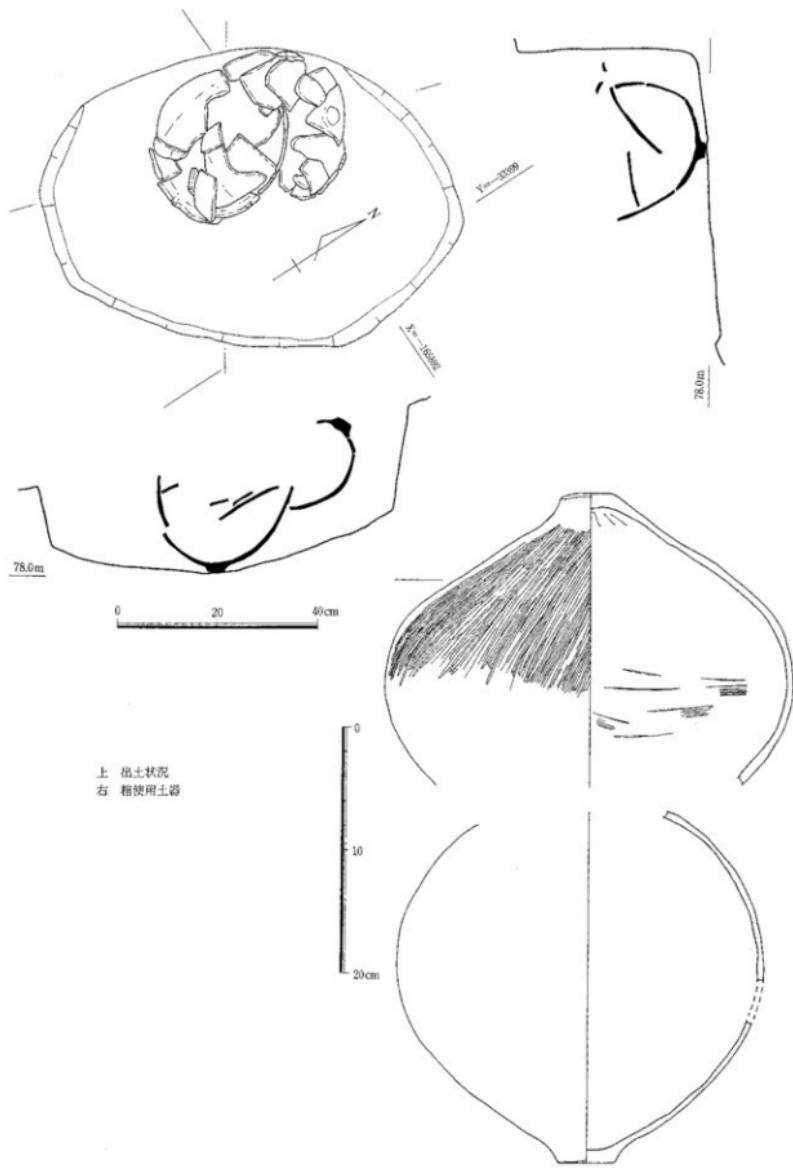
土墳がある丘陵の南向き斜面、稜線付近で検出したものである。正確には土器棺を使用する土墳墓と呼ぶべきであろうが、前項の土墳墓と区別するため、土器棺墓の名称を用いる。墓壙は85×60cmの楕円形で、ほぼ垂直に掘られている。深さは現状で35cmを測る。棺は、口を欠いた壺2個を上下に合わせたもので、墓壙の中央ではなく北西際に埋葬している。上の壺は斜めに崩れた状態で出土している。副葬品はなかった。棺身に用いた壺は球形の体部で、体部径30cm、現存高29cmを測る。頸の部分から上を欠き取っている。内外面ともナデ調整している。蓋に用いた壺は偏球形の体部で、体部径33cm、現存高24cmを測る。外面には縦方向のミガキが、内面には横方向のハケメを施した後、ナデている。身のものより肩寄りから上を欠き取って、合わせる口の径を大きくしている。弥生時代後期のものである。

土器棺墓3（第44図）

土器棺墓2の13m西、南西向きの斜面で検出した。墓壙は直径40cmの円形で、深さは現状で15cmを測る。棺は墓壙の中央に据えられている。蓋はなかったので、流失しているものと考えられる。副葬品もなかった。棺には球形の体部をもつ壺が用いられている。体部径37cm、現存高は37cmを測る。頸から上を欠き取っている。外面の器面調整は不明であるが、内面にはハケメを施している。土器棺墓2と同様弥生時代後期のものである。



第44図 土器棺墓3実測図(1/10, 1/4)

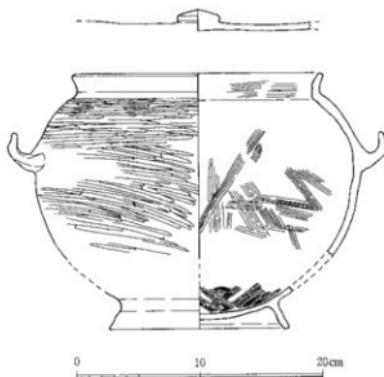


第45図 土器棺墓2実測図 (1/10、1/4)

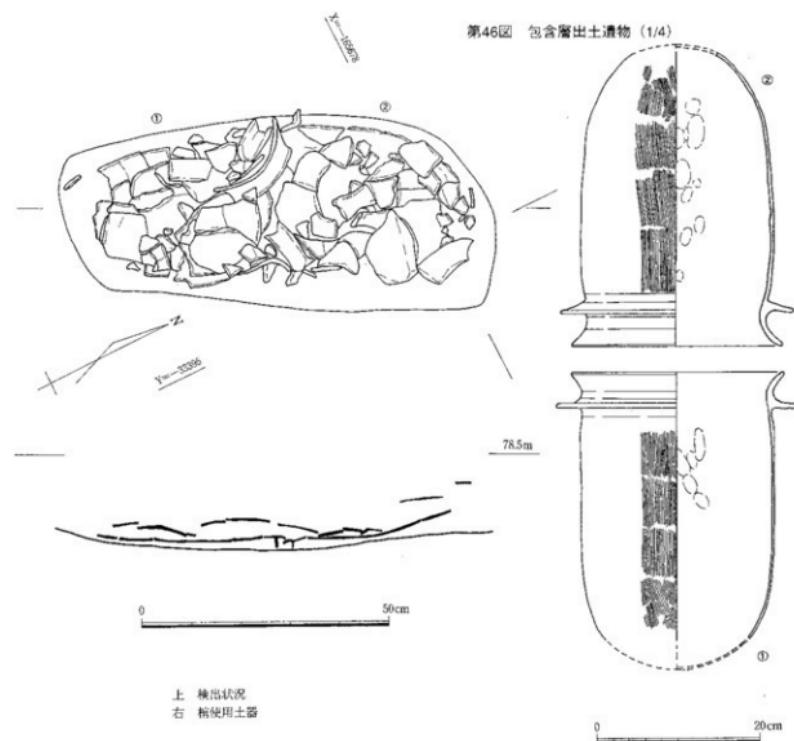
土器棺墓 1 (第47図)

土器棺墓 2 の14m北、東向きの斜面で検出したものである。上部は流失しているため、墓廣の規模は不明である。棺は、土師器の羽釜 2 個を用い、口を合わせて横方向に埋葬されていた。棺に用いられた羽釜は、いずれも胴長の体部に屈曲して外反する口縁部をもつ。外面は縦方向のハケメを施し、内面には指頭圧痕を残している。

また、付近からは土師器の壺と蓋（第46図）が、まとまって出土しているため、火葬墓もあった可能性がある。



第46図 包含層出土遺物 (1/4)



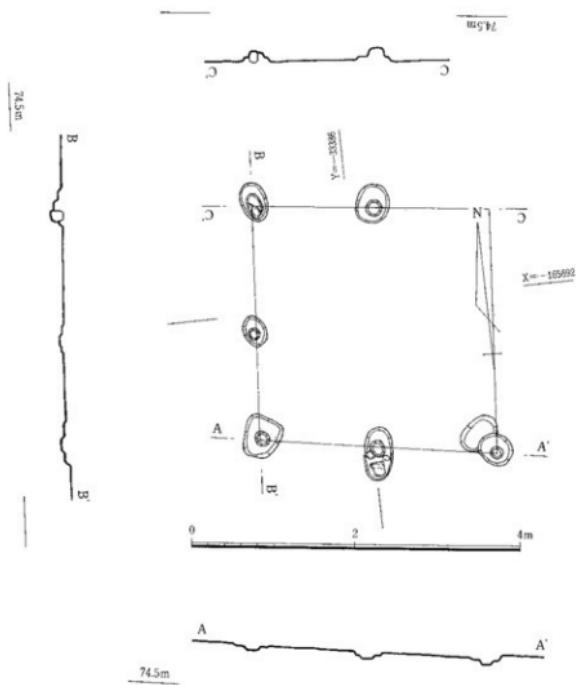
第47図 土器棺墓1実測図 (1/10, 1/6)

建物 1 (第48図)

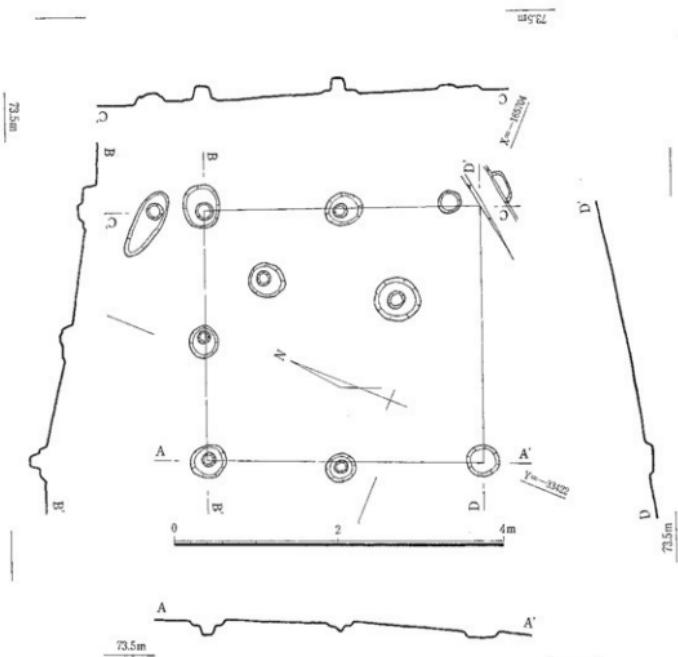
谷底部の南寄りで検出した 2 間 × 2 間の掘立柱建物である。東辺は北東隅と真ん中の 2 本が失われている。南北・東西方向ともに、2.8 m を測るが、各辺は直角に交わらず正方形にはならない、かなりひずんだ規格性に欠ける建物である。軸は約 5° 東に振っている。

建物 2 (第49図)

調査区の最南端、南西向きの緩やかな斜面で検出した 2 間 × 2 間の掘立柱建物である。付近にはピットがいくつかあるが、南東隅と南辺の真ん中と 2 本の柱は失われているが、建物として捉えられるのはこの 1 棟だけである。建物の軸は西へ 21° 振っている。南北 3.2 m、東西 3.1 m を測り、床面積は 10.2 m² である。建物 1 と違い、各辺は直角に交わる。図化できなかったが、ピット掘方から奈良時代の土器片が出土している。



第48図 建物1案測図 (1/60)



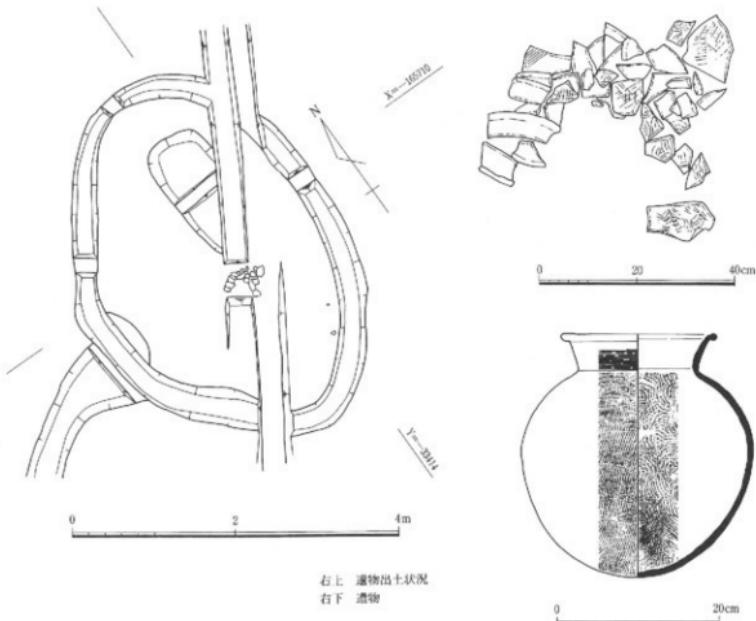
第49図 墓2実測図 (1/60)

円形周溝遺構 (第50図)

調査区の最南端、建物2のすぐ南東に位置する。長径4.3m、短径2.8mのややいびつな橢円形に、幅30~40cm、深さ15cmの溝が巡っている。溝の内側の北寄りには幅60cm、長さ1.7m、深さ15cmの長方形の土坑がある。また、中央からは須恵器の壺がほぼ01個体分、ここに置かれていたような状態でまとめて出土している。

遺構中央におかれているのは、須恵器の壺形土器である。器高30cm、口縁部径19cm、体部径28cmを測る。口縁端部は丸くおさめている。体部外面は格子タタキで上半から口縁にかけてカキメを施す。

さて、この遺構の性格であるが、土坑は北に寄っているため、土坑を中心に周溝が巡るようでもない。むしろ中心に位置するのは、置かれていたような状態で出土した土器である。この三者ははたして同一遺構に伴うものであるかは疑問が残るところである。同一のものと仮定した場合、単純に考えると墓で、円形周溝墓と呼ぶべきものになるのだろう。しかし、決定的な証拠がない以上、遺構の性格は不明とせざるを得ない。



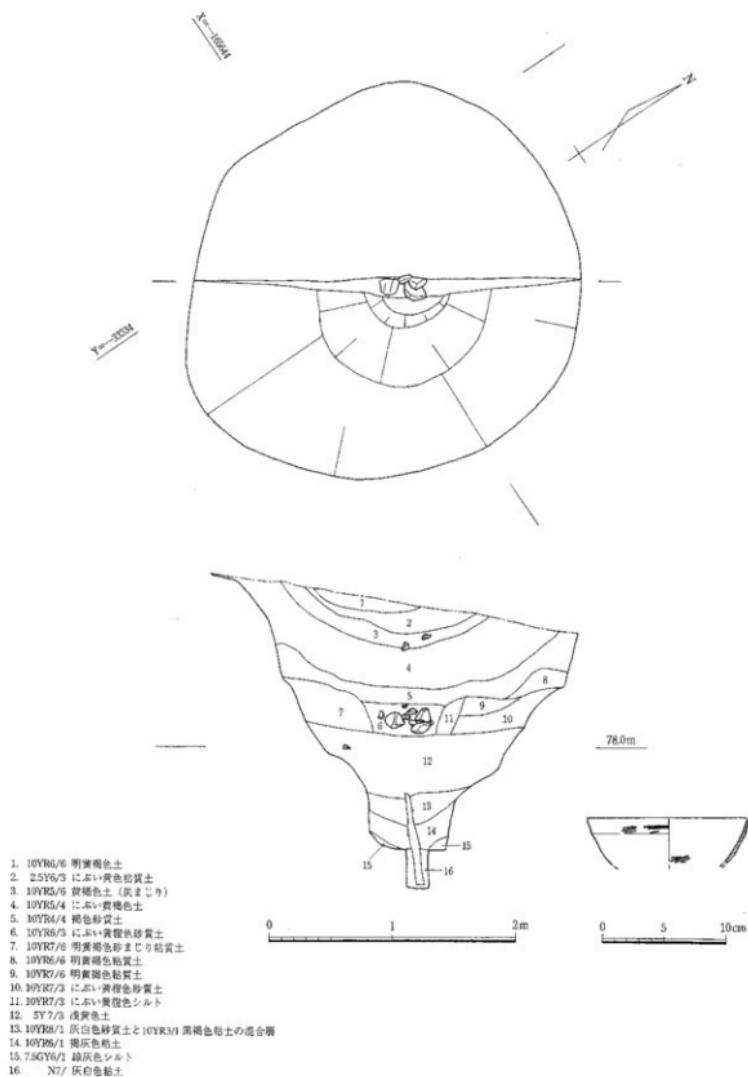
第50図 円形周溝遺構実測図 (1/60、1/10、1/6)

落とし穴 (第51図)

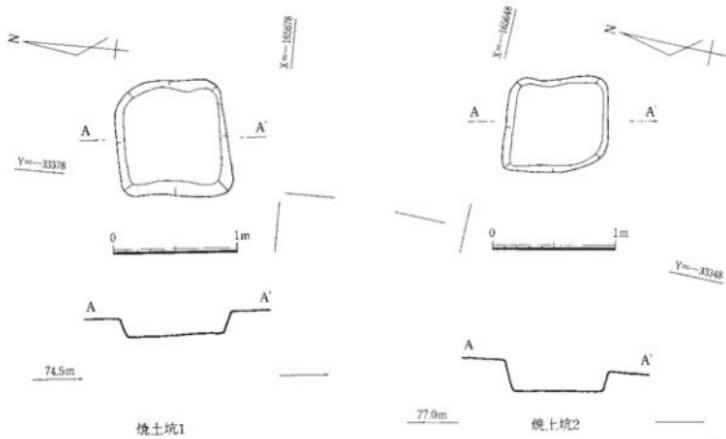
竪穴住居の北には、小尾根状の張り出しがある、この張り出し上に落とし穴が掘られている。現地説明会段階では、立地に疑問を残しつつも形態から井戸としていた。この報告をもって落とし穴に訂正したい。落とし穴は上面で直径3.2mを測る。上部は深さ1.8mのすり鉢状になっており、その下は深さ70cmの筒状になっている。底には、直径20cm、深さ30cmの穴を穿ち、杭を埋めている。杭は長さ1.1m、根本の太さは10cmを測る。先端は尖っているが、明瞭な加工痕は認められない。おそらく太い枝の先端部分を利用しているのであろう。小枝の根本が何本か残っている。鑑定していないので樹種は不明である。中層から12世紀末から13世紀初頭の瓦器碗が出土している。

焼土坑1・焼土坑2 (第52図)

谷底の中央部で焼土坑1が、落とし穴西側の斜面で焼土坑2が検出された。いずれも、壁は焼け、炭まじりの土で埋まっていた。また両者の形は隅丸方形で、1の規模は平面90×90cm、深さ20cm、2は80×80cm、深さ25cmと規模も酷似する。2つの焼土坑は同時期に同目的でつくられたものと考えられるが、一方は斜面中腹でもう一方は谷底と立地を異にする。なお、図化できなかったが焼土坑1からは奈良時代の土器片が出土している。付近には奈良時代の火葬墓があるため、火葬の際の施設とも考えられるが、規模的に無理がある。性格は不明とせざるを得ない。



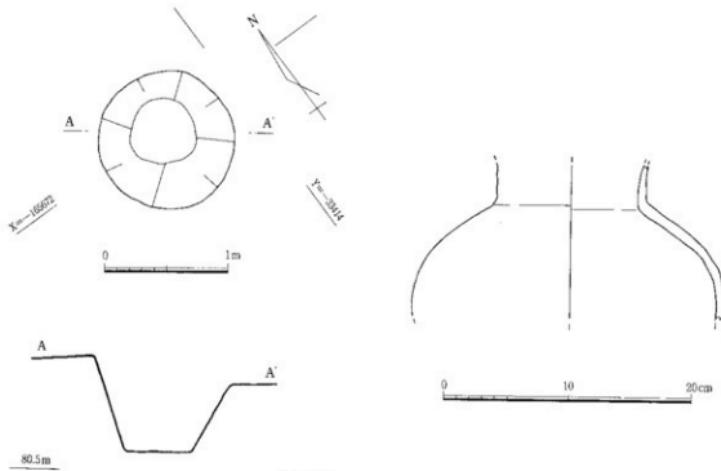
第51図 落とし穴実測図 (1/40, 1/4)



第52図 焼土坑1・焼土坑2実測図 (1/40)

土坑1（第53図）

1号土塚墓の南、稜線から南斜面を少し下ったところに土坑群がある。同規模の土坑が、ほぼ一直線に並ぶようである。土坑1からは弥生時代後期の壺の破片と考えられる土器片が出土しているが、他は細片であるが土師器が出土しており、出土遺物の時期に差異が見られる。



第53図 土坑1実測図 (1/40, 1/4)

第6項 小結

大規模な集落の存在が予想される丘陵の北西斜面で、円形の竪穴住居を検出することができた。住居が廃絶された弥生時代後期後半以降は、この住居は廃棄土坑として利用され、大量の土器が投げ込まれていた。丘陵上の平坦面に営まれた集落の一端を窺うものとなろう。

谷をはさんで北西にある丘陵上では鏡を副葬する古墳時代前期の土塚墓が2基見つかった。周辺の状況から高く土を盛った墳丘はなかったと考えられる。畿内では、鏡を副葬する土塚墓は珍しい。おそらく、東山遺跡周辺のごく狭い範囲を治めていた小首長の墓であろう。古墳時代前期には地域の首長が石川両岸の丘陵上に、前方後円墳を含む首長墓を築いていた。そのころ、この小首長は何らかの規制を受けて、墳丘をもつ古墳は築けずに土塚墓に葬られた。そして、次代には小さいながらも古墳を築くようになる。小首長のあり方を示す貴重な調査例である。

土塚墓がある丘陵上は、集落の立地条件的にはB調査区と比べても遜色がない。しかし、ここには集落は営まれていない。弥生時代後期には中腹に土器棺墓がつくられていただけである。古墳時代中・後期は不明であるが、奈良時代も墓地としての利用が認められる。墓地としての意識が、続いていると考えるのは不自然であろうか。

また、C調査区からは各時期の多彩な遺構が検出されている。東山遺跡といえば弥生時代後期の高地性集落が思い浮かぶ、これまでのイメージを塗り替えるものとなろう。

第IV章 まとめ

1986年度と94年度の2次にわたる調査では、弥生時代後期以降、近世にかけての遺構を検出すことができた。特に、弥生時代後期から古墳時代の集落、墓地の一端を窺い知ることができた点は注目に値する。先に大阪府教育委員会によって行われた調査成果と合わせて、東山遺跡周辺の弥生時代から古墳時代を概観することでまとめとしたい。

弥生時代中期には、石川西岸の河岸段丘沿いに1.5～3 kmの間隔で集落が営まれていた。これら中期の集落は、石川が大和川に合流する付近にある国府・船橋遺跡を摸点として、有機的に結ばれていたと考えられる。後期になると、これら河岸段丘上の集落は姿を消し、かわって石川東岸の丘陵上に集落が営まれるようになる。梅川と太井川に挟まれた独立丘陵上に位置する東山遺跡もその一つである。

東山遺跡では、独立丘陵の南端、標高110mのピークから派生する尾根上、標高90～105mの地点に集落が営まれ始める。大阪府教育委員会が昭和43・44年度に調査したA・B・C地区である。ここでは遺構の時期を7時期に大別されており、各竪穴住居の規模は1期から4期にかけて拡大し、4期を境に円形竪穴住居から方形竪穴住居へ移り変わる中で縮小し、東山集落の盛衰の一端を示す。また、集落の構成は、A地区1世帯、B地区3+1世帯、C地区1+1世帯で、小丘陵上に分散するA・B・Cそれぞれが全体としては一つの統一体をなしているが、各世帯は等質ではなくB地区の世帯が中核的な役割を担っていたと考えられている。

B地区と尾根づたいにつながる、大阪芸術大学構内南東端部では、94年度B調査区で弥生時代後期後半から庄内平行期にかけての方形の竪穴住居が5棟見つかっている。少なくとも2世帯以上の居住区とみることができるだろう。一方、造成計画からははずされた尾根は約5,000m²の平坦面を有し、試掘調査第14トレンチで平坦面上に一辺約8mを測る弥生時代後期の竪穴住居が、第14・15トレンチ両方で丘陵縁辺付近に溝が確認されている。また、北西斜面にあたる94年度C調査区でも、直径8m近い円形の竪穴住居が見つかっている。この円形竪穴住居は住居廃絶後も廃棄場所として利用されている。以上、あくまでも状況証拠だけであるが、試掘調査時の評価と同じく、ここに周囲に溝を巡らす大規模な居住区の存在を想定したい。そして、大阪府教育委員会が調査したA・B・C地区と同じく、全体としては94年度B調査区の世帯と一つの統一体をなすが、住居の規模から造成区域からはずされた尾根の世帯が中核的な役割を担っていたとも考えられる。弥生時代後期後半から庄内期にかけては、A・B・C地区からここに集落の中心が移ってくるのであろう。A・B・C地区の盛衰とも符合する。しかし、谷をはさんですぐ北西にある尾根上では、集落形成可能な平坦面を有するにもかかわらず住居は建てられておらず、斜面で後期の土器棺墓が2基見つかっただけだ。94年度C調査区北西部から86年度調査区にかけての部分である。尾根続きではないところには、集落は広がらないと理解するべきであろうか。尾根続きにある葉室西峯遺跡は、本格的な調査が行われていないが後期の集落とされている。また、94年度B調査区では、古墳時代の竪穴住居も1棟見つかっている。大阪府教育委員会の調査や今回の調査では、他に古墳時代の集落関係の遺構は見つかっていない。ボツンと単独で建てられたのではなく、古墳時代の集落の広がりの南端に位置するもので、その中心は葉室西峯遺跡の北にある御山遺跡と考えたい。そして立地条件的に見て、敏達陵古墳周辺にも弥生時代後期後半から古墳時代の集落が存在する可能性を指摘しておきたい。つまり、独立丘陵上に位置する東山遺跡、葉室西峯遺跡、御山遺跡は一連のもので、弥生時代後期から古墳時代にかけての集落が、一須賀古墳群の北西にある南北約2km、東西1kmの独立

丘陵上を、南から北、東山遺跡大阪府教育委員会調査地区から伽山遺跡まで、ある一定の広がりをもちつつ中心を徐々に移しながら移動していく、あるいは東山の集落が徐々に移動しながら葉室西峯の集落を集約し、伽山遺跡を形成すると理解したい。

一方の墓域であるが、94年度C調査区で尾根中腹から弥生時代後期の土器棺墓が2基見つかっただけである。この尾根上には、古墳時代の土壙墓、古墳がある。見つかったのは土器棺墓だけであり、流失した土器棺が他にもあったとしてもやや少ない感があるが墓域として捉えたい。

古墳時代前期の中頃には、小地域を基盤とした首長層の台頭により、各地でより広範な首長層の造墓活動が展開される。石川東岸でも羽曳野市駒ヶ谷から太子町北部にかけての丘陵上に前方後円墳、前方後方墳からなる首長古墳が築かれる。この首長層の造墓活動は中期初頭の古市・百舌鳥古墳群の本格的な形成と期を一にして変貌する。前方後円墳の築造を終息するもの、途絶えはしないが前方後円墳から円・方墳へ墳形を変化させる、あるいは規模を縮小するもの、一方では新たに首長墳の造営を開始するものがある。南河内では前期において前方後円（方）墳からなるいくつかの首長墓系列があったが、古市古墳群形成時に前方後円（方）墳の築造をやめる。そして、これらを築いていた地域首長は、階層的群構成をみせる古市古墳群中の中小の前方後円墳を築いたとも考えられている。

86年度調査区、94年度C調査区で同一尾根上で2基の土壙墓と3基の小方墳が見つかった。土壙墓は周辺の状況や古墳の残存状況との比較から明確な墳丘はもっていなかったようだ。しかし、2基とも鏡を副葬するため、共同体員ではなく首長層の墓と考えられる。1号土壙墓と2号土壙墓は13mの距離をおいてほぼ平行するように築かれている。やや離れて2・3号墳が軸を揃えて近接して築かれ、1号墳はやや距離をおいて軸も振るようだが、第43図を見てもわかるようにそれぞれが同一尾根上に整然と並んで築かれているのがわかる。土壙墓と古墳が密接な関係にあったことは疑いない。細かな前後関係は明らかにしえなかつたが、土壙墓は古墳時代前期末、古墳は中期前半のものである。それぞれの関係は、1号土壙墓→2号土壙墓→2・3号墳→1号墳、あるいは1号土壙墓→2・3号墳と2号土壙墓→1号墳を考えられる。後者の場合は、2系列の首長が同一尾根上に首長墓を築いたことになる。

さて、これら土壙墓と古墳の評価であるが、まず頭に浮かぶのが太井川の北の丘陵にある九流谷古墳との関係である。羽曳野市駒ヶ谷から太子町北部にかけての丘陵上には、九流谷古墳をはじめ4基の前期古墳が知られ、1ないし2の首長系列が考えられている。これら前期古墳の造営主体を伽山遺跡に求め、一つの画期である古市古墳群の形成時以降には規模を縮小して太井川の南へ墓域を移したものが東山の土壙墓や古墳とする考え方もある。しかし、九流谷古墳周辺では中期まで円筒埴輪棺による埋葬が続くと考えられることや、東山遺跡から伽山遺跡が一連のものとすれば、この集落と土壙墓・古墳を切り離して考えにくくことを合わせて、別系列の小首長が築いたものと考えたい。九流谷古墳をはじめとする4基の前期古墳は、駒ヶ谷遺跡や御嶽山遺跡など太井川の北に、東山の土壙墓や古墳は、太井川と梅川に挟まれた独立丘陵及びその周辺に勢力基盤を求めたい。物証はないが、中期後半以降の古墳が、北西の大坂芸術大学校舎建設によって削平された丘陵にあったと仮定すれば、河南町南西部の丘陵上で前期中頃に造営を開始し、中期以降も衰退することなく後期・終末期まで造営を続ける寛弘寺古墳群と同様のあり方を示すことになり興味深いものがある。前期には墳丘をもった古墳は築けなかつたが、次代には小さながらも墳丘をもち埴輪を並べる古墳を築くようになる。そこに前期には太井川の北に基盤をもつ首長の影響下にあり土壙墓しか築けなかつたが、同じく大和政権下にありながらも太井川北の首長がより中央に近く組み込まれたときに、初めて墳丘をもった古墳を築けるようになる在地的性格の

強い小首長の姿を読み取りたい。以上の評価には異論もあるが、いずれにせよ小首長のあり方を示す一例であり、在地小首長を考える上で貴重な資料であることには変わりがないだろう。

最後になったが、今回の調査で見つかった竪穴住居の一覧を掲げておく。

第1表 竪穴住居一覧

調査区	住居	立 地	形状	床面積(m ²)	主柱穴	標高(m)	備 考
B	1a	丘陵上平坦面	方形	(20.2)	4	83.4	床面中央に炉、炉から排水溝
	1b	ク	ク	22.1	4	83.4	床面中央に炉、貯蔵穴、壁溝から排水溝
	2	丘陵上緩斜面	ク	39.7	4	85.4	床面中央に炉、貯蔵穴、ベッド状造構
	3a	ク	ク	(21.6)	4	87.3	
	3b	ク	ク	(24.5)	4	87.3	貯蔵穴
	4	ク	ク	11.2		88.1	柱穴検出できず
	5	ク	ク	9.9	4	88.9	
	6	丘陵斜面	ク	(15.4)	4	86.2	
C		丘陵斜面	円形	47.8	7	81.9	床面中央に炉、住居内を区画する溝

カッコ内は推定床面積

参考文献 蒼原正明 「東山弥生時代集落の生成」「東山遺跡」 大阪府教育委員会 1979年

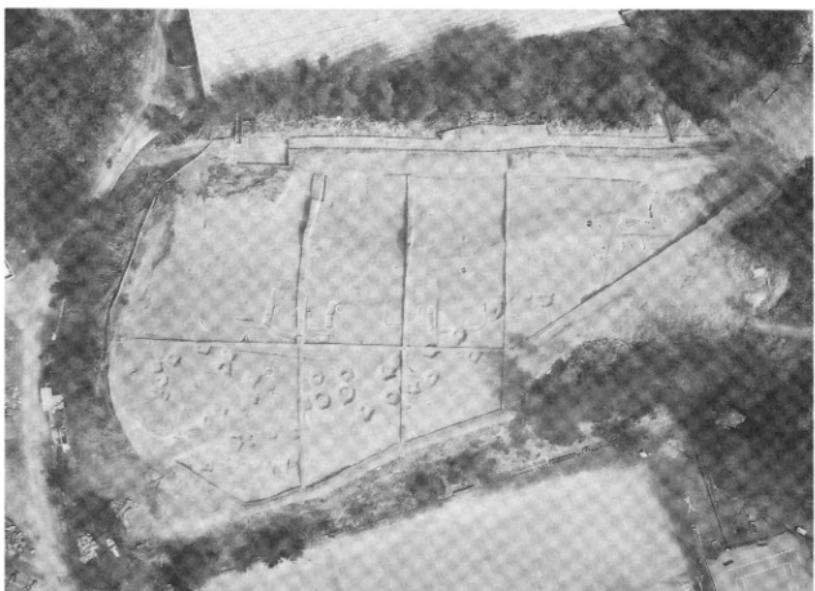
天野末喜 「地域の古墳・近畿中部・大阪」「古墳時代の研究』10 雄山閣出版 1990年

広瀬和雄 「地域の概要・近畿地方の概観」「前方後円墳集成」近畿編 山川出版 1992年

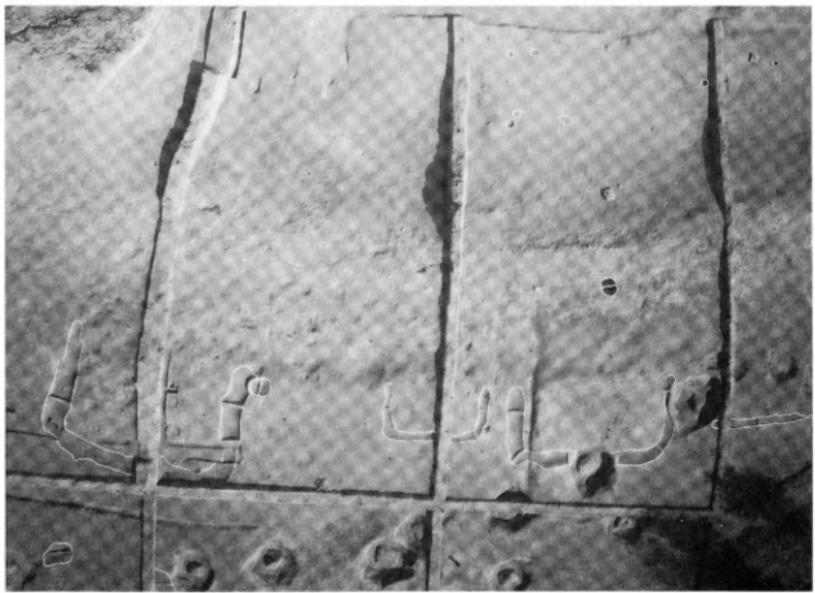
報告書抄録

ふりがな	ひがしやまいせきはくつちょうさほうこくしょ						
書名	東山遺跡発掘調査報告書						
副書名	大阪芸術大学グラウンド等造成に伴う						
卷次							
シリーズ名	河南町文化財調査報告						
シリーズ番号	第2回						
編著者名	赤井毅彦						
編集機関	河南町教育委員会						
所在地	〒585-8585 大阪府南河内郡河南町大字白木1359番地の6 ☎ 0721-93-2500						
発行年月日	1998年9月7日						
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村 遺跡番号	° ° °	° ° °			
東山遺跡 86年度調査区	おおさかみなかみかわちくじかなみちよ 大阪府南河内郡河南町 大字東山	27382	34° 30' 24"	135° 38' 08"	1986.11 1987.4	5,800	学校用地造成
94年度A調査区			34° 30' 25"	135° 38' 12"	1994.12 1995.2	1,800	
94年度B調査区			34° 30' 22"	135° 38' 18"	1994.12 1995.4	2,500	
94年度C調査区			34° 30' 21"	135° 38' 10"	1995.3 1995.7	6,800	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
東山遺跡 86年度調査区	古墳 火葬墓	古墳時代 奈良時代	古墳 火葬墓	埴輪 須恵器・土師器			
94年度A調査区	火葬墓	奈良時代 近世	火葬墓 石組溝	須恵器 瓦			
94年度B調査区	集落遺跡	弥生時代 古墳時代	竪穴住居(5棟) 竪穴住居(1棟)	弥生土器・石鎌 土師器			
94年度C調査区	集落・土器棺 墓・土壙墓	弥生時代～中世	竪穴住居・土 器棺墓・土壙 墓	弥生土器・鐵鎌・鏡 ・鐵劍・鐵斧・鎗・須恵 器・土師器	鏡を副葬する古墳時代 の土壙墓(2基)		

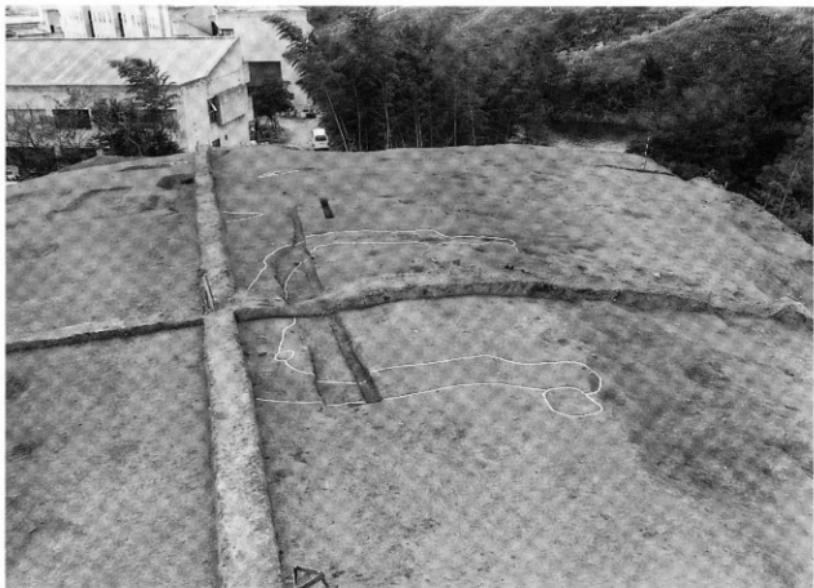
図 版



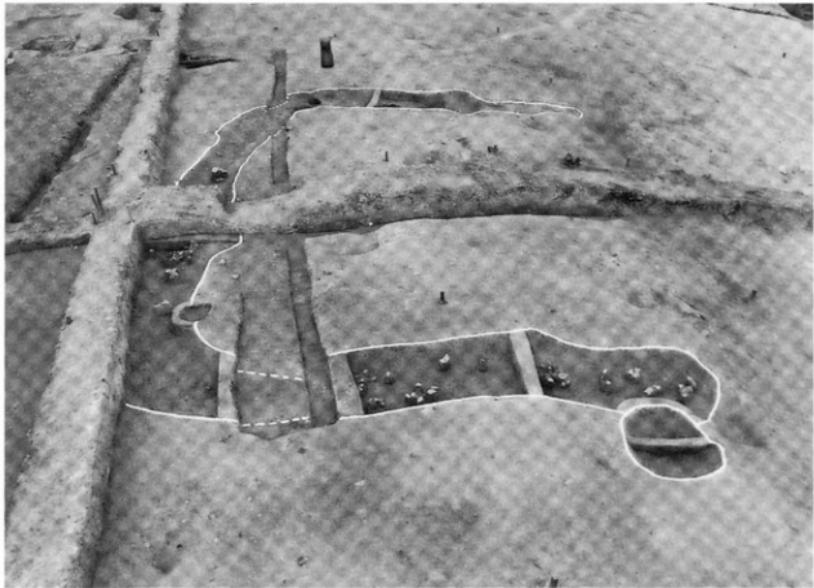
調査区全景



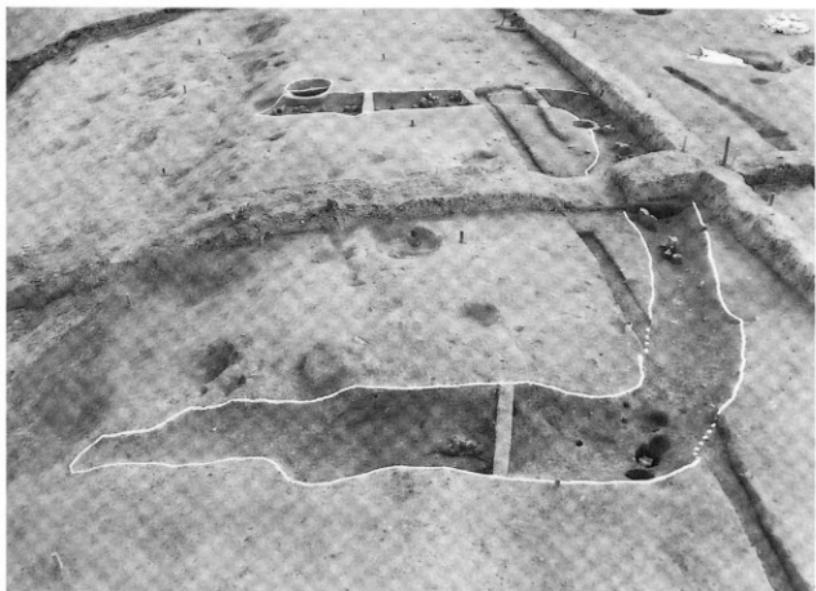
1-3号填金



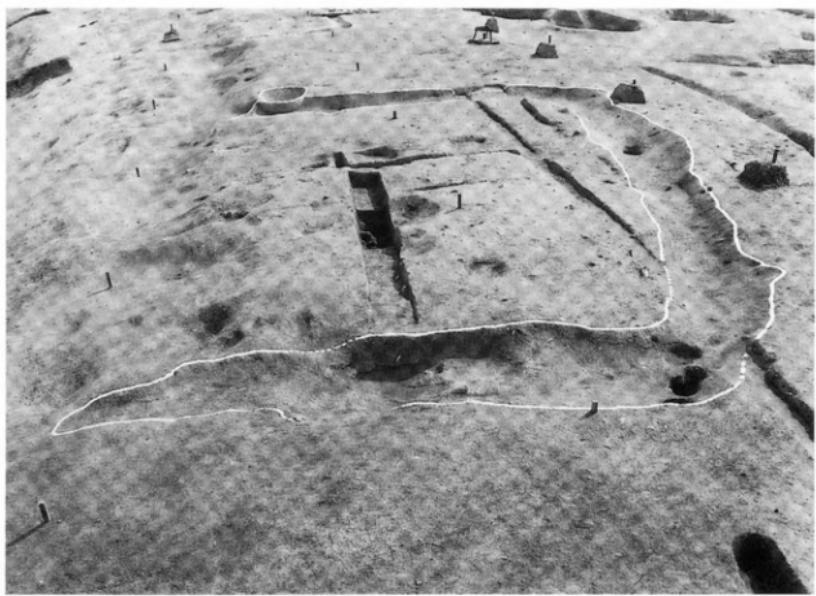
1号墳検出状況（南から）



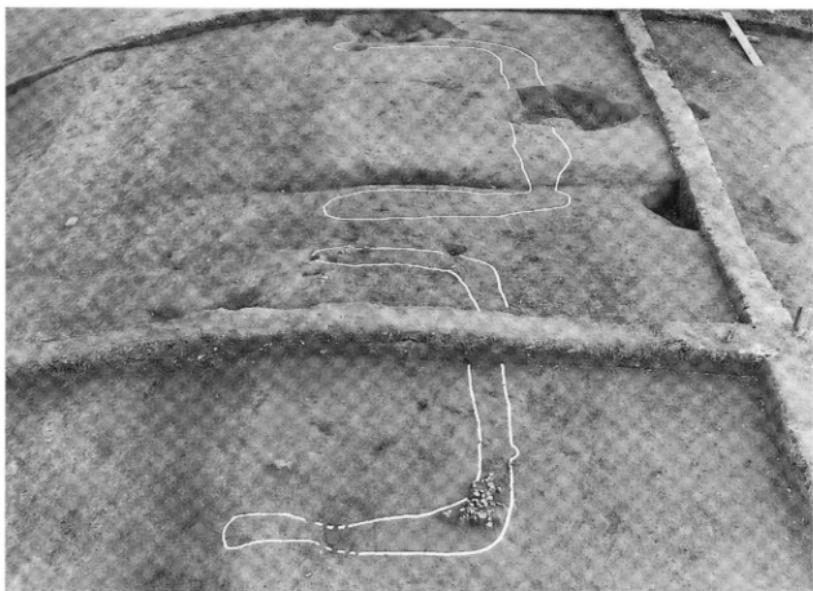
1号墳全景（南から）



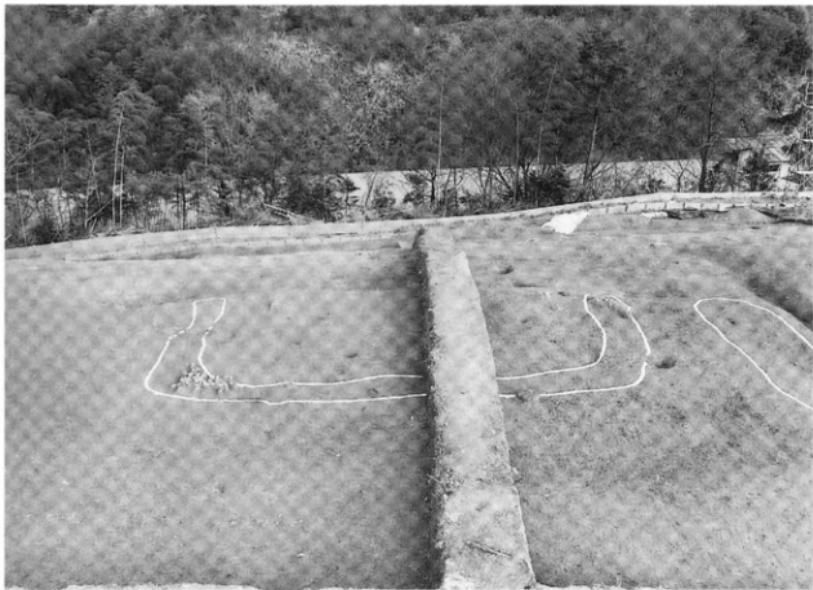
1号墳全景（北から）



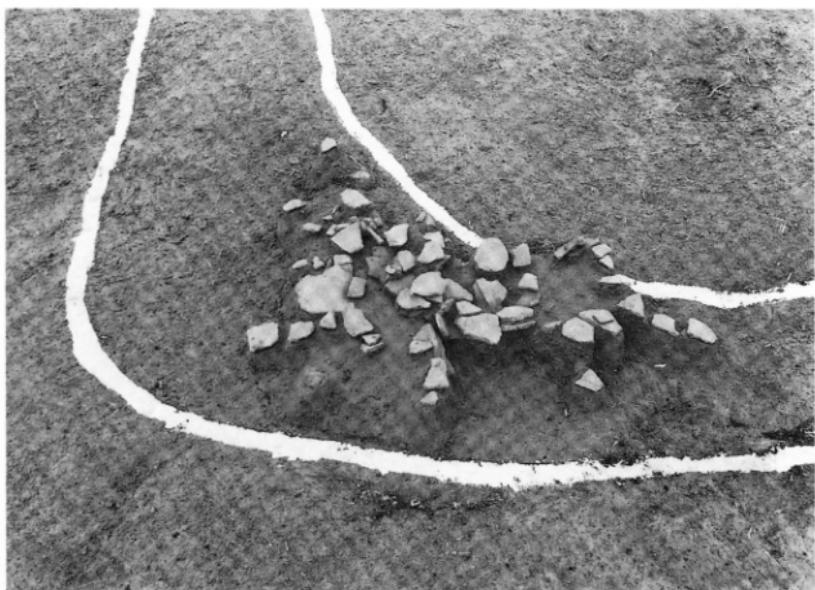
1号墳完掘状況（北から）



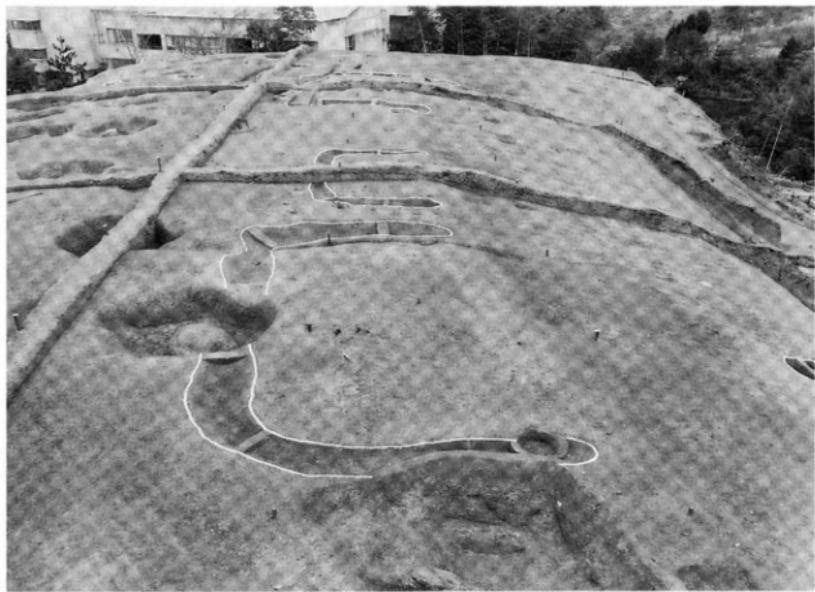
2・3号埴検出状況（北西から）



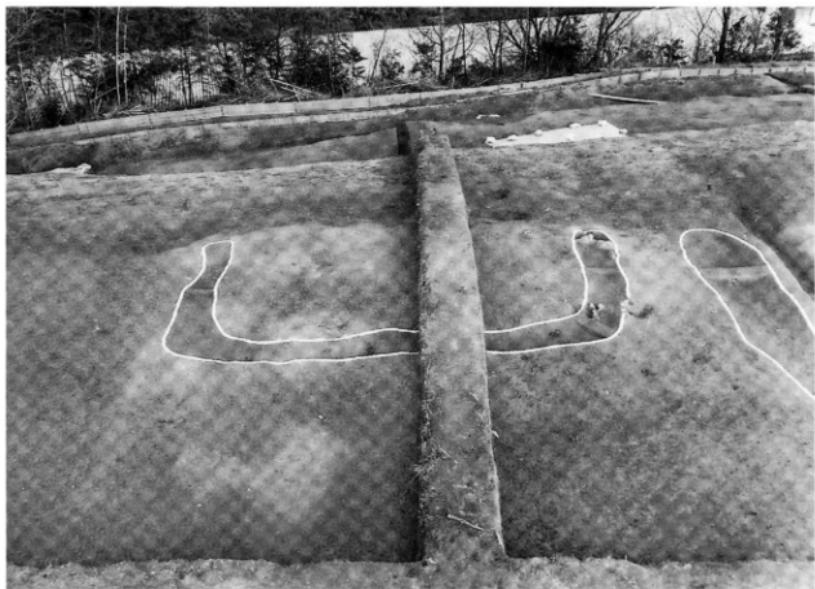
2号埴検出状況（南西から）



2号埴埴輪出土状況（南西から）



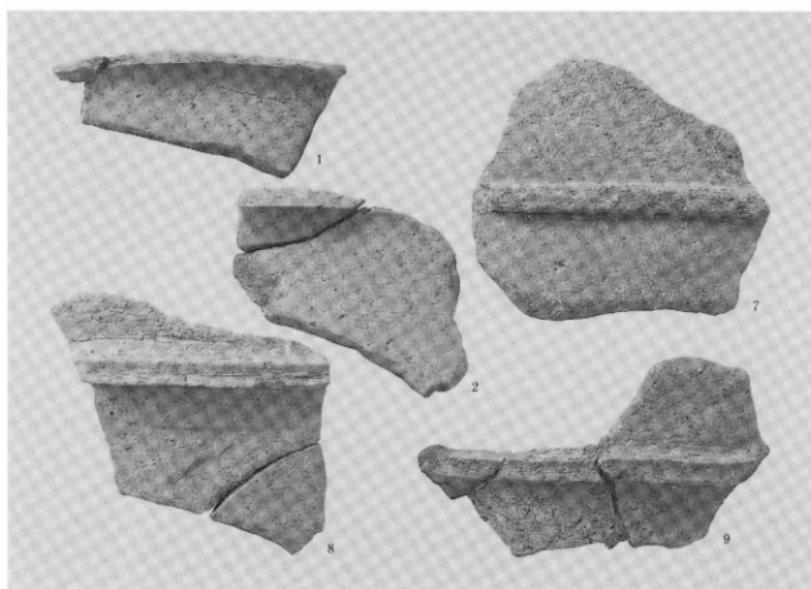
2・3号埴全景（南東から）



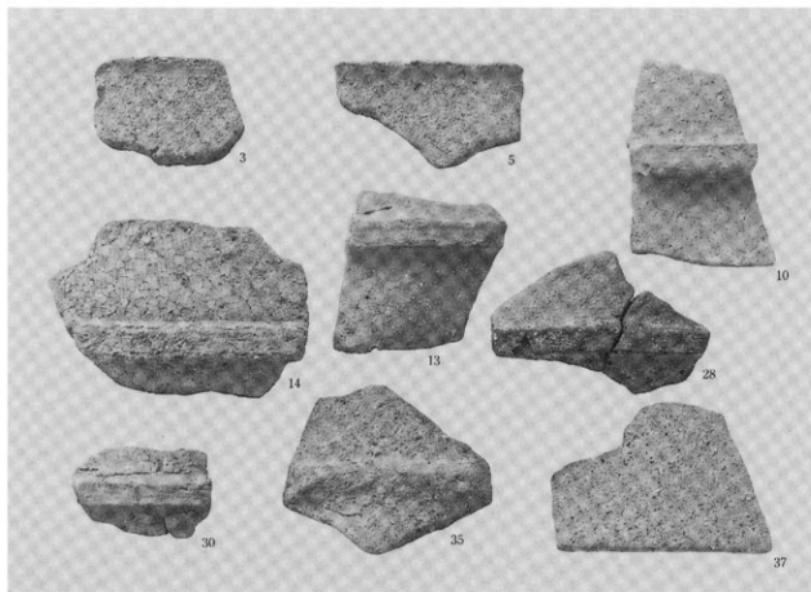
2号墳全景（南西から）



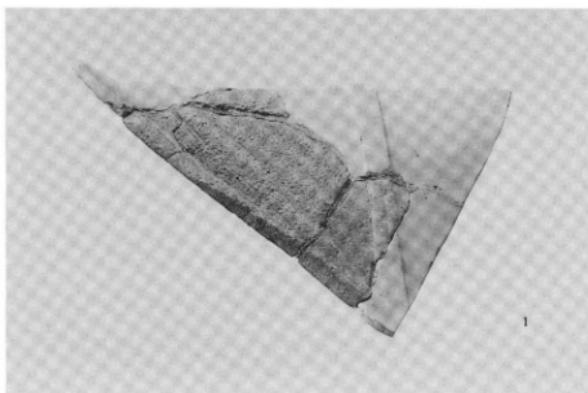
3号墳全景（南西から）



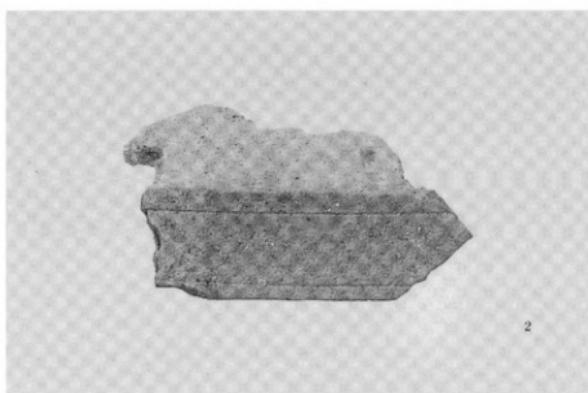
1号出土上円筒埴輪



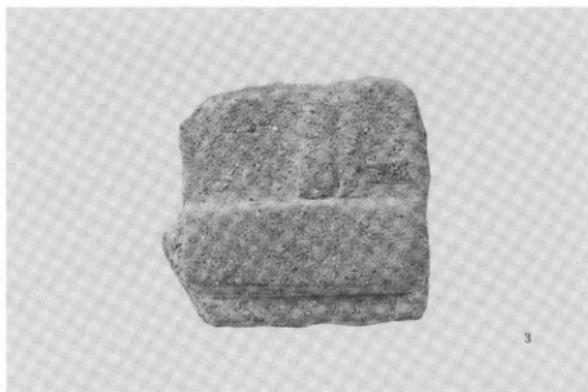
1号出土土円筒埴輪



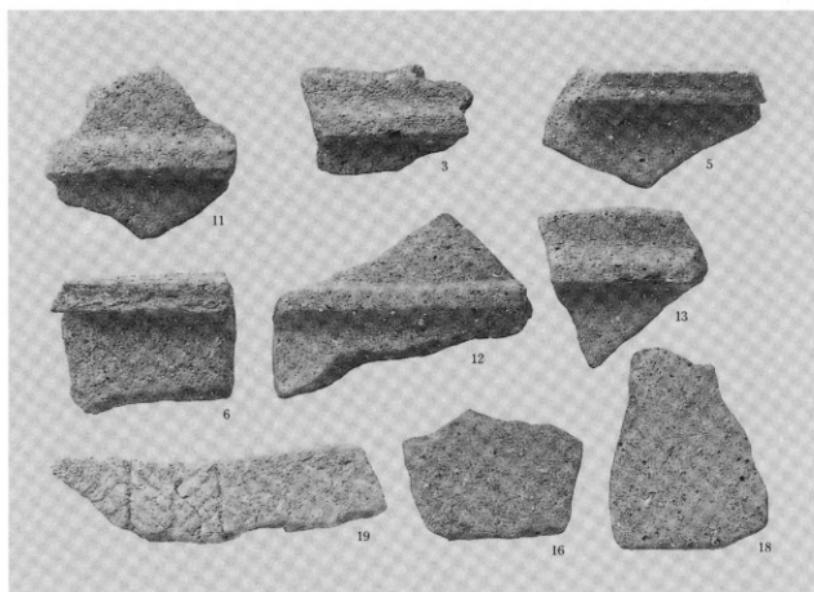
1号墳出土形象埴輪



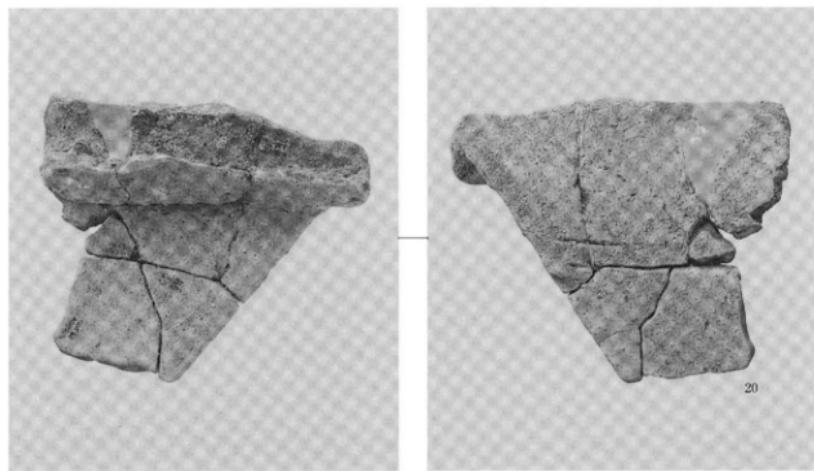
1号墳出土形象埴輪



1号墳出土形象埴輪



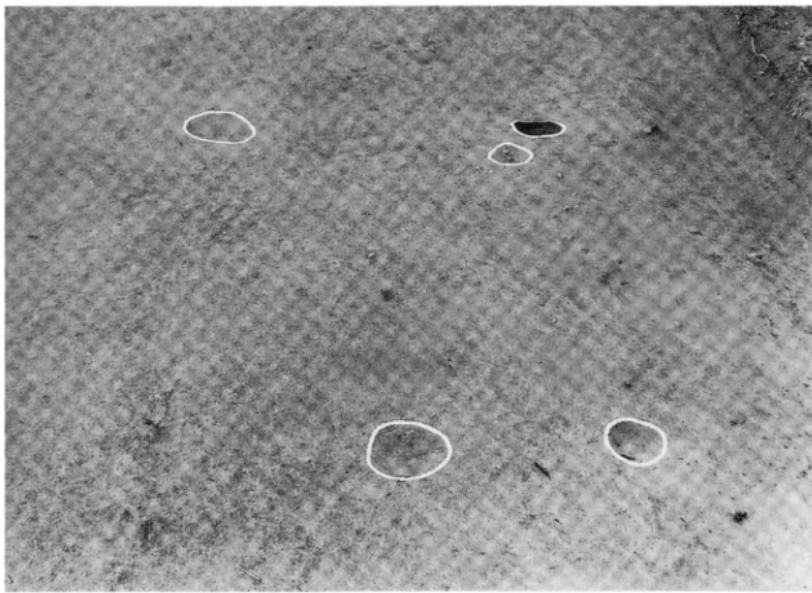
2号填出土埴輪



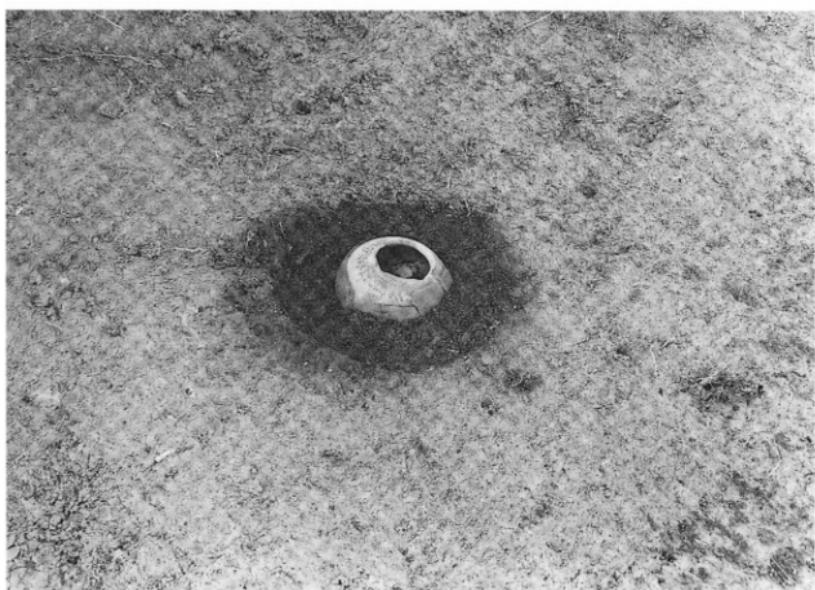
2号填出土埴輪



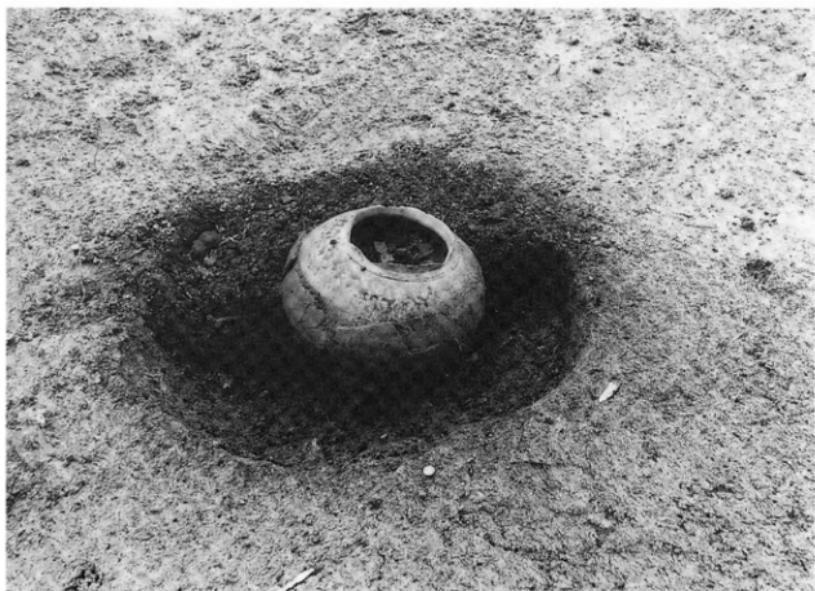
火葬墓周辺（北東から）



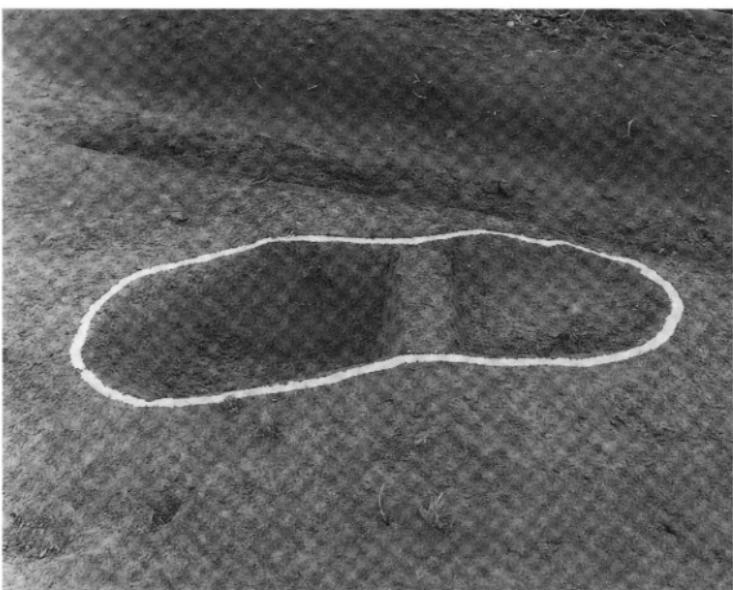
火葬墓周辺（東から）



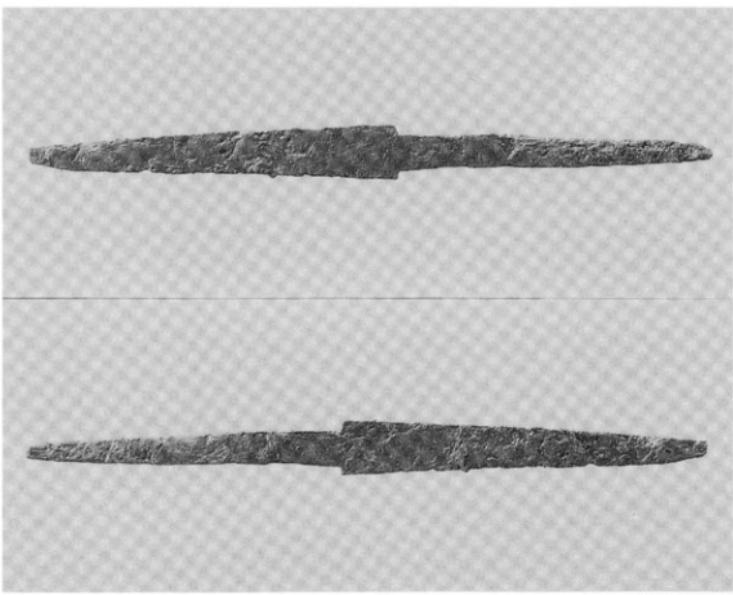
火葬墓検出状況（北東から）



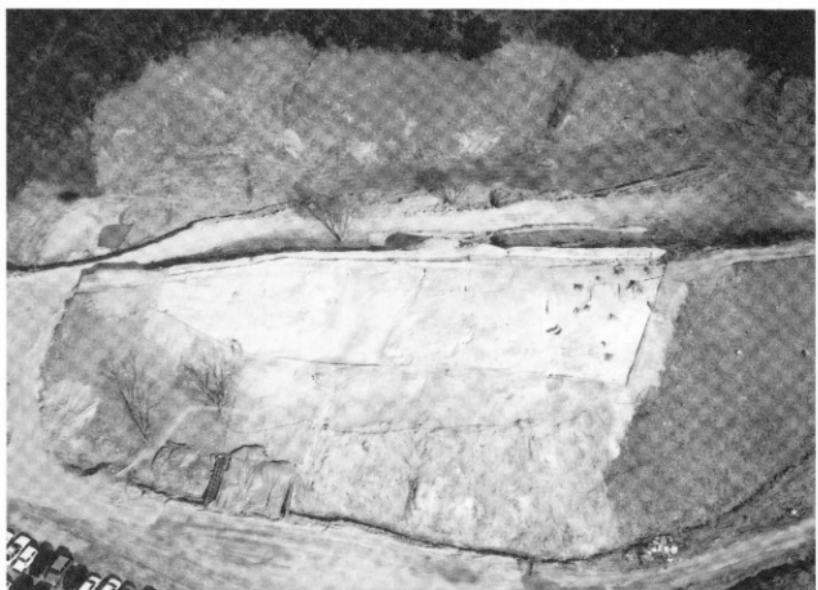
火葬墓全景（北東から）



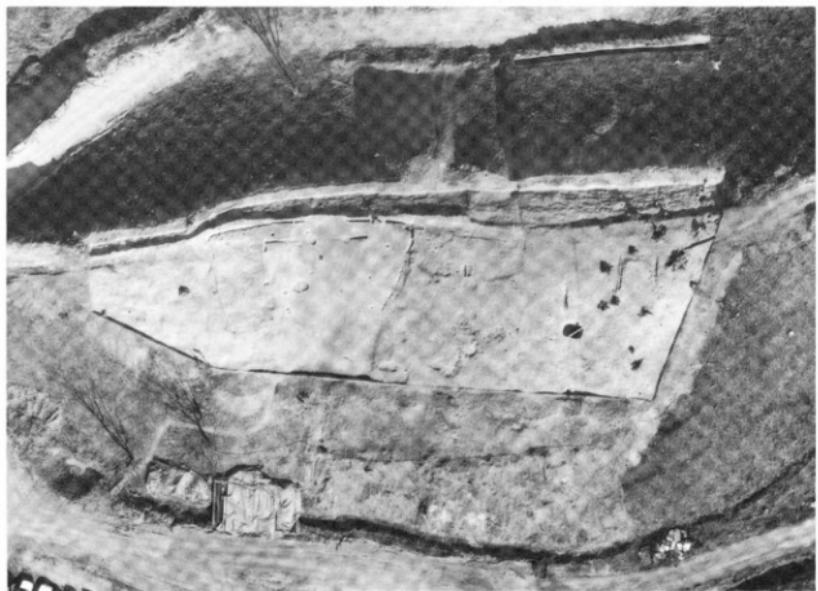
土坑2全景（南西から）



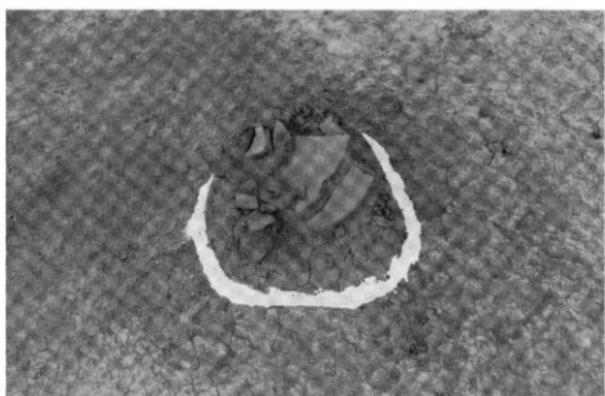
土坑2出土刀子



調査区全景（南西から）



調査区全景

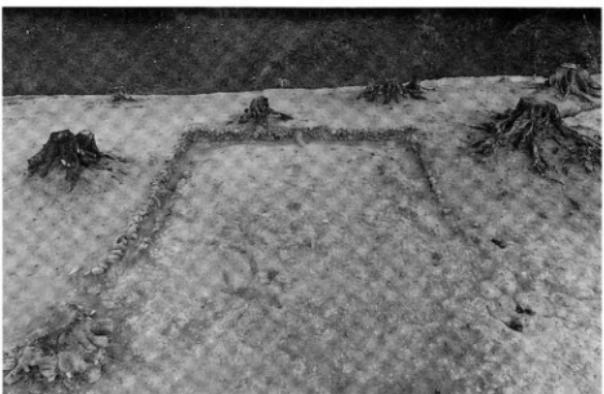


火葬墓検出状況（南から）



火葬墓蔵骨器蓋

火葬墓蔵骨器



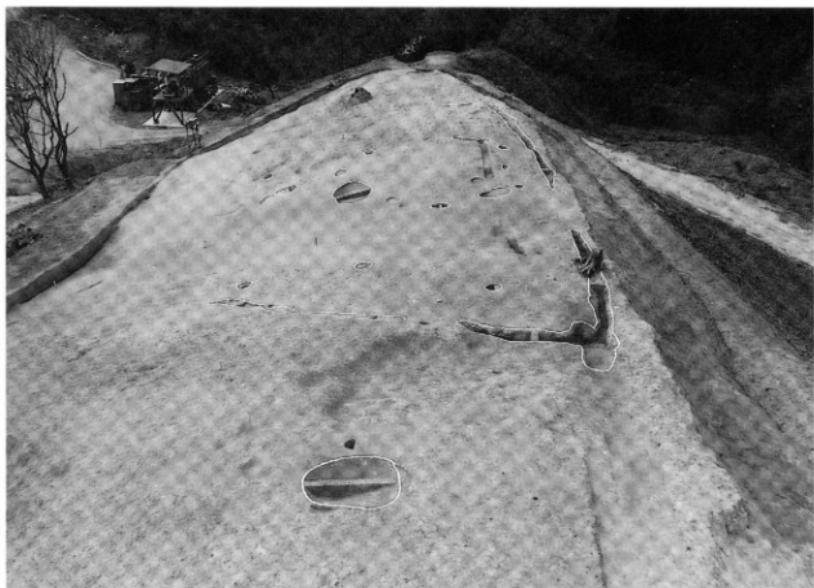
石組溝全景（南西から）



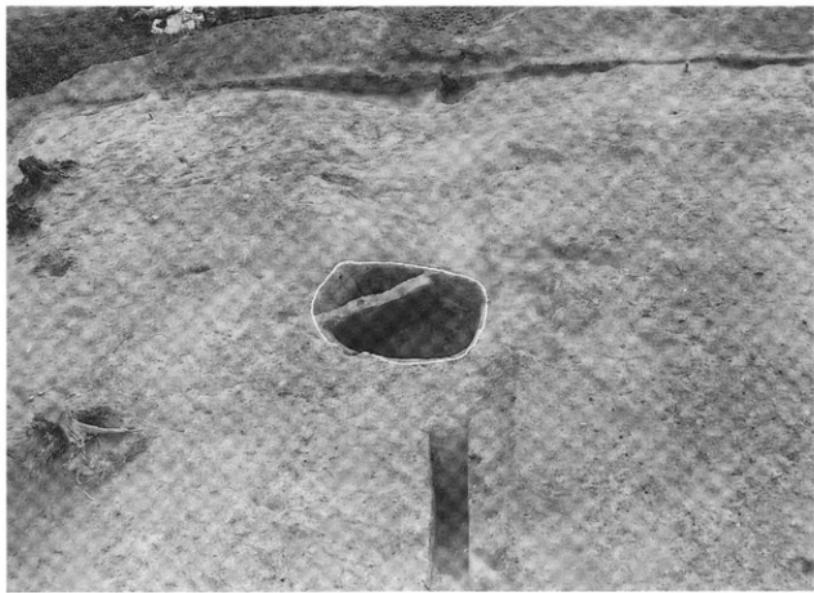
石組溝細部（南西から）



石組溝細部（南から）



北西部全景（南東から）



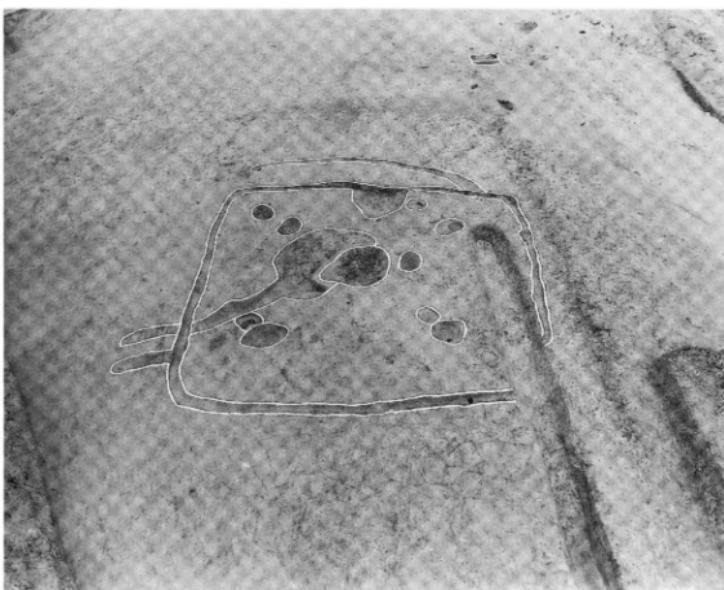
土坑1全景（北東から）



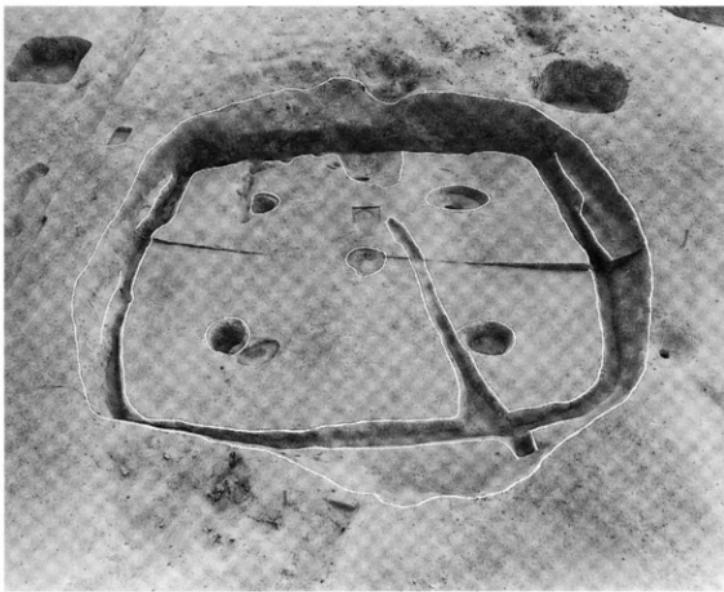
調査区全景（西から）



調査区全景



縦穴住居1全景（北西から）



縦穴住居2全景（北西から）

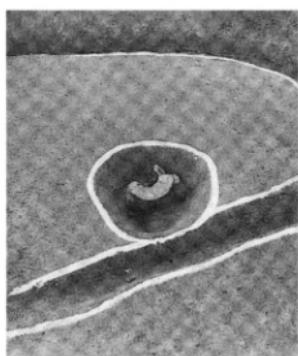
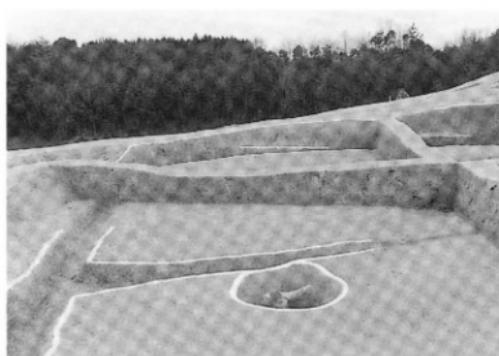
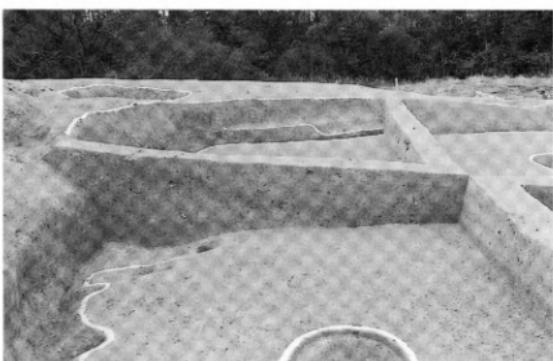
上右 穹穴住居2アゼ断面（北東から）

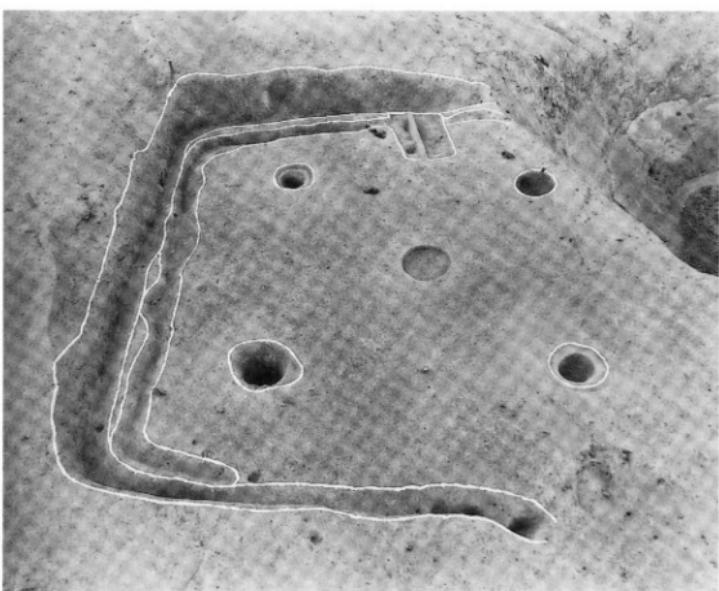
中左 穹穴住居2アゼ断面（南西から）

中右 穹穴住居2ピット
遺物出土状況（北から）

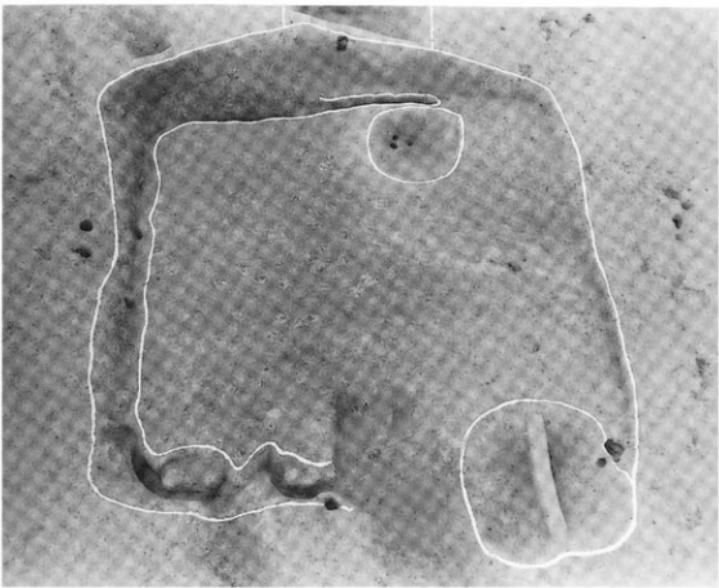
下左 穹穴住居2出土遺物

下右 穹穴住居5出土遺物

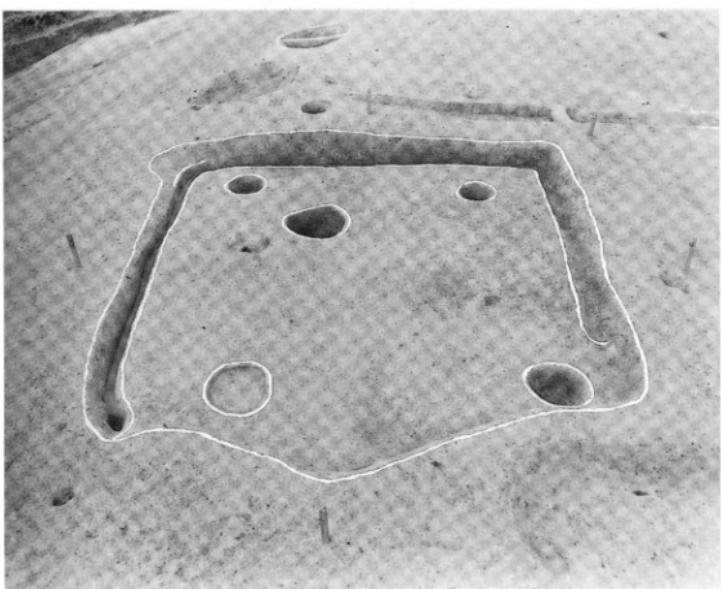




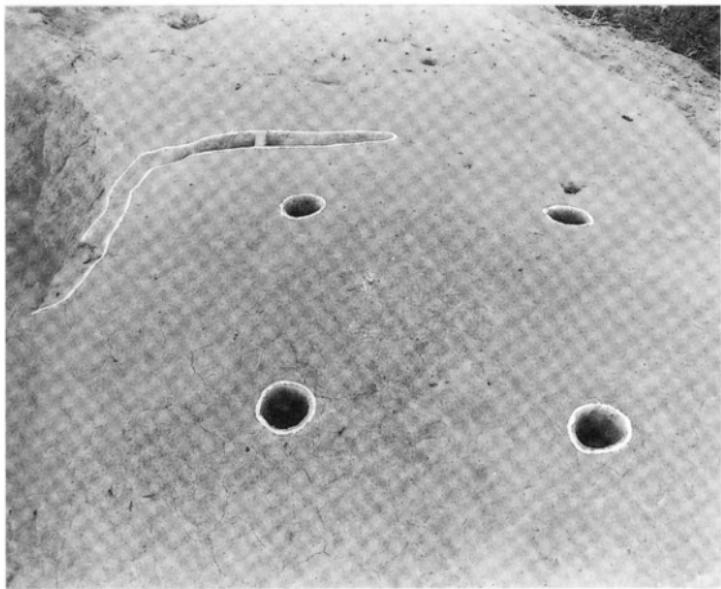
縦穴住居3全景（北西から）



縦穴住居4全景（北西から）



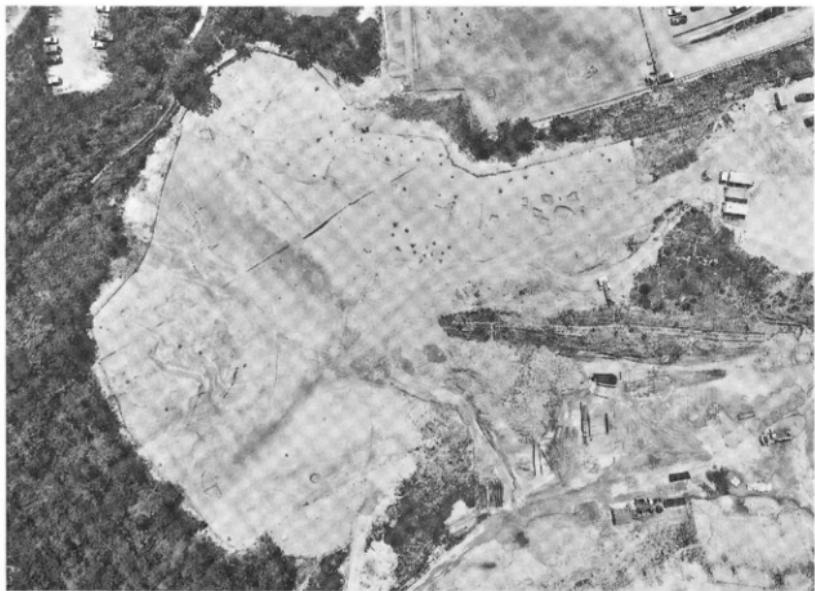
竪穴住居5全景（北西から）



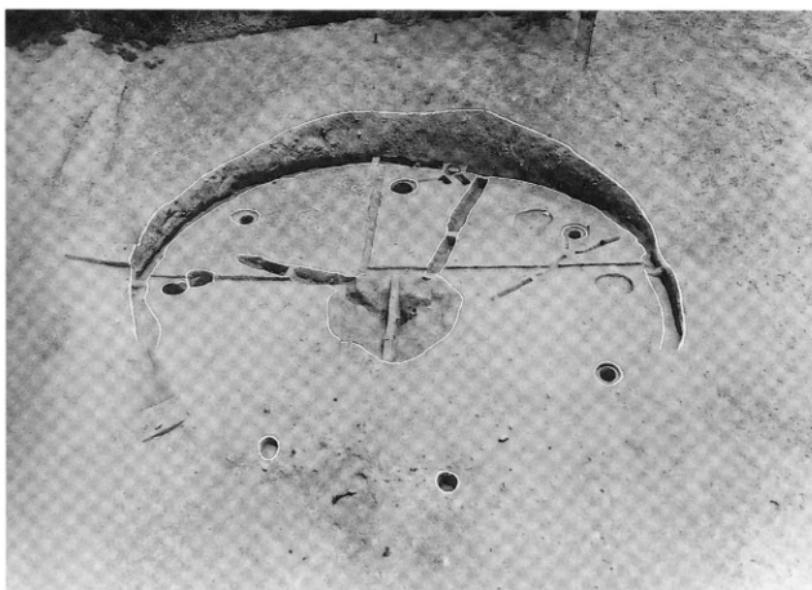
竪穴住居6全景（北西から）



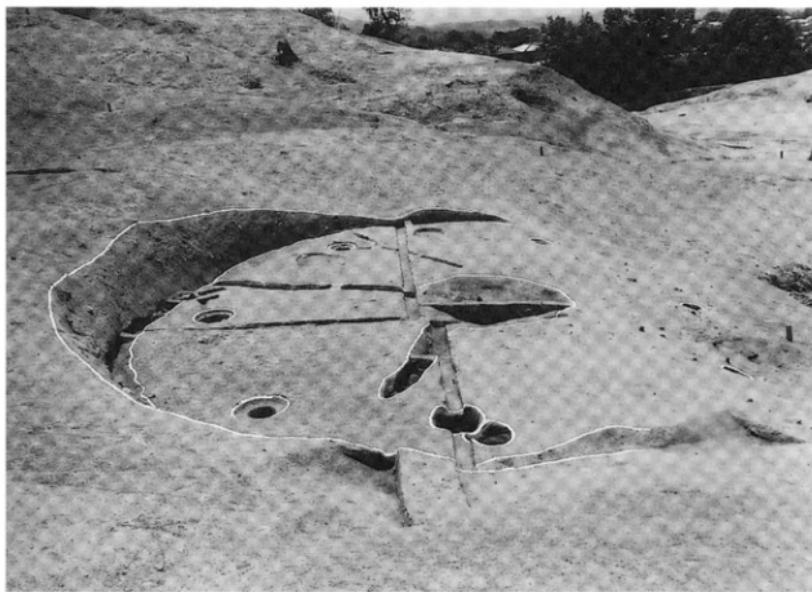
調査区全景（北東から）



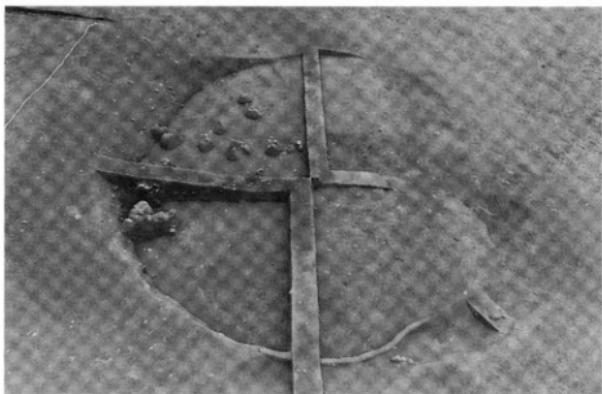
調査区全景



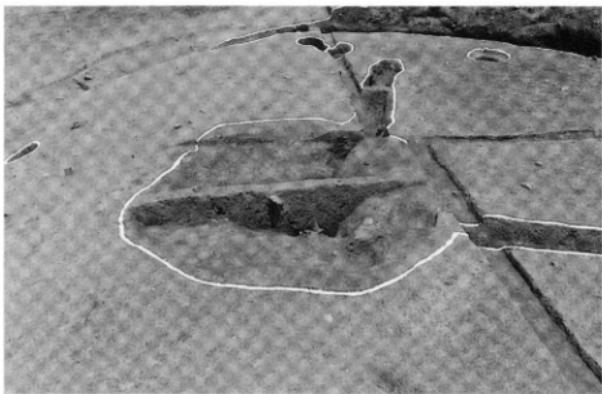
竪穴住居全景（北西から）



竪穴住居全景（北東から）



竪穴住居 中層遺物
出土状況（北東から）



竪穴住居 炉跡（南西から）



竪穴住居 床面遺物
出土状況



4



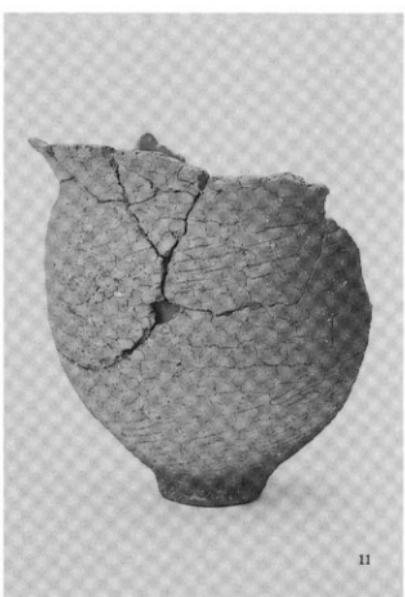
7

竪穴住居出土遺物

上左 床面、下左 炉
上右・下右 アゼ下層



6



11

竖穴住居出土遺物



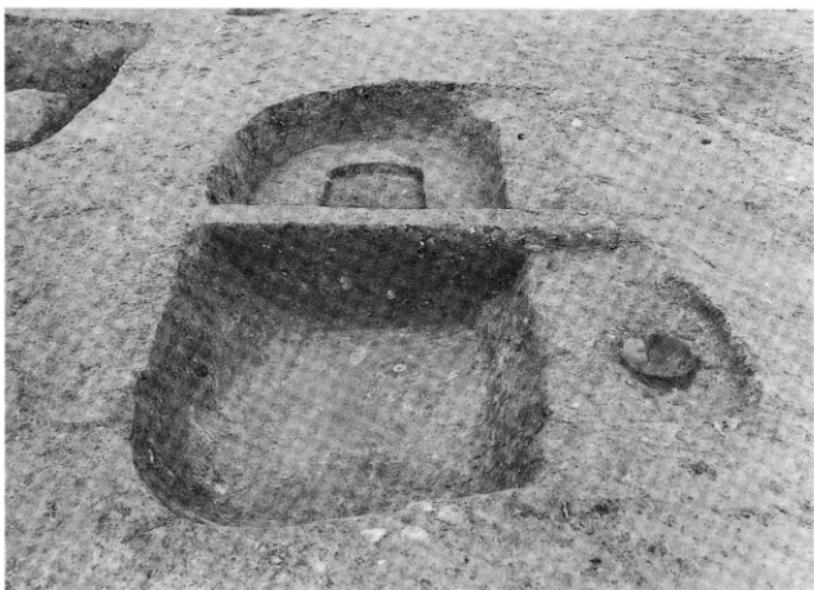
下層



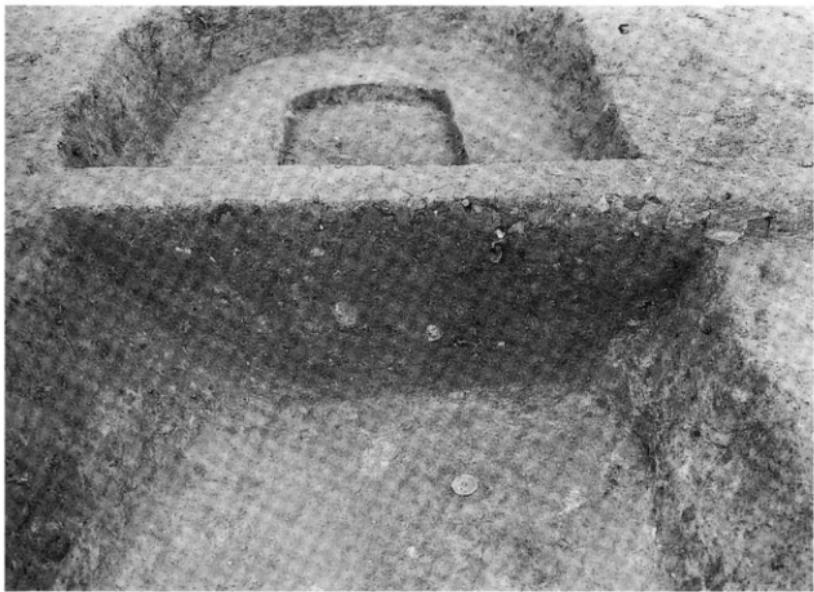
中層



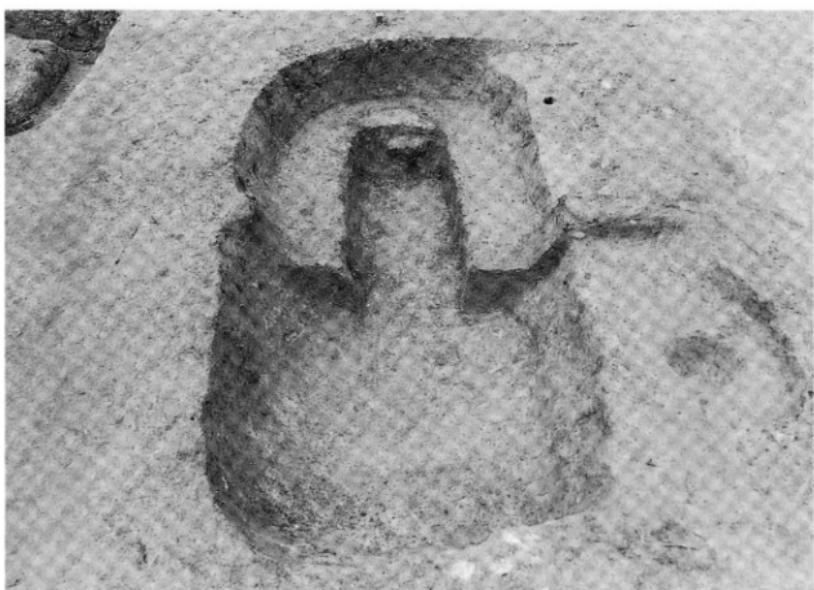
中層



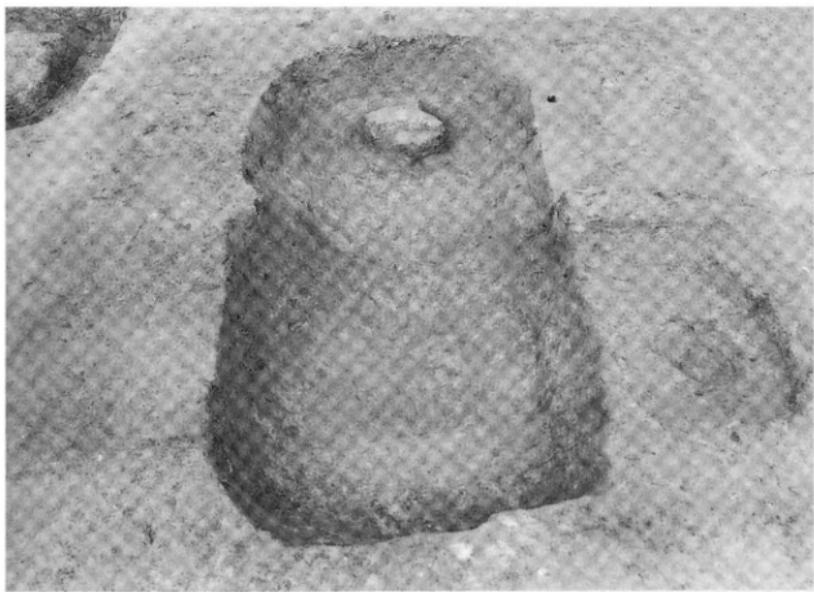
1号土塙墓全景（南西から）



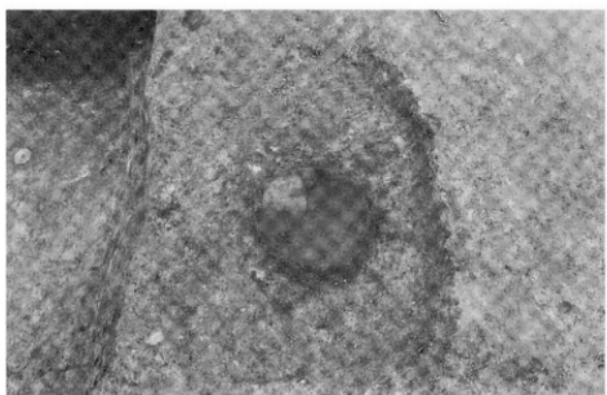
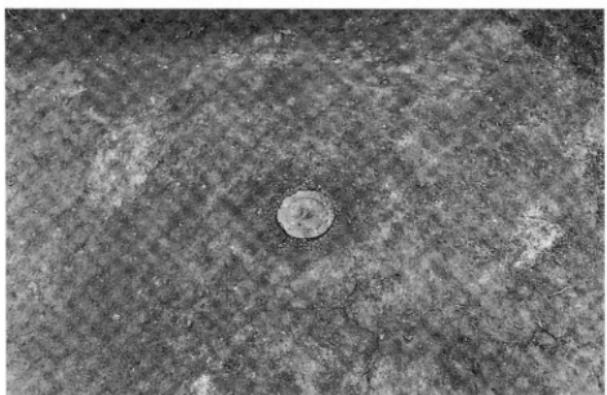
1号土塙墓アセ断面（南西から）

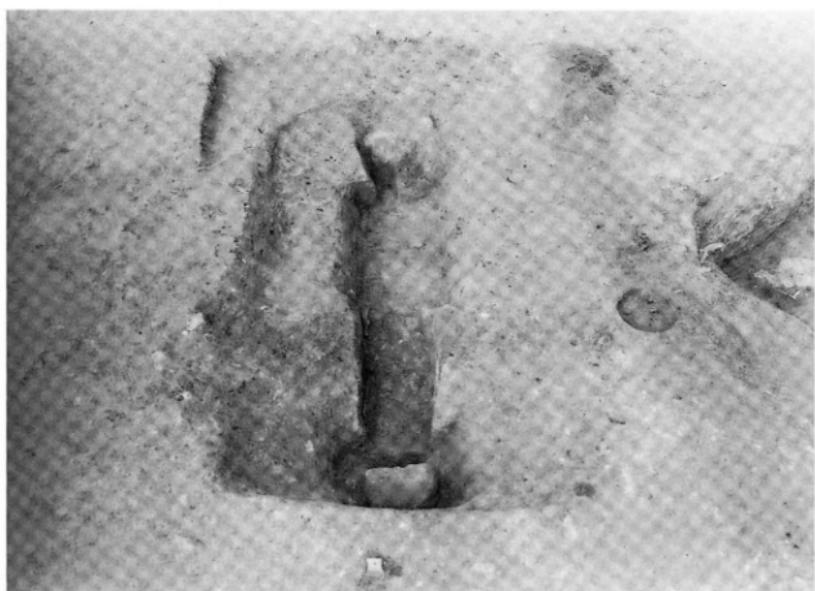


1号上塙墓半掘状況（南西から）

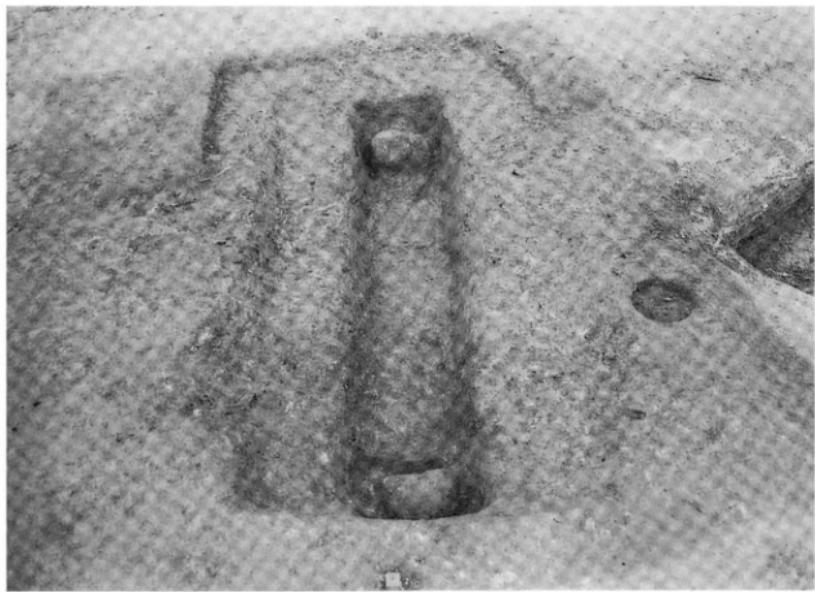


1号上塙墓完掘状況（南西から）

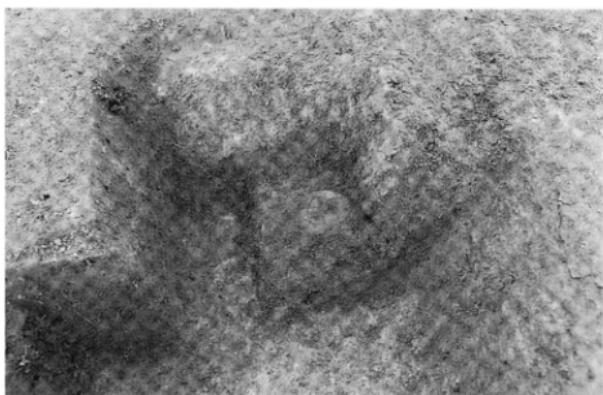




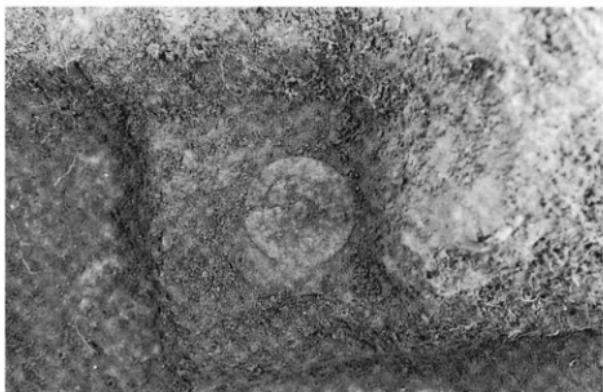
2号土塙墓全景（南西から）



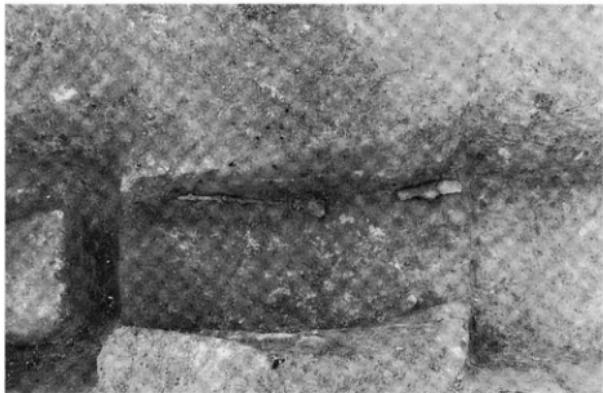
2号土塙墓発掘状況（南西から）



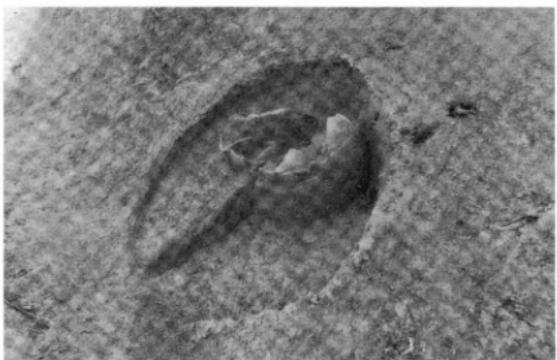
2号土塚墓 鏡出土状況
(南西から)



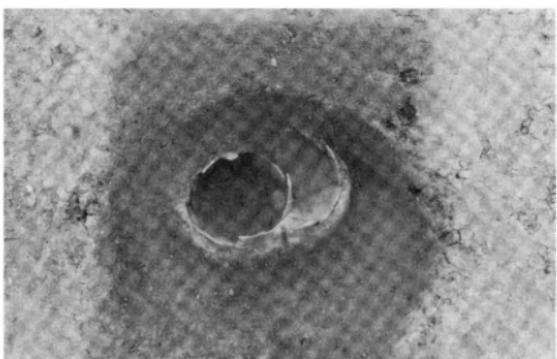
2号土塚墓 鏡出土状況



2号土塚墓 鉄製品出土状況
(南東から)



上器棺蓋2 検出状況（束から）



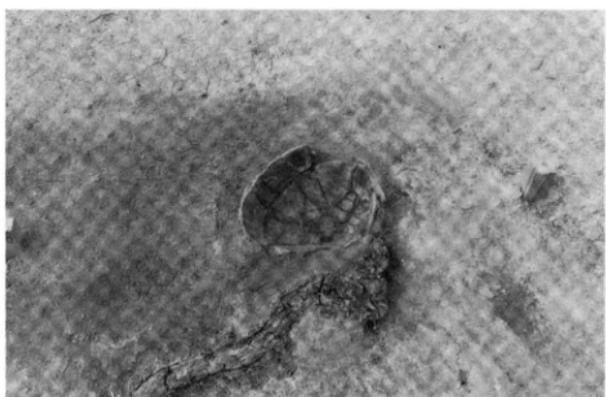
上器棺蓋2 完掘状況（南東から）



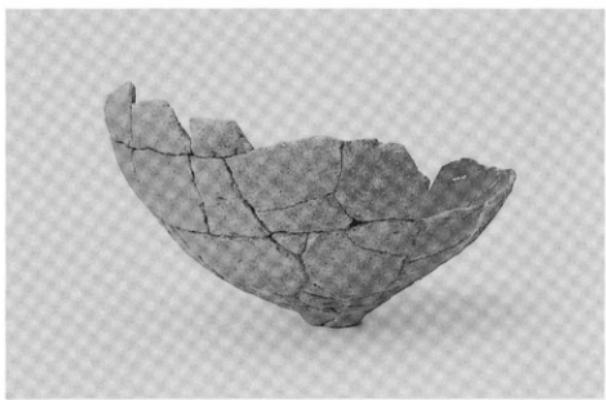
上器棺蓋2 使用土器（身）



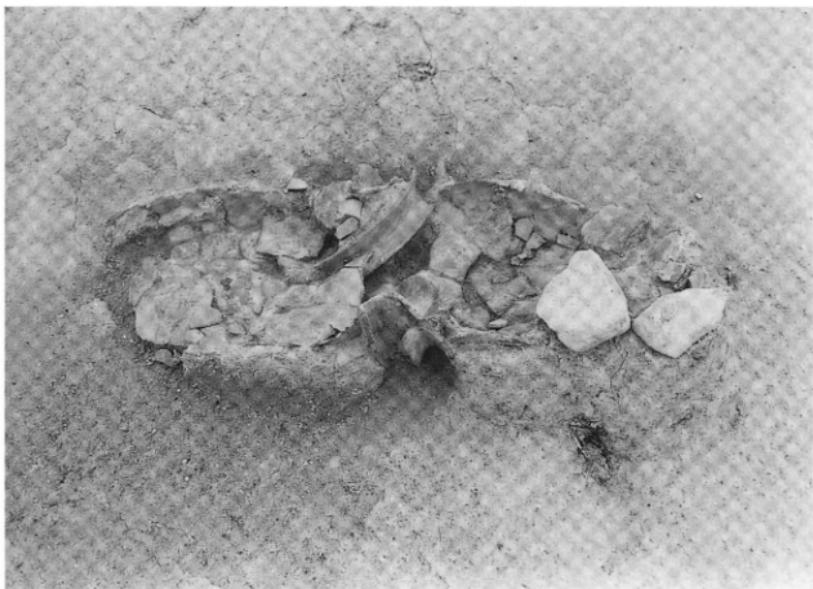
土器棺墓3 検出状況（南から）



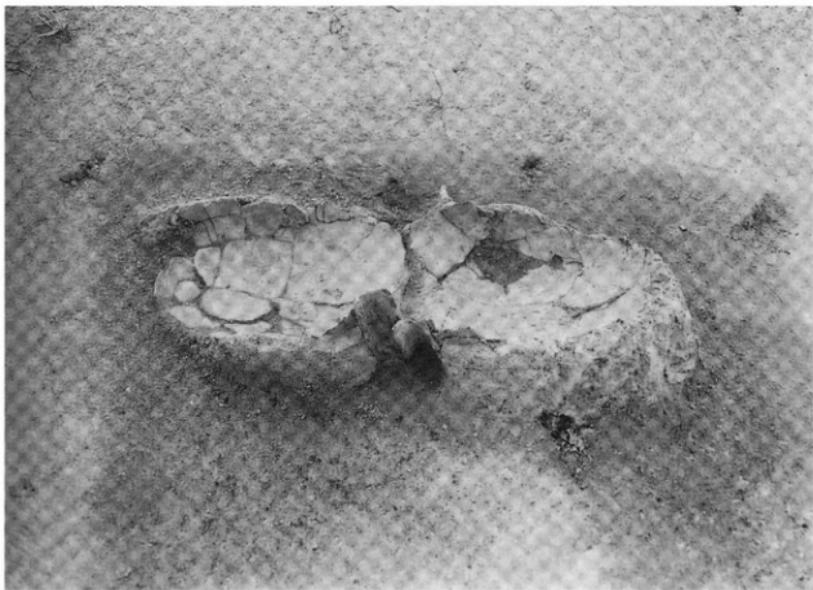
土器棺墓3 完掘状況（南から）



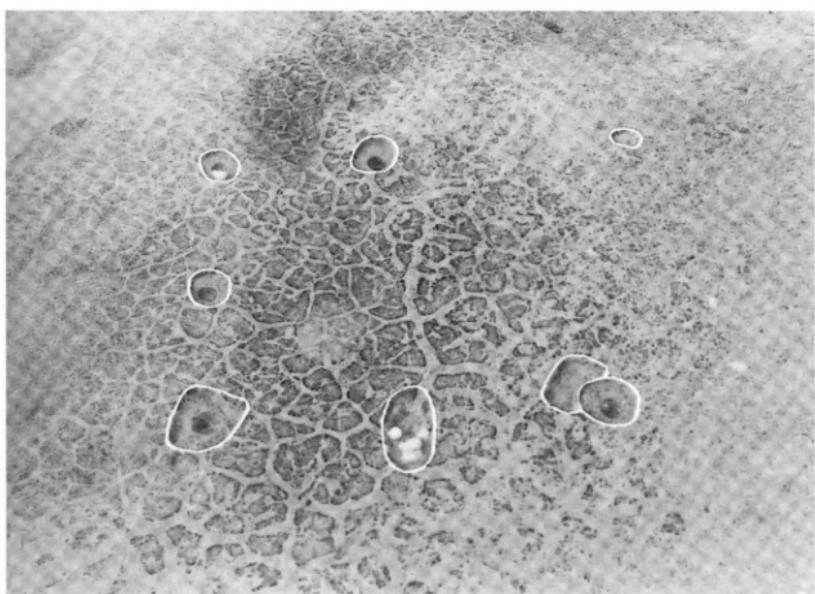
土器棺墓3 使用土器



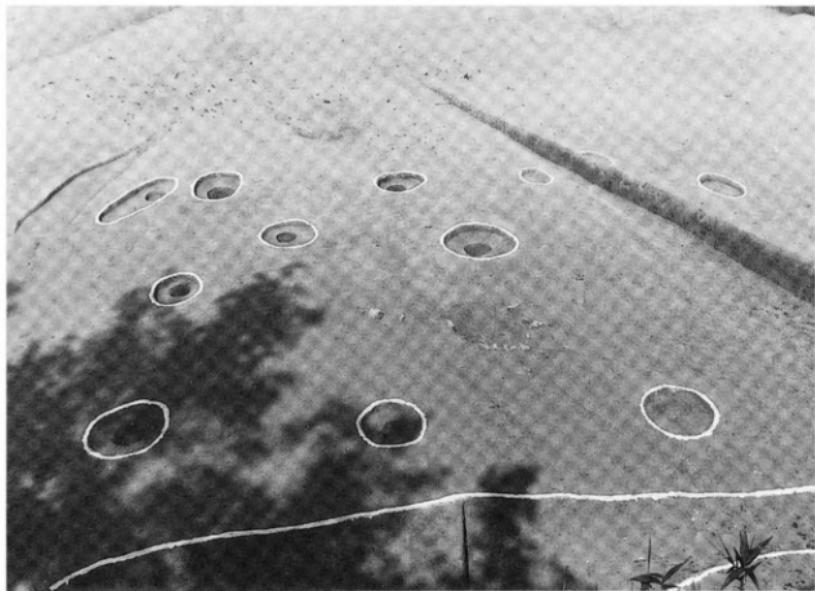
土器棺墓1検出状況（南東から）



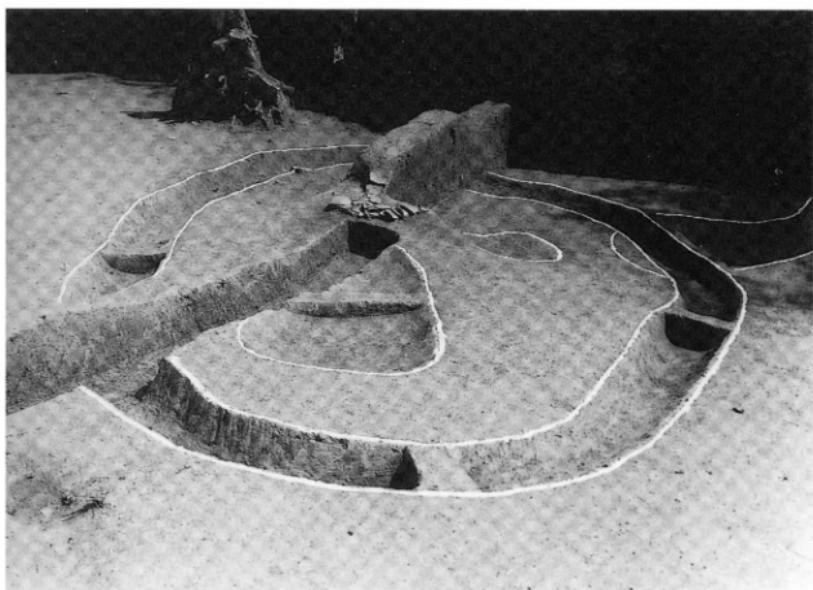
土器棺墓1完掘状況（南東から）



建物1全景（南から）



建物2全景（南西から）

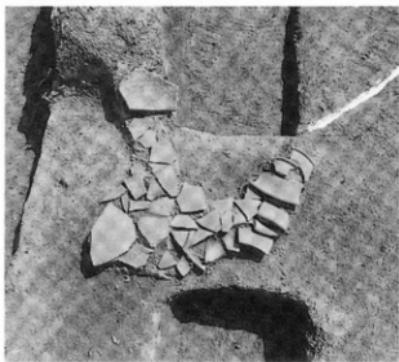


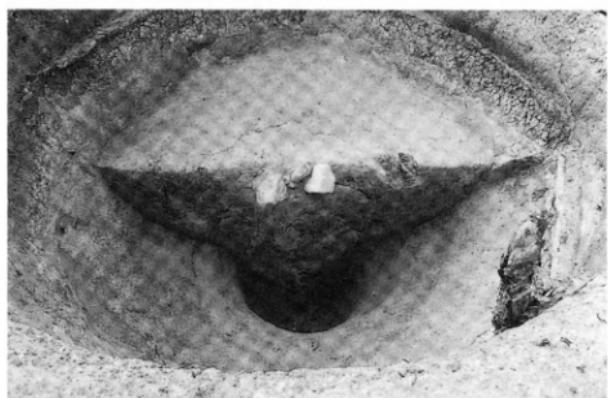
円形周溝造構全景（北東から）

円形周溝造構

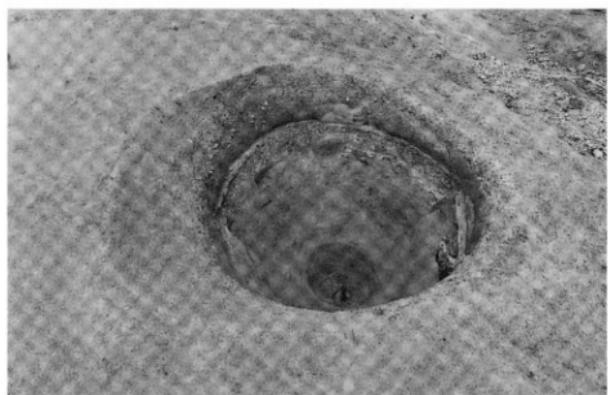
下 遺物出土状況（東から）

右 出土遺物

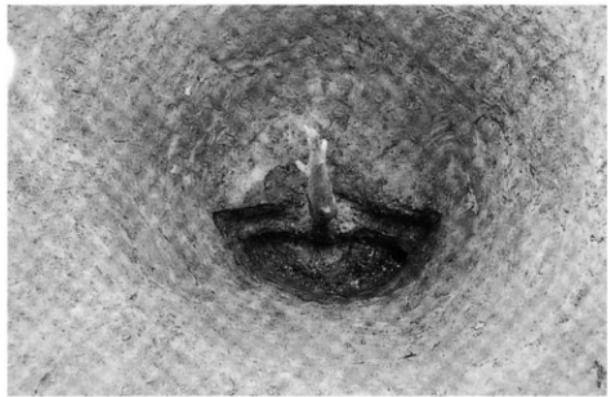




落とし穴全景（南東から）



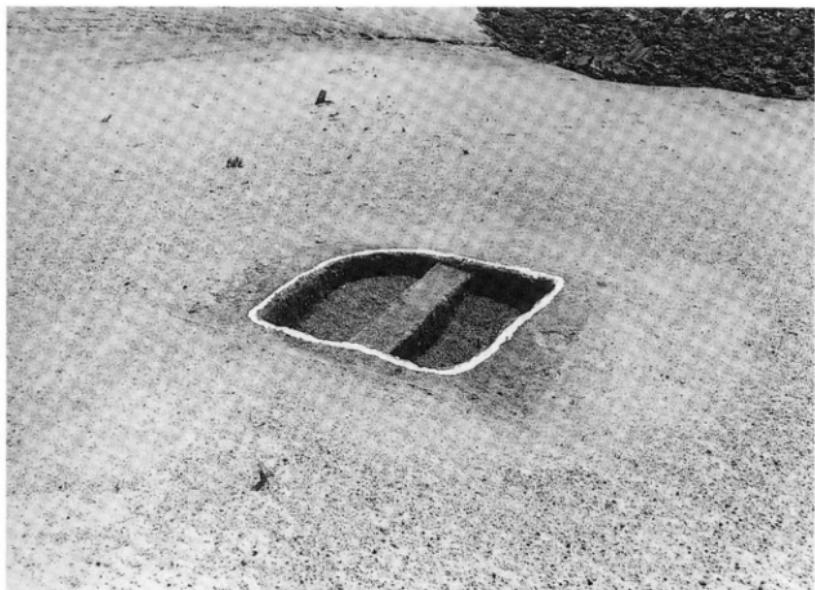
落とし穴完掘状況
(南東から)



落とし穴杭出土状況



焼土坑1全景（南西から）



焼土坑2全景（南西から）

河南町文化財調査報告第2冊
大阪芸術大学グラウンド等造成に伴う
東山遺跡発掘調査報告書

平成10年9月7日

編集・発行 河南町教育委員会
大阪府河内郡河南町大字白木1359番地の6
印 刷 株式会社 ジェクト
大阪市北区中崎2-8-13 香門ハイツ101

